ライダース・イン・ザ・スカイ

高橋小一郎先生追悼集

平成 27 年（2015 年）10 月

新潟県央工業高校（旧三条工高）山岳部ＯＢ会

ライダース・イン・ザ・スカイ

高橋小一郎先生追悼集　目次

「劔の詩」について－巻頭言にかえて　２

高橋小一郎先生　略歴　３

遺稿　我が青春の山旅　中断した俳句作り　より　６

遺稿　守門山の思い出　４２

遺稿　鹿教湯での二夏　４６

遺稿　生まれて初めて一ノ倉に入るの記　５４

遺稿　ライダース・イン・ザ・スカイへの寄稿文　５９

遺稿　高橋先生からの手紙　６８

高橋先生と山岳部員（卒業アルバムより）　７６

ご遺族のお言葉　８６

追悼の言葉（元顧問・ＯＢ）　８９

編集後記にかえて　１４０

劔岳頂上より八ツ峰上部を望む(2004 年 10 月早月尾根より日帰り山行時に撮影：斎藤　勲)

「劔の詩」について　－巻頭言にかえて－

早稲田大学山岳部で古くから歌われている「劔の歌」(ダンチョネ節の替え歌)があるが、これは高橋先生による新歌詞である。2010 年 12 月 11 日のＯＢ会総会で発表された。

「ライダース・イン・ザ・スカイ 40 周年記念号」の巻頭言に惚れてしまった山うんぬんの記述がある。高橋先生の惚れてしまった山のナンバーワンは劔岳である。劔岳に思いを寄せつつ、2010 年のＯＢ会総会に間に合わせるように詩作されたと思う。

上の詩の入った写真は、高橋先生が使われる絵葉書用にと猪熊さんにお願いして構成して貰ったものである。私が印刷したものを喜んで使って下さった。20 枚以上使われたものと思う。

高橋先生自費出版本の前半「我が青春の山旅」の結びの文章

(前略)劔が大好きで、大日岳から、室堂からと劔に入り、長次郎、三の窓と雪渓をつめた。帰路は足にまかせて歩く、一番安いコースの黒部峡谷を選んだことが多かった。(後略)

ＯＢ会会長　斎藤　勲

高橋小一郎先生　略歴

高橋小一郎先生　略歴

昭和二年		父新作・母志代の長男として生まれる。
昭和二十年	三月	三条商工学校第一本科卒業
昭和二十年	四月	長岡工専（現新大工学部）入学
	八月	学徒勤労動員で津上製作所に入寮。その夜長岡空襲に遭う。
昭和二十三年		長岡工専卒業
		この年、六三三新学制となり定時制も発足。
	同年九月	三条実業高校・定時制教師として母校に奉職。
昭和二十四年		全日制に移籍。（定時制にはその後も度々手伝い）
昭和二十九年		秀峰山岳会に入会。
昭和三十二年		下田村下大浦　延命寺　父山田宜範、母アツの次女寿美と結婚。
昭和三十八年		商工分離の趣旨により、三条工業高校設立、東本成寺の地に開校。
昭和三十九年		新潟国体、高校Ａコース監督。
昭和四十年		三条工業高校に移る。
		登山部顧問を務める（五十二年まで）。
		岐阜国体（槍・穂高）。
		この年より表彰制が始まり、望月力総監督の下、高校選手、白川敏夫（新潟工）、斎藤勲（三条工）を率いて三位入賞。
昭和四十一年	一月	谷川岳東尾根遭難救助隊の一員として熊穴小屋で活躍
昭和四十八年		新潟県高体連登山部委員長を二期務める。
昭和五十二年		日本山岳会越後支部・ヒマラヤトレッキングに隊員として参加。
		報告書をまとめる。
	十二月	脳梗塞発病、三之町病院を経て岩室温泉病院でリハビリに励み、翌年二学期より職場復帰。
昭和五十九年		三条工業高校退職（五十六歳）
	八月	身体障害者手帳（上下肢不自由三級）を受ける。
昭和六十三年～平成十八年まで		岩室温泉病院デイケアに週２回通う。
平成四年		三条体育功労者表彰される。
平成六年		高体連登山部シニア山の会の創設に発足より参加し加入する。
平成十八年	三月	肺がん治療で県立ガンセンター入院（八日間）
	十一月	右下肢急性動脈閉塞で立川綜合病院に救急搬送、即日入院手術。人工血管でバイパスを作る。
平成十九年		高体連登山部シニア山の会を、病気を理由に退会する。
	十月	傘寿を祝って、弟・姉妹等集う。

以上、「我が青春の山旅　中断した俳句作り」に記載された略歴より

平成二十年　八月　　「我が青春の山旅　中断した俳句作り」発行。
平成二十七年七月二十一日　肺炎でご逝去される。

遺稿

我が青春の山旅
中断した俳句作り
より

我が青春の山旅 中断した俳句作り

高橋　小一郎

自分史発刊にあたって

この年になると、周りに亡くなる人が多く、人間死ぬと骨以外に何も残らないんだなと思い続けておりました。

自分の生きてきたもの、生きた証しといったようなものを残して、生きているうちに、親しくして頂いた方にお渡ししておけたらと思いたちました。幸い大学ノート二冊分に整理して置いた記録があったので、秀峰山岳会望月力会長さんの死を期し、私家版を作ることに決めました。

人様にお見せできるようなものではなく、恥ずかしい限りの駄作ではありますがご笑納下され、読後感でも賜れば幸いと思っております。

平成２０年８月２５日

我が青春の山旅

（１９４３年～１９５４年／１７歳～２９歳）

１９４３年７月

守門岳

長商四年の夏休みを利用し、栃尾出身の葛綿君が案内してくれるというので、山に対する心構えもなく出かけた。全く初めての山であった。

葛綿君は栃堀の登り口まで知っていたが、後は全然駄目で、五万分の一の地図のみが心頼みであった。沢を違えて炭焼き道に踏み迷い、炭焼きの人から教えられて、ガムシャラなヤブこぎをやって、日暮れにやっと営林署小屋に着いた。空腹と疲労

の体を横たえることが出来たが、ひどい蚊の猛襲で板の間を転がりながら暫く仮眠した。

翌朝それでも元気で出発し、道を急いで頂上へ昼過ぎに着いた。しかし雷雨に遭い、昼食もなし得ず、吉ヶ平降り口のガレた沢を下り始めたが、飛び石伝いの沢下りは空腹の体にはこたえ、目まいがするようだった。

途中、沢に深く入り過ぎ、道を失い、面倒だとばかりに強引に腹まで川に漬かって下ったが、一向に道はない。

段々と日も山の向こうに入り、沢は暗くなる。深い所は岸のガケのヤブこぎ、可能な限り川に漬かって小走りに急いだ。

暫くして人の足跡(地下足袋跡)を発見し道を見つけ、急ぎに急いだが鉱山飯場のところで遂に日は暮れ、グシャグシャの重いズボンとペコペコの空腹のままで恋しい灯のある部落へと強行軍をやった。よい月の晩で、三人は重苦しい気分のまま、口もきかず、ひたすら歩いて八木部落に着いたのが十時であった。分校場か役場の電話で家へ連絡し、八木館で夕飯をガッツいて、やっと人心地がついた。

この苦しい山登り、空腹とガムシャラな苦闘と不安の二日間が、山に対し何か教えられるところがあった。その直後はもう真っ平だとばかり思っていたが、吉平君と後で話すたびに次第に何かしら山に惹かれるものがあった。

初心忘る勿れ。

山は恐ろしい、しかも楽しい。そこには人生の断層がある。山で多くを学び、多くを楽しもう。

― 亡き親友、吉平君の霊安かれと祈りつつ ―

パーティー　五十嵐吉平、葛綿、高橋

コ　ー　ス　栃堀―営林署小屋(泊)―ホッキュレ小屋跡―山頂―吉ヶ平―八木(八木館泊)

１９５４年7月２４日～３１日

北アルプス縦走

パーティー　外山、近藤先生、高橋

コ　ー　ス

２４日(晴)　三条駅(１０：０８)―(１６：０１)長野(１７：２５)―(１９：２０)松本
松本清水町中区１６６９(白瀬幸恵方)、後藤甚四郎(近藤先生友人),後藤君下宿にて一泊、青木先生父君もかつて泊まられた家との由。

２５日(晴)　起床(６：３０)―バス駅前(８：１０)―(８：５５)小倉村小休止(９：０５)―(９：３５)黒沢入松林(休み)―(１０：１０)不動明王(休み)―(１０：５０)マキ小屋(１４５０ｍｈ)―(１２：００)ナメシの頭(北沢：黒沢合流点)―(１２：４０)休み―(１３：２５)休み―(１４：００)冷沢(昼食４０分)播隆上人野営の地(１４：４０)―(１５：２０)休み―(１５：５０)休み―(１６：１０)槍見ゆ、ファイト湧く―(１６：３０)休み―(１６：４０)八丁ダルミ―(１８：４０)ダンボランの眺(穂高連峰の眺めに茫然)―(１９：００)大滝小屋

２６日(晴)　起床(５：００) ４０分ご来光待てどガスにて不調 朝食(６：００) 小屋(７：００)―お花畑(７：４０)―瞑想の丘(蝶ヶ岳)(テント場、小屋立予定)大休止(９：００)―横尾根分岐点(９：２０)―(９：３０)蝶ヶ岳三角点(１０:００)―(１０:２０)最低鞍部―(１１:００)ミジンコの池(昼食)(１１:３０)―常念登り(１２：００)―ガレ取付、残雪東側(アイス作りに４０分)(１３：００)―(１４：３０)常念山頂(眺望を楽しむ)(１５：５０)―(１６：１５)常念小屋 夕食(１９：３０) 就寝(２０：００)

２７日(雨)　起床(５：００) 朝食(５：３０) 小屋(６：０５)―(７：０５)休み(５分)―(７：３０)分岐点―(８：００)親子雷鳥―(８：１０)燕合流点(大天井)―(８：３５)ガレ場(休み)―(９：０５)休み(５分)―(１０：００)山頂(休み２５分)―(１１：００)西岳小屋(昼食)(１２：００)―(１４：３０)分岐点―(１５：１５)肩の小屋 夕食(１９：００)

２８日(雨：風) 肩の山荘(９：００)―中ノ岳(９：５０)―(１０：１０)休み(５分)―天狗原：槍沢分岐点(１０：３０)―南岳(１０：５５)―(１１：１５)大切戸(休み、ガス晴れ間有り)(１１：５０)―(１３：４５)休み(激風雨)―(１４：４０)北穂小屋 夕食(１９：００) 就寝(２１：００)

２９日(雨：風)起床(６：３０)　朝食(８：００)　一日雨とガスにて小山さん山男等の話に興ず

３０日(雨)　朝食(８：００) 起床(９：１０) 北穂小屋(９：４０)―(１０：４０)涸沢テント場(１１：４０)昼食(１５分)―(１２：３０)横尾山荘―(１３：５０)徳沢園(ドシャ降り)―明神池(１４：００)―上高地(１５：３０)―(１６：００)西糸屋(夕食、パンにチュウ)―都立高校先生と同宿

３１日(晴)　西糸屋(６：３０)―大正池 - (バス) - 島々―松本―篠ノ井―長野―三条(２０：４８)

北ア縦走、今夏最大の山行計画。休暇に入る前から、コース、日程、費用等々十分準備をして置いた。あこがれの未だ見ぬ、踏まぬ、槍、穂高へ。休暇一週間前は心もそわそわ。

二十四日の晩は駅のベンチでゴロ寝の覚悟でいたが、後藤君の下宿にてゆっくり休む。松本の街は夏祭りで賑やかだった。山の店への伝言がてら街を散策する。堀端の花売りの夜店が美しく並び、夕涼みのひとで賑わっていた。

二十五日朝バスまで送ってくれた後藤君に厚く礼を述べ、小倉村には８時５５分に着いた。

黒沢口より入る。夏の陽に焼かれ、リュックの重荷がこたえて、初めてのコースとて不安も混じり、マキ小屋で山の人に尋ねるまではやや不安だったが、ナメシの頭ももう直ぐとの事。一服し水を飲み、道は林道を縫ってナメシの頭に１２時着。

ここが北沢口との合流点。冷沢まで頑張って２時着。やっと昼食だがコッペしかない悲しさ。コッペを冷たい水で押し流した。ショウガの赤漬けはうまい。北ア開山の祖播隆上人が槍への拠点にしたゆかりの地。ここからは次第に針葉樹も増えてくる。鶯、時鳥が鳴いている。次第に肩の荷がこたえ、アゴが出てくる。

４時１０分、先頭の外山さんの「槍だ、槍が見える」の声にファイトを出す。待望の槍が木の枝を透してあの鋭い穂を天空に突き上げている。「槍だ、槍だ」遂に槍の見えるところまで来た。何となく感激が湧く。しかし残念にも直ぐ深い林にさえぎられ、再び薄暗い針葉樹林の道を歩かねばならない。尾根が見え始めてきた。弥彦山のような感じの道で、尾根も間近に見えているが山が深いせいか中々稜線に達しない。アガいても駄目とあきらめ、元気の良い外山先生から先行になってもらい、稜線が見えてきたら声をかけてもらうことにして、近藤さんと後を行く。最後の大休止。氷砂糖をなめ、ゆっくり一服して外山さんの声のかからぬうちに出発する。

急な登りを七折八折している中に上の方が開けてきたら、草付で稜線が見える。ヤッホーと、声をかけたばかりの外山さんの大きなキスリングの後姿も頑張って登っている。やれやれ八丁ダルミだとはずむ息をキスゲの叢の中に休めて、後は足がズルズル滑る急な登りを頑張る。喘ぎあえぎ登る中に、ハイマツも目に止まる。

稜線近しと思うと元気も出て頑張る。足下に視線を下げて頑張っていたら空身の外山さんが何かわめきながらやって来た。十歩ばかりでヒョイと稜線に出た。外山さんの指すほうを見たら凄い凄い。迫るような山容の壮。あれが北穂、あれが大キレット、あれが奥穂と教えられている間に、いつの間にかリュックを肩から外したのか空荷になり、胸を開き、大きな深い息を吸って、夕陽に映える穂高連峰の荘重さに強く打たれ声も出ない。「凄い、もの凄い、ウワーッ」何を叫んだか判らんが、こんなことを口走ってしばし茫然。

やがて煙草に火をつけて右から左へと一つ一つ、峰、鞍部、雪渓を眺める。しっかり立っていないと押し倒されそうな威容。これがダンボランの眺めで、時正に６時４０分。上部はガスで槍、北穂は見えないが、大きくえぐられた大キレット、涸沢より前穂の大きな谷を埋める雪渓、青く輝くばかりの山肌。夕陽で赤く染まった空をバックに、そそり立っている。

やがて近藤さんも来てシヤッターを切る。稜線を右の穂高の山々を眺めながら大滝小屋の夕暮れ迫る道を急ぐ。時々立ち止まっては又眺める。生きたフィルムにしっかりと焼き付けた。忘れ得ないダンボランの眺め。大滝小屋着は七時。

空いた部屋の窓に居を定め、夕焼け空を眺めながらのチュウのうまさ。今日一日中のアルバイトも忘れ、明日への希望が湧く。

明日はあの山を眺めながらの楽な常念までの縦走。遅い夕食をランプの下で食べ、チュウの淡い回り具合も快く、縦走第二日目、大滝小屋の夜は更けていった。

二十六日朝、窓を濡らす濃いガスに包まれた小屋の朝。朝食後清爽の気分で眺める今日の穂高の山々は如何にと、支度の遅い二人を小屋に残し、大滝山頂にてガスの晴れ間を待つが、全然駄目。あきらめて、今日は悠々と暢気に楽しめる楽な日程ゆえポツポツ出かけることにする。

大滝のお花畑と白樺の美しい道を蝶ヶ岳へと鞍部へは相当に下る。

ナンキンコザクラ、キンバイの群落に所々池塘もあり湿性のお花畑に７時４０分着。ガスも晴れ、気分が良いので先ず一休み。

ここからは登りにかかって道は稜線の横をからんで右手には松本平が広々と緑の織布を広げて見える。やがて瞑想の丘(今夏中に小屋が出来る由でテントも張られ、用具も相当運ばれていた)に達したのが８時３０分。稜線を反対側の穂高側に出たので左手の横尾の小屋、上高地、赤岩岳、西岳等々がよく見える。

北鎌尾根から槍、大喰、中岳、南岳、大切戸、北穂と続いている。明日はあの喜作新道を越して槍まで。随分大きく回って越えて行かねばならんようだ。

ハイマツのハンモックに身を任せて一服しながら山容の壮を眺める。ここに建てる小屋は大滝小屋の主の経営との由。テントのそばに池もあり水も割合きれいだ。眺望の良い小屋が建つことだろう。３０分の大休止を切り上げて９時２０分に横尾への分岐点。９時３０分蝶ヶ岳三角点着。

再び下り、ドンドン残念なほど下る。下りきったところがミジンコの池で、１１時着。

ミジンコも腹に入れれば栄養と大滝小屋で作ってもらったマズい握り飯を頬張る。近藤先生も食欲なし。水も大いに飲む。この辺から常念を朝発った人達に大分多く逢う。蓬峠で腹痛の志田さんが世話になった日赤の医師に会うが挨拶し損ねて、ただコンニチハだけ。外山さんはミジンコを手拭でこして飲む。ドロップ、氷砂糖もうまい。微細な赤いミジンコを避けるべく慎重に唇をつけて水を飲む近藤さん。ハクサンコザクラが美しい水辺での昼食休みであった。昼食で満腹になって昼寝をしたいところだが、まあまあと出発。

常念への登り、ガレの取付に出たのが１２時。東側に残っていた雪を掘って飯盒につめ、アイス作りに４０分の大休止。仰ぎ見る常念はなかなか良い形をして我等の登高を待っているが、アイス作りに余念なし。

重き荷を下ろして軽く雪の上

飯盒の雪どけの水順回し
岩に咲くコケモモに水そっと捨て

雪渓の雪をとかして小１時間、常念鞍部に憩うものどか。

解けた水を水筒に詰めて出発は一時、外山さんは長いコンパスでドンドン登る。手も使わねばならんような岩カケの道。岩についた青い苔が美しく眼に映る。ここからは頂上を見上げながら喘ぎ、登りを頑張って２時３０分常念山頂に立つ。

祠が安置されているが、狭い山頂で展望台の銅盤が大きく場所を占めている。全く常念は素晴らしい展望台だ。北アルプスの眺望のために出来た山、これが常念だ。北に向かっては東天井、大天井は縦走路が手にとるように見える。燕がこの両岳の間に特徴のある山容をのぞかせ、遠くは後立山の連峰が雲にかすむ。大天井からは赤牛、水晶と、更に喜作新道が坦々と平らなアルプス銀座の往来を南に伸ばし西岳に達し、槍はその後ろに北鎌尾根を右に、左は大喰、中、南を経て、大切戸から北穂：前穂：奥穂と秀峰が波打っている。槍の穂先の天空を突く威容が、ガスで見えないのが全く残念。

更に南には西穂から焼と続き、梓川：上高地の谷を経て、昨日今日と歩いてきた大滝：蝶ヶ岳が手にとるように見られる。大滝小屋の屋根が光って見える。

東の方は松本平：信濃平野が千曲川の蛇行を抱き、遠く浅間等はかすんで見えない。

幾山河越えたる方に君住むか　東の空遠くかすみて

風をまともに受けては寒いくらいなので、風の当たらぬ陽光で岩の上に長々と体を伸ばして寝そべって、うっとりと眺望に耽る。

常念のぬくもる岩に寝そべって　倦むことのなし北アの連峰

越後の山郷の人懐かしい味も良いが、五千尺の高峰を眺める北アの縦走またよきかな。

これでは全く、山は登るためにあるのか、眺めるためにあるのかわからなくなる。口笛を吹き、合唱も楽しく、時の経つのも忘れて、氷砂糖をなめながら紫煙をなびかせて山頂にて眺望を楽しむこと、もうかれこれ１時間以上。やがて４時にも近いので、ただ槍の見えないのを心残りに、すぐ足下に見える常念小屋までガラガラ崩れる下りを、後ろ頭が痛くなり膝がガクガクするほど飛ばしてかけ下り４時１５分小屋着。先客も多いが陣取ってオミキを奉納するにおよぶ。葉書を家とＳ：Ｙ宛に出す。

良い食事の夕食が７時３０分、８時にはもう就眠してしまい、腹一杯のままで直ぐ眠ったためか翌朝は何となく腹が張っている。

二十七日５時半朝食を済まし、雨の中を身支度を整えて出発。

雨は時々晴れるが、晴れても濃いガスで昨日の快晴は何処かへフッ飛んでしまった。雨に洗われた東天井の石英斑岩の砂の道は美しい。

雨中を散歩する親子連れの雷鳥を見たのが８時。８時１０分燕合流点着。大きな雪渓有り。寒くて休むことも出来ずドンドン歩く。ガレ場で道を失い、外山さん苦闘す。

大天井のキンバイの咲き乱れる谷間は雪渓に適当なハイマツを交え、

しとねなすキンバイの咲くこの谷間　かの人と共に自然に抱かれん

大天井からは喜作新道を坦々と。よくもまあこんな立派な道をつけられたものと喜作なる山男に感心し、感謝する。カモシカ狩りで雪崩に遭い、あたら命を散らした由。惜しい人を失ったものだ。

アルプス銀座は行き交う人も多く、今度は昨日の常念を眺め、お花畑の道を息も切らさず歩くことが出来る。しかしどうも腹の具合がよくない。脚も軽くはないし、肩の荷が一番こたえる。膝のバネも利かないので肩の荷がこたえてくる。

喜作新道の良い道がヒョイと稜線の上に出たのが１０時。２５五分の大休止。ゴナゴナした。もう一頑張りフン張って西岳小屋着一一時。小屋に入って昼食。小屋は腰を下ろすのも気兼ねが要る。昼食はさしてうまくないが、無理して食べる。腰が落ち着いたら立つのも嫌なくらい疲れを感じている。

１時間の大休止で１２時出発。ガスで槍は見えないが東鎌はずいぶん下ってまた登っている。親父くらいのお父さんを頭に、娘さん二人に息子さん二人の元気のある家族連れが入れ替わりに小屋に着いた。

１時頃少々ガスも晴れ、槍沢が見下ろされる。ここで小休止。脚を投げ出してぐったり。ここから肩の小屋までは全くゴナゴナだった。後で記録を見て驚いたが、まるで３、４時間も苦闘の連続だったようにその時は感じ、ついに音を上げたが、外山、近藤の両兄に励まされ、風雨を衝いて八十五，八十六と歩数を数えながら一歩一歩、ともすれば腰砕けになるのを励まして頑張った。

殺生小屋分岐点から僅か４５五分くらいの肩の小屋までの間は我ながら必死だった。一言も発せず、黙々と念仏を唱えながら歩いたようだった。こんなに、気が弱くなるとは思われなかった。せめてガスでも晴れて槍が見えればファイトも湧くのだが。

ずぶ濡れになって新装の肩の山荘の雑踏する玄関に転げ込んだ。

駆け込んだ玄関で「ご苦労さん」と赤いセーターの似合う正ちゃん帽の娘さんに言葉をかけられたときは全く生き返る思いだった。直ぐ部屋（と言ってもゴロ寝の船底のようなところ）を決めて貰って、濡れたものをすっかり脱ぎ体を摩擦してやっと人心地がつき裸のままで布団に潜ってチュウを飲む。西岳で入れ違いになった親父さん一行は既に着いて我々の前で談笑している。あの親父よくも頑張ったもの

だと感嘆する。チュウが一向に効き目を出さないのでグイグイやる。腹の具合はさして悪くもないが、用心して外山さんから熊の胆を貰う。よくもまあへばったものだ。小屋に着いたときは、これで助かったと思ったのだから情けない。時刻にすれば未だ3時１５分、小槍云々はさわらぬ神にと、触れずに置く。しかし両兄とも小槍をと言い出さないのはもっけの幸いである。今夜はゆっくり休んで明日のファイトを養っておこう。

翌二十八日、第5日目。朝からの風雨。張り合いもなく遅い朝食でグズグズしている中にもう8時半。晴れそうもないので覚悟を決めて、９時肩の小屋を赤いセーターに送られて出発。風も相当にある。雨混じりのガスで視界は全然だめ。

大喰の岩の間にテントを張って中で歌っているものがある。「ここは大喰でしょう」とテントを通して聞いたら、槍だ、と言った切り又歌いだした。食器も雨中にほうり出したまま天下泰平な奴共だ。

中岳着９時５０分、二十分休み、天狗原、槍沢の分岐点１０時３０分、依然としてガスは晴れない。雷鳥がヨチヨチと雪渓の上を渡って逃げて行く。

１１時に南岳より大キレットにさしかかる。

晴れ間があったので大急ぎでカメラを出し、ついでに昼食にする。風が強く新聞紙が飛ぶ。風に重心をかけて写るポーズを構えていた外山さん、急に風が止まって危ない足場でグラッとなる。大キレットはさすがに足場が悪く、両手を使い、針金につかまり、後ろ向きになって降りねばならんところもある。

キレットの底の頃から雨風も激しくなり、しかも次々と慎重にホールドを得るために一歩毎に顔を上げねばならず、汗と雨が混じって眼に入り、疲労が加わってくる。だが昨日の東鎌のラストよりは体の調子が良い。外山さんに遅れず頑張ってついて行く。雨のため殆ど休む暇もなく煙草も喫わないので、息は大して切れないが、緊張の連続にはファイトも鈍りそうになる。

最後の休みを１時４５分にやって、後は岩についた目印(雨のなかでもこのペンキの白色は相当よく見える)を外さないよう、足がかり、手がかりに慎重な注意力を集中し、歩一歩と北穂の小屋に近づく。北穂岳北峰のはしごの急峻な道を越えラストヘビーで頑張ったら、小屋の屋根が見えてきた。喘ぎ登りつめ、天水桶に溢れる水を見るや物も言わず外山さんと同時に手を突っ込んだら、割れ鐘の如き声あり。何を言われたのか判らないが何かドヤされたらしいので、あわてて手を引っ込めたが、外山さんは一杯ゴクリとやった由、後で声の主が北穂のご主人小山義治さんと知り、とんでもない処を見つかってしまったと口惜しがったが後の祭り。

「小屋へ入ってお茶を戴こう」と小屋の戸を開ける。正面に人相のあまりよくないのが長い飯台に対座して三、四人我々一行をジロリと見る。何かかんか挨拶して上がり込み丸出しになって着替えをすます。張り紙でウドンのあるを知り、早速熱いのを三杯注文する。

北穂小屋熱きウドンをふるまわれ　人心地つくその味賞でつ

ガヤガヤやりだしたので、先客一行は二階のふとんの中で車座になって何かボソボソやり出した。他の客も下にいたが、皆何となくムツッとした感じで押し黙っている。何か威圧されるような迫るような空気が感じられる。殊に眼鏡をかけた娘さんを交えた高校生らしい四、五人連れは下の隅にひとかたまりになったまま、ただ座ったままで口も体も殆ど動かさない。変だと思っていたが、後で事情が判って都立高校の生徒が一名ザイルが切れて墜落し、死体を探しているのだとの由。着替えを済まし、ウドンで人心地もつき身の回りも整理して、さて一服という頃、外山さんは望月さんのお墨付きを持って挨拶に行く。近藤さんと聞き耳を立てる。話がうまくいっているらしく笑い声が洩れてくる。

壁板に寄りかかり煙草をふかしながらやおら部屋を見渡す。屋根裏を数に入れて三階造りだが立体的に狭い空間をよく利用してある。暫くすると台所からサンチャンとか呼ばれる人が出てきて我々のために綱を張り物干場を作ってくれた。

玄関の破れた窓からは盛んにガスが入って来る。しずくの垂れるものを玄関口に近くブラ下げて置く。２時４０分に着いたので、夕食までゆっくり出来る。

周囲の人たちのヒッソリにつり込まれて、ヤジキタ三人組もつい声も低くなり、記録を整理したり、ぼんやり窓のガスを眺めたりしているうちに、ドヤドヤと高声を発しながら元気の良い素っ裸の一行が入ってきた。我々も小屋に入る時はこんな様子だったと思うと、ふとおかしくなる。

都立高校の遭難救援に、涸沢のテントから雨をついてやってきたようだ。興奮した口調で、だがテキパキとどうやら活気付いて、先刻来のダマリ一行との間に連絡や報告交換やらが始まった。我々三人はシンとして耳をすまして聞いている。都庁の役人の非が鳴らされている。金には苦労しているらしい様子だ。切れたザイルが遺骸の如くガスの吹き込む窓辺に吊り下げてあるのが、何か痛々しい感じだ。小山さんの話を聞いてきた外山さんが低声で事情を説明する。今夏は殊に遭難が多い由。

北穂高遭難の人多うして　命大事に山を愛さん

夕食は７時。望月さんのお墨付きにより丼は特に大盛りを振舞われた。

夜小用に立てば小屋の灯がガスに射して、ブロッケンの如くガスの中に後光が浮いていた。

二十九日、気持ちよい目覚めが６時半。暢気な朝食を戴き、ガスのため一日停滞と決める。小屋の人達とも段々口をきくようになり、ウィスキーさえご馳走になり、すっかり腰を落ち着け「将棋か何か」の近藤さんの名セリフで将棋の駒を拝借して選手権大会をやる。「負けた」と言えない近藤さん。「マ」を発言してみなと言えば「カ」と大きい声でいう負けじ魂にはさすがにあきれて、こちらが遂に負けてしま

った。小山さん等（平澤先生、サンチャン他二名）は朝食の後片付けも何処へやらウィスキーでポッポ、ポッポと漫談、Ｙ談に花を咲かせている。

台所に呼ばれご馳走になりながら話の仲間に入る。

１２時近くになってやっと朝食の後片付け。次は昼食準備かと思っていたら、そのまま昼寝ときた。これじゃ腹がへってとてもかなわない。あきらめた我々も暢気に構えることにして再び布団の中でモゾモゾやっている。３時頃やっと「どうも遅くなりました」と昼食。

夜は食堂兼茶の間に皆集まって山の話に耽る。まるでホラ吹き大会。冬山の話は殊に興味深く腹の皮のヨジレるうちにも何か教えられるものがある。小山さんはホラ吹く時と、そうでないマトモな時では話の調子が違うことが判った。ただの小屋の主人ではない。何かしっかりしているものを持っている人らしい。救援隊長の出した豆をポリポリかじり、話は次から次へと果てしない。とうとう１時過ぎになってしまった。

漸く１時半頃、明日の朝食はお客がやって、小屋主に食べさせることにしようとか何とかで、我々お客は北穂の小屋では、今晩の客は客種が悪いことにされてしまった。

翌三十日はすっかり全員寝坊して８時過ぎ朝食。再び床の中にもぐって９時１０分起床。もう一日泊まったらという小山さんの誘いにつられずに９時４０分出発。西穂回りの予定を変更し涸沢の下りに決定し、ガスの中を小山さん等小屋の人達に別れを告げて二晩の思い出多い北穂の小屋を、秋に再び訪ねることを約して一路涸沢へ。ウジャウジャとテントの多い涸沢テント場はテントのコンクールの如し。

徳沢園からはすごい雨に見舞われ、明神池はドシャ降りの景観だった。この雨で、バスは不通になり遂に不愉快な一夜を西糸屋でみすみす五百円が最低の素泊まりで空きっ腹をチュウとアンパン（コッペはなし）一個くらいでごまかして、明かすことになったのは全く残念。上高地は神高地にあらず、紙買地なり。

人出少ない晩秋の頃ならきっと素晴らしいだろう。何時かそんな上高地を訪ね清遊の気分にひたってみたいものだ。

かくて今夏の最大の山行たる北ア縦走も数々の思い出を残して汽車の振動に身を任せて終わりを告げた、というようなもんだろう。

結　び

若い頃気ままに山に親しんでいたが、箕浦先生の影響か秀峰山岳会に入れて貰い、山の活動が本格的になり、登山部では、守門（又は粟）、朝日連峰（又は飯豊連峰）、北アルプスとローテーションを繰り返して春：夏の合宿をしてきた。

剣が大好きで、大日岳から、室堂からと剣に入り、長次郎、三の窓と雪渓をつめた。

帰路は足にまかせて歩く、一番安いコースの黒部渓谷を選んだことが多かった。

高校登山部では、大先輩で大功労者の杉浦英午先生の跡を継いで、委員長を二期務めた。

そして病後山を引退し、登山部顧問のシニア山の会に加入したが、何も出来ないまま平成十八年に病気を理由に退会した。

今年十月息子に連れ出されて、守門の麓、二分口から保久礼に入った。かまぼこ小屋は懐かしかったが、清水は涸れ、沢筋には重機が入って堰堤工事が進められていた。山が壊されていくような気がして寂しかった。

中断した俳句作り

まえがき

三条工業高校在職中、同僚の成田浩三さんが、職員の同好会の形で、初心者から俳句をご指導下さったのが「榧(かや)の実会」(昭和五十六年)で、その後、成田さんが同人として参加されていた齋藤美規さん主宰の「麓」に入会させて戴いたのが昭和五十七年だったと思う。

月に五句提出して主宰の選を頂く訳だが、毎月二、三句しか採って貰えない。それでも恥をしのんで、全国大会にも参加させて頂いたりしたこともあったが、退職してから暇にまかせて釣りに熱を上げ、いつしか五句作ることが苦痛になってきた。これではダメだと平成八年頃に止めてしまった。

以下は「麓」で入選となったものを、恥をしのんで、傘寿を迎えた記念として、又生きた証としてまとめたものである。前半の山旅が青春期なら、これは晩年の我が生きざまとでもいうものでありましょうか。

句の次の文は毎月の投句の際、主宰である齋藤美規先生との対談のつもりで書いていたものです。折々の出来事、感想なども込めながら。

昭和五十七年

二月三日　榧の実会

つかの間の冬晴れ鷺(さぎ)の首朱(あか)し

閉ざされて確かな流れ雪の川

例年のことながら学年末、入試と続く気ぜわしい日々の中で平常心を支えてくれるものが盆栽でありましたが、今は俳句が加わったことを小生にとっては喜びとしております。

花物が順に咲くのを楽しみながら季節の移ろいに素直に句作に励みたいものと心掛けております。

あまり力み過ぎないようにしながら小生なりに。

六月　麓

石斛(せっこく)の新根(しんね)浅緑雨催(せんりょくあめもよ)い

黒土の湿りにうどの株朱(あか)し

念願の双眼鏡を贖い、弥彦山麓探鳥コースを愚妻を伴に歩きました。鳥よりも草花の好きな彼女、鳥を求めて樹上を仰ぎ、足元もままならぬ小生との二人連れ、ちぐはぐになりながらも早朝の山気にひたり、若葉の精を吸い込んでの楽しい半日でした。さわやかな晴天続きの入梅を喜んでおります。

七月　麓　一周年記念号

背の順に並び緑陰(りょくいん)紙芝居

青嵐(あおあらし)三代の墓尾瀬守り　　(三代＝長蔵小屋三代の墓が小屋近くの柳蘭の丘にある)

七月上旬、若い人達の家族連れに混じって尾瀬へ行ってきました。沼山峠から尾瀬沼への往復コースは小生の足でも歩ける道程ですが、かつて銀山平越えで入ったことを思い比べて今昔の感ひとしおでした。桧枝岐もすっかり姿を変えていました。民宿の老主人と昔話をしてきました。

十月　麓

あがりこむ鉱泉宿の草虱(くさしらみ)

鉱泉の湯のゆるやかに里の秋（長谷川チャボと金割鉱泉へ）

十一月　麓

振り向いて人影のなき朴(ほお)落葉

程よきを篭(かご)に分かちてしめじだけ

十一月二十三日、銀婚の日に弥彦へ菊見に参りました。残念ながら花はもうさかりを過ぎていました。帰途五年振りに岩室病院に寄ってみました。当時の同室の将棋友達に会うことができました。勤めていられる幸せをしみじみ感じてきました。

昭和五十八年

一月　麓

去年今年(こぞことし)一羽の鷺(さぎ)が川に立ち

三月　麓

凍(し)み返る雀の掘りし鉢の土

六月　麓

背の曲りあらわに母の夏衣(なつころも)

二十六日の俳句大会の折、加藤季騒氏が遠路わざわざ糸魚川真柏の鉢を持参下され成田さんが家に届けて下さいました。本当に有難いことで喜んでおります。物の本で糸魚川真柏のことは知っておりましたが、頂いた本物により、本当にその良さを知りました。小生の愛育中の四、五鉢は顔色なしといったところで、手放せぬものが一つ増えました。これも俳句の取り持つ縁かと心に刻んでおります。

七月　麓

鷺草(さぎそう)の鷺となる日の蕾(つぼみ)立つ

カッコウ、ホトトギスの声が聞かれたのも僅かの間。近年野鳥の棲む生態が変って来たことは報ぜられておりましたが、小生の住む街中でもその感じがあります。カラスが早朝街中でゴミ袋をあさり、尾長が朝夕鳴きわめき、鵯(ひよどり)もすっかり町の住人となっているようです。
その反面、かつて見ることのできたコサメビタキもヨシキリなどの夏鳥の姿が消えたのは残念です。

八月　麓

気がかりのことをなし終え遠(とお)花火

上の歯がすっかり駄目になり、入れ歯というものを覚悟しましたがこれが七月末から未だ出来ず、麦や米の精とそうめんで一夏を過ごし、遠出もかなわず、もっぱら近くの五十嵐川で鮒釣りを楽しみました。梅雨明けの出水には、形の良い鮒がつれ、朝夕通っていたら、尺余りの鯉がかかったりして、曜日も忘れての釣り三昧の夏休みというところでした。
残暑の酷しい中で二学期を迎えそうです。

九月

ランドセルぶら下げ帰る残暑の児(こ)

酷しかった残暑もおさまり、秋風の中で忙中閑ありと釣りを楽しんでおります。日照がよかった故か、サツキ、ミヤマキリシマ、シャクナゲなどよい花芽をつけてくれています。
鍛錬会はよい勉強になりましたが疲れもしました。茸の便りが待遠しい此の頃です。

十月　麓

秋冷(しゅうれい)や梅酒の瓶(びん)の琥珀(こはく)色

木犀(もくせい)の匂ふキャンパス日曜日

今年の茸は遅れて一度に出たのか千本しめじ、株こそ見つけませんでしたが、種類も量も多かったようです。
月初めに三十五周年の同級会が熱海で開かれ、定年を控えながらも元気な旧友達に会いました。娘の結婚で不参という者も二，三名あり、歳を感じさせられました。
雨中茸採りを初めて経験しました。(後で風邪を引く。)

十一月　麓

秋冷の釣れし小鮒(こぶな)が手に温(ぬく)し

雨中の茸とりがたたったのか、それ以後の風邪が抜け切れません。そんな中で三日母と東蒲三川温泉、十一日山岳部ＯＢ会で南魚巻機山の山小屋、二十三日はひとりして下田の山へと晩秋から初冬へと足早に移りゆく山麓に抱かれてき

ました。山小屋では新雪の朝の気に身を引きしめました。春までの雪に耐える暮らしが始まろうとしています。

十二月　麓

鳰（にお）の鳴く向う岸から暗くなり　　（にお＝カイツブリの古名）

教え子が山雀（やまがら）を二羽届けてくれました。すり餌の方が長生きし、しかも馴れるのが早いというので、冬休みでもあり、のんびり山雀と日を過ごしています。十年程前にも飼ったのですが事故にあって長く飼い馴らすことができませんでした。今度は春には退職し自分の時間がありあまるので、よく馴らしたいと思います。そしてもう一つの生き物として柴犬を飼いたいと今から心当たりに口をかけています。一年が早過ぎる程ですが、来年もよろしく、よいお年を。

昭和五十九年

一月　麓

白鷺（しらさぎ）の居て真冬日の川に立つ

酷しい寒さと雪ですがそれでも当地では雪下ろしとまではならず、助かっております。帰途に日が伸びたのを知るようになりました。雪に埋もれた暮らしの中で春の来るのを待っています。

二月　麓

道譲（ゆず）る人の匂へり深雪晴（みゆきはれ）

酷しかった寒さも峠を越し春に向かっていることが感じられる此の頃、下屋の雪の下から鉢物を取り出しました。温かい雨が待たれます。そして釣りのできる日が‥‥。

三月　麓

翡翠(かわせみ)の藍(あい)が一瞬春の川

やっと春らしい日。散歩に出たい気になったのは、今朝初めて。川の水具合を見て早々に引きあげ、朝食もそこそこに竿を持って久しぶりの釣りに満足しました。

川岸鵯(ひよどり)かなんかの死骸。そして元気に鳴く小鳥達や、燕さえ、春まで耐えられずに死んだものと、春を喜ぶものと「緑の国勢調査」に応募しました。

四月　麓

温かき日の三日あり梅桜

三月末で退職しました。

山雀と柴犬を飼い、釣り三昧の日々を過ごしています。朝夕、犬を連れて五十嵐川の岸辺を散歩するのが楽しい日課となりました。近くの五十嵐川で山女の釣れたのには感激でした。

五月　麓

午後からは雪しろの押す濁(にご)り川

一九〇〇年生れの恩師を生地土浦に訪うべく三十六年目のクラス会に出かけました。霞ヶ浦を知っている友人の話では随分変わったとのこと。十年前のクラス会の土浦駅の様変わり。戦後を生きてきたことと、今日の繁栄と自然破壊などがしみじみと、年齢とともに語られる場面があるクラス会でした。(父入院)

六月　麓

朱鷺(とき)色の花の盛りのサツキかな

老いらく山岳会の安達太良山行に夫婦で参加。霧雨の中の強行で途中から退却しました。

霧に濡れた五葉松の新緑が見事でした。

瀬で川虫の羽化を追うオイカワが毛鉤でよく釣れだしていたんですが、梅雨出水で減水待ちです。

七月　麓

犬とゐて川面(かわも)眺めて梅雨晴れ間

へら浮きのかすかな揺らぎ糸蜻蛉(いとととんぼ)

山雀(やまがら)が口あけている暑さかな

暑い日が続いています。梅雨明け後のこの暑さで、長かった寒さで痛めつけられた鉢物もすっかり元気になりました。花芽も育っています。

八月　麓

一人して旅に立ちたき立葵(たちあおい)

髪刈りて涼しく妻の子離れす

九月　麓

昼寝ぐせまだ抜け切れず秋暑し

月末に戸隠：妙高と一泊のバス旅行に出かけました。好天に恵まれ北信濃の初秋を満喫できましたが、旅の句は中々作れないもので、思い出を温めながらものにしたいと思ったりしています。(九月三十日、日曜に投函す)

十月　麓

高く舞うことなくなりし秋の蝶

山のＯＢ会で、巻機山山麓の民宿で一泊しました。山麓まで紅葉していました。民家は冬囲いを急いでいました。もう直ぐ雪に埋まる暮らしが始まることでしょう。地酒「八海山」と地の肴に酔いが深まり、沢の音が快い眠りを誘ってくれました。
翌朝は肌寒い時雨が紅葉を煙らせていました。

十一月　麓

ひとしきり鵙(もず)の猛(たけ)りて川暮れぬ

声のみの水尾のきらめく鳰(にお)暮るる

転作の蕎麦(そば)刈られずに雪となる

惚(ぼ)けて尚健気(なおけなげ)に母の炭火守(も)る

信濃からリンゴが送り届けられると年の暮れを感じさせられます。今冬は柿がうまくよく食べています。柿がうまいのは酒量が減っている故かも知れません。それにしても寒くなると酒がうまく、愚妻は喜んでいないようです。
うまい酒をうまく飲み続けたいものと思っています。

十二月　麓

小春日に犬のふぐりのつんつるてん

臨終を見守る夜の雪となり

暖冬だと思っていた矢先の大雪。その中で父の葬式を済ませることができました。犬がいるお蔭で、さして体調を乱すことなく葬式と大雪を乗り切れそうです。酒量が増す日もありましたが、年末も押し詰まって落ち着きました。
静に正月を迎えたいものと思っております。

昭和六十年
一月　麓

寒水を替え仏前の母小(ち)さし

初日記雪小康としるしけり

一つ寄り二つ寄りして鳰(にお)七つ

御地の雪はいかがでしょうか。当地では、それでも幸いに年明けてからはバカ降りもせず適当に休み降りしていますので、どうやら二度目の雪下ろしをしないで済みそうです。

降らずに気温が上がってくれれば寒バヤでもと待っていますが、そうはさせじの雪と寒さです。春待つことしきりといったところでしょうか。

二月　麓

夕冷えを覚える頃に雪濁(にご)り

手に持てば犬がじゃれつく猫柳

２月に入って温かい日もあり、待ちきれず竿を振ってみました。形の良いハヤが釣れ、天気さえよければ毎日のように竿を振っています。
部屋で咲かせた寒梅、黄梅、連翹(れんぎょう)、雪柳、雪割草も終わり下屋に好暖気にだまされて出した棚の鉢の雪を除けたりして温かくなるのを待っています。

三月　麓

榛(はり)の花散らして鴉(からす)交わりぬ　　（はり＝ハンノキの古名、ハシバミとも言う）

いささかの税が戻りしみすみ草

三月末科学万博に出かけました。月曜日なのに大変な人出で、並ばなくても入れる外国館を主に流し見をして来ました。科学の未来に真直ぐに夢を託せない想いでした。日曜の横利根では筑波おろしの中でへら釣りの竿が並んでいました。退職したら例年重い気分だった三月のことも忘れてしまいました。

四月　麓

納骨の僧に傘差す春の雪

ウグイ、オイカワを雪代の川で釣っている中に鮒ののっこみが始まり、大形がかかるので温かい日は楽しみです。
山菜採りのシーズンも近づいています。

五月　麓

メーデーの一日釣りに暮れにけり

黄びたきの声の隠れし若葉かな

一年中の最良の季節、昼寝などしていられないような気持ちで過ごしております。釣り、探鳥、山菜採りと続く時には、鉢物の水やりもおろそかになることすらありますが、花時は又水切れさせたくない時、俳句の方も水切れさせたくないとは思っているのですが。

六月　麓

紫陽花(あじさい)の艶(つや)やか過ぎるサボテン園

互助会の九州：北海道一周旅行に参加しました。九州では好天に恵まれ、焼酎のお湯割りでよく眠れ、北海道では爽やかな空気の中でビールがうまく飲めました。また、機会があったら旅に出たいと思っています。

七月　麓

くぐるとき茅(ち)の輪(わ)と知らず犬粗相

青葡萄(ぶどう)きじ鳩紅い眼を見張り

梅雨寒(つゆざむ)や小雀縋(すが)る濡れし親

蝿を打つ仕草の父に似てきたり

大鯰(おおなまず)あげて震える煙草の手

梅雨明け後の暑さ続きで、五十嵐川も涸れ、流れがゆるくなり、離れ鮒が釣れだしました。木蔭の涼しい釣り場があるので、毎日のように午前中定時に出勤しています。殊に朝のひとときがなんとも言えない気分にひたれます。

九月　麓

落ち鮎や竿振ってゐる黒き影

蟷螂(とうろう)が鎌振り上げて橋の上　（とうろう＝カマキリ）

九月に入って雨と冷温で鮎が落ち出し、朝夕の犬の散歩で、じっくりとコロガシの様子を眺めながら出番を待つこと久し、足弱の小生にとって好条件の水量となったのが二度、何をおいても飛んでいき、初回二匹、次回三匹と子持ち鮎

を掛け、早速塩焼き、晩酌のうまいこと。街中に鮎の釣れる川のあることを、心から喜んでいることをしみじみ感じた秋でした。

十月　麓

鮭遡(のぼ)る川でこざかな釣ってをり

紅葉の十和田湖、奥入瀬を訪れました。
十月中旬、夕暮れの湖畔、光太郎の乙女の像の二人はゆく秋を惜しんでいるようでした。八幡平頂上では青森トド松が雪を待っていました。
中尊寺は秋晴れで金色堂のまばゆさに驚嘆しました。鳴子に泊り、最上川船下りは秋時雨がもよおす中でした。山のＯＢ会と重なって、ＯＢ会に出れず残念でした。

十一月　麓

かいつぶり橋は上から灯(ひ)が点(つ)いて

いやな雪の季節が近づいて来ましたが、雪に負けないような体と気力を培っていきたいものと思っています。犬との朝夕のつきあいが苦にならないことを喜んでいます。

十二月　麓

柴犬の尾が揺れてゐる草紅葉(くさもみじ)

雪が来て河の流れの鎮(しず)まりぬ

惚(ぼ)けしまま母恙(つつが)なき年の暮れ

亡父がすっかりやってくれていた交際を交替し、とまどいながらの一年でしたが、さしたる事もなく了え、一年忌を無事終わり、おだやかに年末、そして新年を迎えられます。よいお年でありますように。

昭和六十一年

一月　麓

寒釣りの影のしばらくして動く

二度目の雪下ろしはどうやらしないで収まりそうな様子。下にいてシャベルは杖に、声は大きいだけと、息子と妻に冷やかされる雪下ろしですが、二度とはしたくないもの。

「雪国を捨てず、雪解けある限り」(高田の饒村(におむら)先生)そんな気持ちになれる日を待ちつつ。体力、気力の劣えないように。

二月　麓

繭玉(まゆだま)の嬰児(えいじ)の瞳に揺れつづく

暮れに早くから雪が来て、まだ降り続いているのでこの冬は殊更長く感じられます。

昨年は雨水の頃にはもう釣りに出かけられたのに、今年はまだまだのようです。

時折のぞく日差しはもう春のそれなのでもう少しのしんぼうでしょうか。

三月　麓

いつからか鳰(にお)ゐなくなり雪解(ゆきげ)川

彼岸過ぎからやっとハヤが釣れ出しましたが、寒い故か今一つです。三月の二十三日、在職校の科旅行に同行し伊豆大島を目指しましたが、あの春の雪で混乱のため伊豆半島巡りとなりました。雪に弱い表日本を、身をもって認識した旅でした。

四月　麓

鴉(からす)の巣抱く大欅(おおけやき)色づいて

季節は確かに巡るのを鮒の乗っ込みで感じています。雪解け水の本流から枝川に冷たい体で上がってきています。

水上温泉で卒業生の同期会に招かれて関越トンネルを初めて超えてみました。
トンネルを抜けたら春雨が煙り奥利根は春まだ浅しでした。
四十を越した教え子達に実年を感じました。

五月　麓

上下(うえした)で雲雀(ひばり)よしきり競いけり

五月は下旬に、巻機山麓の山小屋の改修工事に出かけました。山菜採りの最盛期でした。満月の下、盛大な焚火で八海山を飲み、酔って生まれて初めて車の中で眠りましたが、外界の物音が遮断され、朝の鳥の声で目覚めとならなかったのは残念でした。

六月　麓

鯉動く水面(みなも)の乱れ遠郭公(とおかっこう)

六月末、巻機小屋の改修工事に大工四人と手伝いの仲間の炊事のためと称して、犬をお供に二泊三日山小屋で遊んできました。
忙しく働く大工さんに申し訳ないが、のんびり過ごしました。夜は遅くまで飲んで駄べくり、朝も早く、食事も家と変わったりで、人犬共に疲れて帰り、家で半日ゆっくりと眠るといったざまでした。でも山麓と言えどやっぱり山はよいですね。

七月　麓

文字摺(もじずり)の買い物籠(かご)に二っ株　　(もじずり＝ネジバナのこと)

梅雨晴れ間粟(あわ)ヶ岳の残雪無くなりし

長梅雨の日照不足と低温で花物の育ちを心配していましたが梅雨明けで一気に取り戻さんばかりです。遅れて開花したさつきなどもこの日照が十日も続けば着蕾してくれるでしょう。
稲作も当地ではそろそろ出穂で素人目にもよさそうです。山小屋の工事が月末に完了したので、家族連れで出かけたいと思っています。

八月　麓

盆の僧工事の小路歩かされ

橋の人鯉のぞきこむ旱川（ひでりかわ）

夏休みの終わりは大人でも物悲しいもの。まして、若い子等は。
朝日のコラムに夏休み明け前に高校教師は家庭訪問で問題の生徒に対応すべしとありましたが、教師もたいへん。一方長期休暇も取れぬ多くの働く人達。この働き過ぎが一因とされる貿易摩擦。でも円高で苦しんでいる燕、三条の人達。
退職者交流会(弥彦)では勉強もさせられました。

九月　麓

短葉（たんよう）に仕立て五葉（ごよう）に秋の肥（こえ）　（たんよう＝松の手入れ方法）

綿（わた）の如群（ごとむ）れて夕陽の赤蜻蛉（あかとんぼ）　（わた＝ここでは草木の綿毛のことと思う）

落鮎（おちあゆ）の石に突っ込むちからあり

この夏は小路の下水道工事で大型機械(ユンボウ)が入り、毎日やかましく、やっと今月末に静かな作業となりました。
落ち鮎が掛かり出したので、子持ち鮎を一口食べたいと条件のよい半日をゴロ掛けし、七つ捕りました。
母はもう鮎もうぐいもさだかでないのが残念です。

十月　麓

翡翠（かわせみ）の藍（あい）の失（う）せたる秋の川

木犀（もくせい）の匂へり明日は晴れるらし

山茶花（さざんか）の初花（はつはな）父の三回忌

第五回大会の盛会をお慶び申し上げます。総会の席で田上の時は若杉曲人さんとそして金沢と今回は佐々木典太さんと隣席の栄に浴し、夫々のお人柄に感じ入るものがありました。退職して、日常人に接する機会の少な過ぎる小生にとっては、大会は疲れますが楽しいものでした。

十一月　麓

流れゆく落葉を戻す渦のあり

茸採りのチャンスを失ったまま冬を迎えるようになりました。鉢物の冬囲い(冬構え)も年々上手になり、今年は思ったより手際よく出来ました。松と梅は正月用にまだ下屋に置いたまま、根雪直前にと思っています。梅は花芽も多く正月によい状態にと、これからが大事です。

十二月　麓

跳(は)ねし鯉見し眼(め)しばらく浮きを見ず

銀杏(ぎんなん)の碧(あお)き眼玉やのっぺ汁

悪童のころから親しんできた五十嵐川も様変わりが激しい気がします。殊にそう思うのは水量と流れの変り様です。瀬、渕、砂場、浅瀬などが年毎に変ります。自然の変り方でなく人工的な変り方のようです。時々自転車が杭にひっかかったりしているのは何ともなさけなく、何れ釣りもダメかと気になるのですが、今のところ釣りを楽しめるのは何よりです。
よいお年を。

昭和六十二年

一月　麓

卯(う)の年や母の七度(ななたび)子の五度(ごたび)

寒入りの川の濁(にご)れる雨三日

寒梅の三ヶ日(さんがにち)過ぎ匂ひ立つ

後十日で節分という日の夜の雨。減水中の川も水が太るか。何処から来たのか白っぽいがかいつぶりに似た鳥が一羽、二、三日前から遊んでいた。図鑑で調べたが確定できない。今日も釣り竿近くまで来る。釣ってやるぞと声をかけ、いたずら半分、次に浮くだろう辺りに浮きを投げして二、三度、ついに足に釣り糸がからまって、さしてあばれることなく引き寄せ、糸を外しながら、十分確かめて放した。ハジロカイツブリであった。日本野鳥の会のこの図鑑はよく出来ていると思った。

二月　麓

寒釣りの影のときおり竿光る

寒梅、黄梅、雪柳、連翹と順に咲かせ、いま木瓜の蕾がふくらみつつあり、暖冬の中の真冬日に春を待つことしきりです。

雪のないのは大助かりですが雪解けのあの春らしい喜びが味わえないのが残念でもあります。

高田の饒村楓石先生の句、雪国を捨てず雪解けある限り

三月　麓

オイカワの銀鱗抜くや雪解川

初雲雀見し翌日の初燕

旅了えし春愁の夜を犬とゐて

機械科職員旅行にＯＢとして参加させて戴き、南紀：伊勢：鳥羽と回りました。名古屋で別れ、知多に就職した二男と知多半島南端の島に渡り一泊、翌日はレンタカーで岡崎葵博を見て、西浦温泉泊り。折悪しく強風の寒い朝に釣りを試みましたが身体が芯から冷えただけ。

朝風呂につかりのんびりしたが、名古屋市内の車が渋滞と、混んだ新幹線で旅疲れして帰宅しました。

四月　麓

梅一輪夜には雨の振り出しぬ

時ならぬ妻の客あり三隅草

乗っ込み鮒の興奮につられて連日通っています。早期に大形、遅れて小形連休で田水が流れ出すまでの約一ヶ月が勝負で、以後は梅雨の出水を待つ。

やがて山菜、野鳥の時期となりますね。明日は山へ。

五月　麓

山若葉黄鶲のこゑよくひびく

黄鶲の声透き通る若葉陰

三年通って黄鶲の姿を確認できました。それも間近に肉眼で。果報は寝て待てと、たべっぱぐれの遅い朝食の握り飯で缶ビールを飲んで寝転んでいたら、近づいてくれ、思う存分に鳴いてくれました。

六月　麓

郭公(かっこう)の初音(はつね)一声吃(ども)り声

十薬(じゅうやく)の籠(かご)置く部屋の隅暗し　（じゅうやく＝ドクダミの別名）

紫陽花(あじさい)の色褪(あ)せてゐる旱梅雨(ひでりつゆ)

今冬の小雪と空梅雨で五十嵐川も川底をさらけ出し、釣りもはかばかしくありません。上旬に古峰講の人達に混じって日光：那須高原：松島と回りました。初めての松島は期待が大き過ぎたのか、晴天続きで大気が濁っていた為に景観がぼけてしまったのか、本当の松島らしさが観られませんでした。それにしても月曜日だというのに大した人手の独眼竜ブームでした。

七月　麓

這(は)い上がる蛇に釣り師が座を移す

橋脚(きょうきゃく)に川盛り上がる梅雨出水(つゆでみず)

あれだけ涸れていた川が一晩の大雨ですごい増水。夜中、魚が騒ぐぞと期待で胸騒ぎ。早朝犬を連れて土手を歩る
いている中にどんどん増水。帰りは古い橋二本が通行止めとは。明日はどんな釣りが出来るやら。

八月　麓

夭折(ようせつ)の父と子の墓柳らん

木道に跛(びっこ)音させ吾亦紅(われもこう)

八月末、尾瀬へ行く機会を得ました。沼山峠から鳩待峠へ。最高のコースと思い無理を承知で申込み、後は晴天を祈っていました。幸運にも、沼巡りの悪路

は晴れ、原越えの二日目は曇り空。漣(さざなみ)走る沼。トンボの羽化を見た原。初秋の尾瀬を十分に楽しみました。

九月　麓

えのこ草じゃれない齢(とし)の犬となり

食欲の増えし夕餉(ゆうげ)の新生姜(しんしょうが)

雨の翌朝の散歩で、土堤のアスファルトの上で轢かれた蛇を三匹も見ました。
蛇にとっては穴篭り前の餌とりに大変だったのでしょうが。
小さな蛇が川を渡って釣り座に近づいたので竿先を振ったら、しばらく流れに浮いたまま。全くゴミの流れるようでした。

十月　麓

寄る鯉の鼻にまつわりこぼれ萩(倉敷)

秋暑し楠(くす)の大樹にしのぶ垂れ　(福岡天満宮)　　(忍＝信夫草、シダ植物)

十月中旬、互助会の「中国路の旅」に参加。五日間で倉敷：岡山：米子：松江：出雲：萩：津和野：山口：福岡と巡る欲張りコースの旅で、印象が散漫になった感じもしました。帰りの機中車中で倉敷で買ったぐい呑みで福岡の米焼酎を飲みながら、しみじみよい旅だったと思いました。
来年は四国へでも。六十代に入りました。

十一月　麓

立冬の鴉(からす)は西へ夕焼けて

鳰(にお)の来て鮒(ふな)は釣れざる川となり

山岳部のＯＢ会が弥彦であり、久し振りに菊花展を観ました。
翌朝一人で弥彦山に登りましたが、なんと山頂まで二時間もかかり降りは不安になったのでロープウェーを利用しました。ロープウェーから下を見下ろす谷の紅葉は素晴らしいことを発見しました。

十二月　麓

極月(ごくげつ)の夕映(ゆうば)え逝(ゆ)きし父のこと　　(ごくげつ＝年の極まる月、十二月の異称)

流れきし鮭のむくろに空(うつ)ろな眼

世間の激動をよそに、今年も平穏に暮れんとしています。
来年も平穏な年でありますように。
母呆けて四年目の年無事に越す

昭和六十三年
一月　麓

街中(まちなか)の通れる川に淑気(しゅくき)満つ　　(しゅくき＝新春のめでたくなごやかな雰囲気)

繭玉(まゆだま)の床柱(とこばしら)背に座らされ

雪に悩まされることのないのは大助かりです。でも負け惜しみのようですが物足りない、何か張りのない暖冬の日々を過せば、春のあの湧き立つような喜びが薄れるのではないかと思われます。

二月　麓

寒釣りの一人が消えし一人なる

真冬日の三日続きて雨水(うすい)かな

牡丹雪(ぼたんゆき)吸い込んでゐる水の面(おも)

立春からの雪、降るものが降らねばといった感じでした。残雪の川原に春の近づいていることを感じている此の頃です。凍みた雪原に犬を走らせて、しみ渡り出来るのも雪のある楽しみの一つです。
　春の風残雪の土手渡り来る

三月　麓

電柱の頭から濡れ春の雪

釣れる日と釣れぬ日のあり寒戻り

犬駆けてキラキラキラと凍(し)み渡り

人の死が身近にある感じがします。老齢の場合はまあよしとして、若い人の死はたまりません。若死にはほとんどがガンです。ガンに対する医学の進歩を願っています。

四月　麓

陽の当たる背(せな)の温(ぬく)もりつくしんぼ

初燕川は青さを増してをり

春の草木の芽吹きには、全く驚くべき生命力を感じさせられます。冬枯れだった土堤が緑一面になり、鉢物も一日で花穂が立ったりで毎朝の水やり後、一と眺めするのが楽しみですが、芽摘みもおこたれないこの頃です。

五月

初七日の済みて咲きゐし桐の花

母逝(ゆ)きぬ都忘(みやこわす)れの濃紫(こむらさき)　(みやこわすれ＝キク科の花の名。ノシュンギク)

郭公(かっこう)の呼べば応(こた)えるこだまあり

木場神楽(きばかぐら)逝きたる母の祭り好き　(きばかぐら＝三条八幡宮春祭りの獅子神楽)

父より母の死が子等にとって深いものありとは、知識として知っていましたが、さて、直面してみると虚ろな心の中に過ぎ去った五月……。
父の時以上に犬に助けられたと思っています。両親よりも先立たなかったことをしみじみと喜んでいます。

六月

栗の花遠くなりたる子の便り

週二回岩室温泉病院に行くことにしました。九時にマイクロが通りまで迎えにきてくれます。運動で一汗かいて昼食後のんびりして三時頃帰宅します。
時間に制約のない生活の中ではメリハリがつきますし、人との交流も増し体調もよくなります。

七月

透き通る日光黄菅(にっこうきすげ)は今朝(けさ)の花

二泊三日で尾瀬を楽しみました。
沼山峠から鳩待峠へ沼と原を抜ける道は花の道でもありました。二十数年来の花盛りとかで、日光黄菅は素晴らしく湿原を色どり、咲いている花も多く、花の名も三十種位は覚えた気がします。宿の混雑には閉口しましたが、そんなことは忘れさせる楽しい旅でした。

八月　麓

新盆(にいぼん)の母の好物まくはうり

脛(すね)長き少女の持てる青胡桃(あおくるみ)

五位鷺(ごいさぎ)の杭(くい)となりたる大西日(おおにしび)

退職者の県交流会で妙高へ行ってきました。北信五嶽は不機嫌に顔を隠していました。部屋に引きあげてからの世語りの昔話はつきぬものがありました。

九月

月明かり溲瓶(しびん)の音を憚(はばか)りぬ　　(ＮＨＫ全国大会)

十月

竿二本取られた話秋の鯉

弥彦山再挑戦は又も、下りで断念でした。リハビリでかなり足を鍛えたつもりでしたが、息切れ、汗、足のつっぱり。これでは下りは無理と残念ながら。弥彦の菊祭りは準備中でした。

十一月

秋時雨(あきしぐれ)三日続けば粟ヶ岳(あわ)に雪

十二月

数え日の日に何遍(なんべん)も梅に霧　　(かぞえび＝年末の残り少ない日々のこと)

母の亡(な)き暮らし馴染(なじ)まず年暮るる

昭和六十四年

一月

暖冬に狎(な)れたる今朝の吹雪かな

岩室に行って、お年寄りに将棋を負けるのが残念で、こっそり家で練習し、近頃はあまり負けなくなりました。新聞の将棋欄を切り抜いて一人で並べて見ていますが、プロ棋士のような手は思い浮かびません。

平成元年

二月

大喪(たいそう)の鎮(しず)まる街に春の雪　　(たいそう＝天皇の葬儀)

三月

ほおじろの囀(さえず)りのまだ舌足らず

退職校の機械科の職員旅行で、富士山を望める甲斐：駿河を周り、鎌倉へと早春の旅を楽しめました。
昨日あたりから、乗っ込みの鮒が釣れ出し、興奮します。

結　び

何時止めたのか、はっきりしないが、句作りが苦痛になるようでは続けられない。

いさぎよく止めたつもりだが、当時の先輩であった、加藤武司さん(糸魚川真柏を頂いた)、年賀状が楽しみな川口修作さんとは、今も年賀を交換している仲で、喜ばしいことである。

私の跡を継いだ訳ではないが、家内が内山静尚さんの公民館俳句教室に入り、下手くそながらも続けている。私は折につけて、苦言を呈して、彼女を助け(?)ている。長く続けて欲しい。

【入力を終えて】　　斎藤　勲

安易に高橋先生の本の抄録の入力を引き受けてしまった。今になって悔いている。入力し始めて分かった。再読だが紀行文も俳句もコメントも面白く興味深く、先生の人生の背景が分かるような気がして、つい読みふけってしまい入力はなかなか進まなかった。

高橋先生十七歳の時の守門岳は、山に向かう未熟だが清新な気持ちや情熱が伝わって来る。若い荒っぽさもあるが山への思いが伝わる良い文章である。それから十一年後の北ア縦走は友人と登る楽しさ、悪天の中の行動の描写や北穂小屋での停滞の楽しさが良く書けている。つい、本棚から小山義治著「穂高を愛して二十年」を引っ張り出して読み始めたものだからいよいよブレーキがかかった。

俳句の選句は私の一存でしてしまったが、「斎藤よ、選ぶならこっちだろう。」と不肖の教え子は彼岸におられる高橋先生に叱られるだろう。俳句に詠んでおられる老親や奥様や家族、犬や鳥や魚や盆栽にかけている愛情は門外漢の自分にも感じとることができる。

先生の足元にも及ばないが、自分も興に乗ると時々句を作る。情景や動作の一瞬を切り取り、読後の読み手に余韻を感じさせ、そこからさまざまなことに思いを致させるのはなかなか難しいものだ。少しでも高橋先生の境地に近づけるよう精進してゆきたい。また高橋先生の句を鑑賞して、「十七音の最短の文学」である俳句に興味を持つ人が出てくるならば、入力をした者としては望外の喜びである。

注記

１　平成二十年八月に高橋小一郎先生が自費出版された１８１頁の本の抄録です。全内容の再録は時間的に困難なため、その作品の中から斎藤が独断で選定し、ごく一部でありますが紹介しました。

２　原文には無く、俳句鑑賞を妨げますが、読みにくい漢字にはルビをふりました。また解りにくい語句は簡単に解説しました。誤植は修正してあります。

３　句作は、平成八年四月まで、もう八年間続けられ本にも記載されていますが、投句の際のコメントは平成元年三月で終わっています。
この後はコメントがなく俳句に親しみのない方には鑑賞しづらくなります。私の選句、入力もここまでといたしました。

遺稿

守門山の思い出

三条工業高校山岳部「部報・創刊号」(1968 年１月発刊)より再録

守門山の思い出

高橋小一郎

初めての山

初恋の人が忘れられないように、初めて登った山は思い出の深いものがある。私が初めて山らしい山に登ったのは、昭和十八年の夏休みであった。小学校以来の親友にさそわれて、彼の友人K君と三人で守門山を登ったのだが、三人共守門は初めてであった。

K君は栃尾出身で守門は知っているとの話だったが、登山口までで、後は前日買い求めた五万分の一の地図が唯一のたのみ。吹出橋から思川の沢筋にたどりつかないうちに、もう道を踏み迷って炭焼きの人に注意されたりして思川の大滝にかゝる手前の営林署の小屋にやっとこさたどりつき、藪蚊に悩まされ、口には出せないが前途の不安と心細さで眠れなかった。

翌朝はそれでも元気に出発し、大岳には昼過ぎについたが、やれやれと一息する間もなく、恐しい雷雨に見舞われ、昼食どころでなくなり、空腹で目まいしそうな状態で、大崩沢をどんどん下った。あせっていたので、踏み跡を外し、神の田に出るべきを、そのまま沢に深く入り過ぎ、気のついた時はどうにも引き返せない状態であった。とにかくこの大崩沢を下れば守門川に出て、吉ヶ平に着けるはずだからと悪戦苦闘の半日を続け、吉ヶ平の灯りが見えた時はホッとしたが、これから八木前迄の道程の長かったこと。

八木前に着いたのが十時頃と思うが後は何も覚えていない。後で聞けば、親友はそれから家への連絡で大変だったとのことであった。

今にして思えば彼はこの山行に送別の重大な意味を含めていたらしく、その秋には予科練に召されていったのであった。終戦後帰ったが、病にたおれ若い命を惜しまれて亡くなった。商店の後継者で、存命ならば良い話し相手であり、山仲間でもあったろうに・・・・。

彼の名は吉ヶ平ならぬ「吉平」であった。

きびたき小屋

保久礼の旧小屋がなくなったのは何時頃か判らないが、多分戦争前のことであろう。初めて守門に登った時はもうなかったのだから。戦後きびたき小屋が建てられるまでは、守門岳には山中に全然山小屋はなかった。今の保久礼の新しい小屋も、木守沢の小屋も、道院ヒュッテもなかった。

当時守門に入るにはどうしても一泊は必要とするので、思川の営林署の小屋や、炭焼き小屋や、農家の作業小屋を泊り場としたものだった。従ってきびたきの小屋が出来上がることは、守門に入る人達にとって大変役に立ち、喜ばれたものだった。誠に有難い

小屋ということだったのだろうか。此の頃のように小屋を粗末にしない気風があったように思われてならない。

「きびたきの小屋」は昭和二十八年の十月に建てられた。現地でブナの丸太を利用して、珍しい校倉造りであった。翌年六月この小屋に中西悟堂氏の歌を額にして飾るということで、当時の日報に稲田豊八氏（稲豊さんで山仲間に親しまれている）がこの額を掲げている写真がのせられ、次のように報ぜられた。

「古志と北魚沼の郡境にそびえる名峰守門山の中腹、保久礼の上手二百メートルのブナ林に、昨年十月ヒュッテが出来、登山者に憩いの場所として喜ばれているが、このヒュッテは野鳥研究家で知られている中西悟堂氏がかつて登山した時に作った歌にちなんで『きびたきの小屋』という名前がつけられ、今回同氏の筆なる木の額を長岡市明星学院院長太刀川浩一郎氏が彫刻、近く掲げられることになった。」

原歌は、

大きブナ並み立つ山は雨とならず
　　きびたきのこゑ一日こもれり

という格調の高いもので、自然を愛し山を楽しむ中西氏や太刀川氏の美しい心が守門山のヒュッテを飾るわけで、木の額は長さ三尺、幅一尺二寸の大きなもの。これをとりもった栃尾市の前長岡博物館植物部長稲田豊八氏もこれで山のヒュッテが一層登山者に愛されることになるだろうと喜んでいる。

当時この額の掲げられたきびたきの小屋は稲豊さんを中心とする栃尾の山を愛する人達や、守門を愛する人達の手によって可愛がられ、よく整備されておったものであった。炊事道具から茶道具まで揃っており、この小屋を利用した人は感謝の気持ちをこめて、後の利用者に役立つように何かと残していったものだった。

時にはローソク、メタ、マナ板、紐、針と糸その他の品物が減るどころか増えていったこともあった。

残念なことに屋根が弱く、雨もりしだしてからは、くさり易いブナの為か折角の校倉造りもすっかり見るかげもなくなり、無残な姿をさらしていたが、二年程前に今の新しい小屋が出来た。

その頃には既に道院、保久礼、木守沢に小屋が出来ていたので、当時のきびたきの小屋程有難がって利用する人も少ないらしく、また私自身も旧いきびたきの小屋のように愛着がわかないのも、時の流れというものだろうかとつくづく感じさせられる。

因みにきびたきとは

燕雀目ヒタキ科の黄色の美しい鳥でこの名があるが、翼長七～八糎、くちばしはやや扁平で先がとがり、脚は短小、雄は体の上面が黒く、翼に白いまだらがあり、眉班、のど、胸、腰は美しいオレンジ色をおびた黄、雌は上面がオリーブ褐色、下面が灰白で黄

色を欠き、ウグイスに似ている。日本では四月上旬、北海道、本州、四国に渡来繁殖し、九月下旬より九州、対馬、伊豆七島などを経て南に去る。雄雌で森林の樹上に住み、五、六月頃雄は美声でさえずる。巣は木の穴、木のまたなどに枯れ葉、こけ類、細い根などで深いわん形に造り、五～七月に四、五個の卵を産む。食物は甲虫、ハエ、ガ、アリ、クモなどで秋には種実を食べる。

当三条市にも山岳会と名のつくものが多いが、その中に女性のみの「きびたき岳友会」という会がある。この名の由来は姿優しく、声うるわしい「きびたき」からきたものだろうとは推察できるが、今だ名付け親から確認していない。機会があったら聞いておきたいと思っている。同じヒタキ科に属する「こさめびたき」は少年の頃雛を育てたことがあるのに、守門のきびたきには是非一度でもと心がけているが、まだお目にかかれないのは全く残念である。いつぞや台風で小屋周辺のブナも大分倒れて、様子が変ってきたので、きびたきも寄りつかなくなるのではないかと心配させられのでなおさらのことである。

【入力を終えて】　斎藤　勲

高橋先生の自費出版本に十七歳の時の守門岳の紀行文があり若々しい記述に引きつけられる。この随想はそれから二十五年後の文章である。初めて登った山に対する愛情が感じられるとともに、きびたきや自然環境への記述から大きく深まった観察眼というようなものを感じる。ぜひ二編併せ読んで鑑賞して欲しい。

また、自費出版本の俳句集には何度かきびたきが出てくる。この文章中のきびびたきの解説を参考にしながら俳句を味わって頂ければ大変ありがたい。

遺稿

鹿教湯での二夏

「ライダース・イン・ザ・スカイ」15 周年記念号(1981 年発行)より転載

鹿教湯での二夏

高橋小一郎

一夏目（１９８０年）

七月二十三日

病癒(やまいい)え一人信濃へ立ち葵(あおい)

その朝、三条駅のホームは葵の花盛りであった。リュックを背負った一人旅で、鹿教湯病院へ。夏休みを利用してのリハビリと体力作り、保養と山歩きという欲張った目的である。

鹿教湯は、脳卒中に効く温泉として名高く、リハビリ病院が、松本と上田の中央、美ヶ原高原の北西山麓の静かな山峡にある。ベッド数約五百の施設の整った立派な病院である。

蝉時雨(せみしぐれ)病院暮らし慣れにけり

単調で規則的な病院生活に慣れるのは早い。十日もすれば要領ものみこめ、ゆとりもできる。院内は勿論、外の温泉町の様子も判ってきたので、朝夕の散歩はいろいろとコースを変えて歩き廻るのが楽しい日課となった。

朝曇り鯉釣る池の草の露

用意していった使い慣れた愛用の竿で、釣り池の野性味のある尺余の鯉と引張りごっこするのが最大の楽しみとなった。

リハビリ訓練の空いた時間をみつけて、朝食（八時）前、日中、または夕食（五時）後のときもあるが、よく通った。

アギ無しの鮎掛け鈎だから、軟らかい練餌は落ちやすい。鯉もスレているので、鈎をさけて上手に餌をとる。池が浅いので、三号糸の先に一号のハリスを長目に結び、錘りも浮きもないもっとも単純な仕掛けで、鯉をだまして釣る訳だが、一匹目は割合簡単に釣れても、次からは警戒されるので、本当に鯉と人間とのだまし競べとなる。小便をしている僅かなスキに、竿ごと岩のトンネルの穴に逃げこまれたりする。餌を小さなダン

ゴにして鈎先につけたり、細い鈎に細い糸を結ぶハリスの補充は、指先の訓練にもなる。かかった鯉を引き寄せ網にすくうには左手も使わねばならず、足も踏ん張るので、楽しみながらのよい手足の訓練ともなり、料金も三時間五百円は手頃である。夢中になって時間を忘れ、夕食に遅れて食堂の飯にありつけず、やむなく町の食堂で一杯つきの夕食となったこともあった。釣り池の老夫婦と顔なじみになり、茶の間で話しこんで帰るときもあった。一度も釣られたことがないという池の主の一番大きな色鯉をあげた時は、じいさんはすっかり感服したようだった。

片まひの手足ふんばり鯉あげぬ

八月十日

柳蘭（やなぎらん）高原の夏彩（いろど）りぬ

美（うつく）しの塔ははるかに夏の霧

隣室のK氏も連れて美ヶ原へ。鹿教湯温泉経由のバス路線があり、家を発つ前に周遊券に組んでおいた。

冷夏のぐずついた天気続きで、霧の晴れた日がないと運転手の言っていた通り、期待のアルプスは見えず残念だった。

霧の晴れ間に全容を現した広大な高原の広がりには眼を見張った。

立山の弥陀ケ原は広いが、こうも平らではない。苗場山頂や飯豊御西の草原は平らであるが、かくも広大な広がりはない。

上眼（うわめ）して牛塩なめる牧の夏

広大な草原牧場の柵の中を人間が歩くといった格好で、ここでは人間より牛が優遇されている。

退院時、迎えに来た妻と息子を案内して，八月二十四日に再度訪れた時は、高原は秋の気配で、ヤナギランも松虫草も盛りを過ぎようとしていた。

来夏は体力をつけて、霧ヶ峰へと扉峠越えで歩いて見たいし、雨で断念した燕山頂へも妻を立たせてやりたいものだ。

踊る輪に医師の姿も見つけたり

鹿教湯病院は丸子町に属し、町の盆踊りが盆の十四、十五日に観光協会主催で、温泉街の目抜き通りで盛大に催された。その前景気づけに、病院主催の仮装大会が十二日夜病院前広場で、町中の人や温泉客もつめかけて盛大に行われた。半月も前から患者と職員が協力して準備した。東・西の各病棟の各階毎に工夫をこらした仮装コンクールがメーン行事で、わが西五階は鹿教湯サミットと銘打って、主治医の周恩来、ナースのガンジー、患者達の鈴木首相、飛鳥田委員長、水戸老公と助・格さん、サザエさん、京塚昌子、八代英太、スーパーマン、職員のサッチャー夫人、カーター夫妻等、世界中、日本中の各界名士がここ鹿教湯で会談という訳で、大騒ぎで、朝から仮装準備。プラカード持ちをやる小生も含め、役者の顔触れが揃ったところで、一度、行列の歩く予行練習。何しろ患者の状態が一人一人皆違う。車椅子あり、杖にすがる人あり、腰曲がりあり、これに元気盛んな若い職員も混じる。このメンバーで揃って歩こうというのだから大変なことである。

かくして、本番はどうやらうまく出来、見物衆のヤンヤの喝采を博し、二等に貰った賞状は「ビックリしたことでショウ」

この夜の盆踊りの楽しさに味をしめ、町の盆踊りに出かけ、二夜とも九時の門限にやっと滑りこみ。

八月二十日

五台橋涼しく渡り文殊堂（もんじゅどう）

涼風の五台渡れば薬師堂

鹿教湯には二十一カ所の名所が内村川沿いに散在し、これを全部巡れば八㎞になるという。そして各所にはスタンプがあって、巡った証しとする。これを観光協会に持参すれば記念品が貰えるというので、退院間近の三日間で巡って、記念の立派な絵葉書と表彰状を貰った。この表彰状の文句がいい。「・・・を三日間で踏破されました。これはあなたの健康づくりへの努力と若さと健脚を象徴するものです」とあった。

八月二十三日

百日紅（さるすべり）盛りは見れず退院日

二夏目（１９８１年）

八月二十七日

仕事にも人にも倦(う)みし大暑(たいしょ)かな

越(こし)の出穂(いずほ)信濃は青きリンゴかな

学期末に、心晴れぬ事柄が重なり続き、更に暑さも加わって、逃げるような気持ちで鹿教湯へ来た。体力、気力を恢復し、暑さを乗り切り、来年への充電をしなければならない。 早速、釣り池に挨拶に。あの主の色鯉はいないがひとまわり太った鯉が泳ぎ廻っている。初日の今日は小手調べに三匹あげる。やはり一号ハリスでは切られる。鈎もヘラ用八号と強いものにしたのだからハリスも一．五と強くしよう。

さて本番で練餌が切れて、試しに赤トンボをつけ水面に浮かしたら、風に流されているところを太い奴がガボリ。エンマコオロギを沈めてやれば呑み込んでくる。鉄砲ジミなら最高の餌。釣り座もどちらへ走っても対応できるように、池辺の中頃に陣取ってと二年目ともなれば、要領もよい。二度も釣られた奴もいる。一度も釣られずに餌だけ失敬した奴は何匹位残ったことか。終わり頃には一・五号も切れ二号にしたがやはり走られるとハリスを切られる。中間（八月十日）に帰宅した際に補充した鈎もなくなり、竿先も痛んだので、これ以上鯉を痛めつけるのは止めようと、本業たる訓練に精を出した。

昨夏は中房まで行って晴天を待ちつつ、遂に天気思わしからず断念した燕岳へ、都合で出てこられない妻や息子をあてにしないで一人で登ってやろうと、退院十日頃から、毎朝一時間病院の裏山へ登り歩きこんで足も鍛えたが、あの迷走台風十五号のために、日程が取れなくなり断念せざるを得なかった。

病室で絵を描く人の夏座布団

病室は四人定員の和室で、定員どおり四人が暮らしている。

Ｙ氏は七十近い温厚な話し好きの旦那さんで、日本画をよくする。若い頃はこの道で食ってゆこうと家出した位の腕の持ち主。号は本名そのままを。この方が入院したその日の夜中二時、発作というかヒキツケを起こし、手足はケイレンし、口も利けず眼も開いたまま。当直のナースは再発と思いこんだらしく、慌てて当直医に電話。駆けつけた若い医師の卵は、テンカンの発作と診たのか、前にもこんなことがあったのかと聞くが、ご本人は口が利けず僅かに首を振って否定の意を伝えるのがやっと。応援のナースと三人で、ベッド車に乗せられて三階の処置室へ運ばれた。再発でこのまま逝かれるのではなどと心配しながら、まんじりともせず白む朝を迎えたが、一過性のものか昼には平常に復し室に戻られた。ご本人の話でもこんなことは初めてで、意識がありながら口を利けないもどかしさ、このまま逝ってはと本気で思われた由。入院時に薬が変わった故と

しか思われないが、未だに納得のいく説明は医師からもなく、ただ二度三度とあることではないと言われているので、気にしないことにしてはいるがとのこと。そんなことで、大変にお世話になりましたのでと絵を一枚記念に画いて下さった。病院にも慣れた日曜日の早朝から、朝日の射し込む室で絵筆を持たれて、鶏年なのでと言いながら、見ている前で画かれたものがこの絵である。「鶏と少女」と題して、尾長鶏を抱く可愛らしさ一杯で、淡い色だけを使った絵である。飯田市の街中の古い商家で洋傘を商うが、店は奥さんがどうやらで、息子さんは勤め人とのことである。絵の弟子は入院中にはしかるべき知人に替わって見て貰っているとのことなど話して下さった。

O氏、六十歳、名古屋の消火器商のご主人。右マヒで発病時記憶を失い、今も言語失調で計算や読み書き不得手。新聞を読むよう奨めるが、よく読めないという人だ。明るい人柄で親しみ易い。右手で鋏がよく使えない。釣り道具の安鋏がピッタリだというので、それなら使ってくれとやったら、退院記念にと作業療法時に急いで作ったキーホルダーを下さった。

H氏、室での最年長（七十＋ｱﾙﾌｧ）で、栃木は桐生の老人。変わったお人で女好き。自然われ等三人とは別行動で女人と行動したりの方が多い。

三人はよく朝夕散歩を共にした。店を持ち、年も近く、生活圏も近いという共感が多い故か、Y、O氏とはよく話が合った。Y氏の若い頃の話は面白くて、夕涼みの談笑のひとときを楽しいものにしてくれた。Y氏の絵は帰宅したら、早速妻が「ハイセイコー」のパネルを外して代わりに父の丸額に入れて掛けた。見応えがあり部屋に良くマッチした。O氏のキーホルダーは息子が喜んで貰い受けた。

八月十日

踊る輪の先頭に立つ掃除婦さん

３年目という病院恒例の納涼大会は、帰宅が直前にあったので、今回は盆踊り役のみ引き受けていたのだが、帰院したら、今夕の仮装コンクールの審査員をやってくれと、担当ナースから頼まれてしまった。

その日、夕食後五時半から始まった盆踊りを賑やかな前座に、やがてメーン行事の仮装コンクールの始まり。全部で十二のグループが順にアイデアを凝らした仮装を披露すべく、病院前広場の特設会場を四角にねり歩く。

わが西五グループは、この病気にとっては悪者にあたる、煙草、酒、怠け心という三悪を黄門様がこらしめるという設定だ。ハイライトの大箱を着て、酒ビンをぶらさげた悪者共を黄門様一行がこらしめるという行列で、見事これは小生の審査通りの「ハッスル賞」に輝いた。

八月十五、十六日

土地っ娘(こ)のナースに真似(まね)て踊る輪に

待望の町の盆踊りの十四日は雨でお流れ。十五、十六両日は昨年以上の踊り手で賑わった。土地っ娘Ｉ嬢のよくしなう細腰の後について踊れば、間違えることなく踊り易い。七時から九時までの二時間を休みなく踊っても短く思われた。

十六日は最後の踊りとて、天龍寺境内広場で、土地の青年会の仮装踊りも加わって、三重に輪が拡がり、茶碗酒に景気づいて、夏の想い出とばかり

一汗も二汗もかいて踊りに興じた。丸子音頭と鹿教湯小唄は難しいが、炭坑節と東京音頭は二年目なので存分に踊れた。床に付いてからも太鼓の音が耳の中で響いていた。

八月二十四日

湿原を渡る秋風霧ヶ峰

貸乗馬疲れし高原夏果てぬ

迷走台風十五号の接近がぐずつき、退院間際になって燕登山を霧ヶ峰に変更し、一番バスで鹿教湯を発った。バス停で待っていたらＨ老が来て、別れの煙草をくださった。タッチの差で急行に乗りつけず、ままよ、急ぐでもない一人旅と、駅前でゆっくりした朝食時、テレビで札幌の洪水と須坂の鉄砲水を写していた。小諸では雲で浅間は見えなかったが、朝の涼しい空気の中を、駅前始発バスは、蓼科牧場乗り替えで霧ヶ峰へ。長野県が観光のドル箱として開発したビーナスラインは有料道路で、霧ヶ峰から美ケ原へと千五百ｍの高原を縫って続く。霧ヶ峰バスインターからたっぷり一時間かけて八島湿原への道を歩く。湿原は保護されてはいたが、八島インター附近の人出はすごいものである。この湿原もやがてかく押し寄せる車と人波で、自然のままでは在り得ないのではないかと心配させられた。現に湿原入り口の車道に近い所では、オオバコがはびこっているではないか。大勢の人がこの景観に接することが出来るではないかという安直なメリットの為に、何千年という年月をかけて出来たこの美しい姿のままで後生に残すべき自然が回復不能になるまで痛めつけられてよいものか。車道をこんな所に通すのはやはり心ない暴挙と言わねばならない。扉峠から美ケ原へと続く車道と遊歩道を確認した上で帰路につく。

小諸に戻って懐古園を訪れたが、フラリ旅で宿の予約なしが気になり、折角の小諸城址も、火山博物館や、小山敬三美術館もゆっくり見られない中に五時過ぎの閉館となり、駅前ホテルを二つとも断られる。その二つ目のホテルが予約してくれた古城なる安ホテルの遊子なる部屋に落ち着いたのが六時過ぎ。遊子の空腹が千曲河岸台地の急坂で鳴るのをこらえて、駅前の焼鳥屋で先ずはビールで空腹をだまし、程よい頃にコップ酒。受

け皿付きの冷やで出すとは気に入った。

秋の夜の千曲（ちくま）の川音（かわおと）コップ酒

かくして、翌朝の急行料金にもことかく哀しさは一汽車早い鈍行となり、好きでもないアンパン三個を中食にゆっくりと家路に向かうことになった。楽しくてやがて悲しい一人旅。

赤のまま高原の駅一人旅　（あかのまま＝ままごとに使う植物のあかまんま。いぬたで）

涼風や信濃の旅を終えんとす

来年もまた鹿教湯で人間を取り戻し、そして一人で小さな旅を楽しもう。

「健康とは病気でないということではない。なにごとに対しても、前向きの姿勢で取り組めるような精神的・肉体的そして社会的適応状態をいう」―ＷＨＯ（世界保健機構）の憲章―

一度はこわれた体であるが、それなりに健康の維持増進に努力し、社会適応の枠を拡げて生きたいし、また旅に出て自然に接する機会も多く持ちたいと思っている。

ＯＢ諸君の健康を祈念しつつ、記念誌に寄せる拙文とします。

１９８１年８月末日

【転載にあたっては初出原稿を改訂しました】　斎藤　勲

俳句に親しみのない人でも読みやすいように、分かりにくい語句にはルビをふり説明をつけました。誤植を修正し、和暦は西暦にしました。

執筆順でいうと本原稿の後で自費出版本の俳句の句作をされておられる。「鹿教湯での二夏」を読了後、自費出版本の俳句を鑑賞すると高橋先生の句作や人生の軌跡が分かり感慨も湧くと思う。本稿最後に書いてあるＷＨＯ憲章はリハビリ後の先生の生き方そのものである。

遺稿

生まれて初めて
一ノ倉に入るの記

ライダース　イン　ザ　スカイ　15 周年記念号（1981 年 10 月発刊）より再録

生まれて初めて一ノ倉に入るの記

（1971 年 6 月 19 日～20 日）

高橋小一郎

若いうちに岩登りに興味を持ち、岩場に魅せられるという機会を失い、沢登りを通して多少岩登りに心ひかれるようになった頃には、生徒との山行が多く、岩よりも雪の山頂に心をひかれてきました。そのため、本格的に岩場にうち込む機会を失ったままこれで岩登りもしないで年齢をとってしまうのも心残りであるし、まだ自分では若い気もあるのだしなどと思って、心の奥底にはチャンスさえあれば、俺でも岩をと「四十八才の抵抗」じみた気持ちを持ち続けていたのが実現したわけでありました。

内心ではこの年齢になって一ノ倉もないもんだと思わぬでもありませんでしたが、過ぐる十数年余程前の三の窓合宿ではチンネを登り残し、次の合宿では都合で参加できず、穂高に入っても岩はやれずといったようなことで、岩登りに対して、うっ積していたものがあったことは確かなもののようでありました。

谷川岳での、あの二重遭難時、熊穴から眺めた冬の夕映えに染まった南面の岩壁のあの美しさ。

雪山の　その美しさは
　　若人を魅了し
その酷しさは
　　若人の命をも

これでは、若い人が命を張っても、雪の岩稜に打ち込むわけだといったような気持ちに、年齢を越えて心動かされたことを想い起こしたりもしました。

この二、三年来、岩魚釣りで沢に深く入りこむようになり、沢を通して、岩壁に対して心の奥深くクスぶっていたものが、燃えだして来たようでした。

なにかの機会に、ＯＢ連中と呑んで気勢があがったときに、「岩場でもお前達に負けていられるか。谷川でも一ノ倉でも一緒に行ってやる」てなことをつい口走ってしまったものと思われます。

それが現実となったのでした。今年は春から割合調子よく山行を稼ぎ、校内マラソンも昨年を上回る記録で頑張ったりで、体の方は自信めいたものをもちつつありました

六月十九日一ノ倉入りということで、その前週、巻機山の沢登りで調子を整え、出発までの一週間は自転車通勤を徒歩に切り替え、深酒もつつしんで、その日に備えました。

当日、一ノ倉出合での仮眠の夜も、今夜は呑めないと心に決めていた程でしたのでＯ

Ｂ三人（斎藤、三村、長谷川一）の心づくしの酒は、本当に美味で寝つきにくい夜のよい寝酒となってくれました。

ウトウトしながらも、やっと明けんとする一ノ倉出合の夜に近い朝の四時半は、梅雨期らしい陰うつさを増していました。

前夜の打合せ通りに、四時半に若い三人を起こして見たもののこの空模様ではいっこうにしまりません。なんとなくグズついた気分で天候待ちの朝食。

なんとなく気の進まないままの出発は五時半でした。南稜取り付きまではガスの中、雪渓を黙々と歩きました。前後のパーティも二、三ありましたが言葉少なに歩きつめていました。

南稜に取っ付いて驚きました。話には聞いていたわけですが踏跡は明瞭、要所にはハーケン、難しい所には鎖まであり、岩を外れた道（踏跡だが）は藪のない立派なものでした。

南稜テラスには後続パーティに追いあげられるようなかっこうで、まあ並みの時間の約一時間で六時半頃着きました。ここまで来ると、戻ることなんか考えられませんでした。

先行パーティの支度を待つ間、バナナを食べたり一服を二服もしたり、他のパーティの様子をそれとなくもの珍しそうに盗み見したりしながら、ＯＢ三人による先生へのシゴキの岩登りに心落ち着かぬ時間が過ぎました。テラスからはみだしそうに後続パーティがひしめく頃、やっと三工パーティのおでましとなりました。

斎藤トップで長谷川を従えて先行、三村トップで、今は、あわれ綱で引かれゆく子羊と化した小生を従えて後続。かくて三工パーティは心静かに出発しました。先ずの一ピッチ目は、霧ションで濡れた滑る岩を慎重に。

二ピッチ目は、チムニーに無理に尻を押し込んで、ハング気味の上にホールドをやっと探り当てつつ、ガッパリ息を切らし、足もガタついて、前途に不安を感じながら、トップの立つレッジにやっとたどり着く。

トップをジッヘルしている間の僅かのゆとりで周囲を見るが、何も見えず、ザイルが二十m伸びると、もうトップの姿も定かでない。トップがどう登っていったのかも確認できないが、後に従うのみ。気にすることもないと覚悟を決めたらやっと気が楽になってきた。心安らかにジッヘルしていたいのだが、後続パーティになんとなく、わずらわされてゆったりできない。

しかしさっきのチムニーで手間取っているのか、後続パーティがおくれ、先行のひとパーティも先に離れたので、わがパーティだけで気分ものってきたし、イキもあってきた。

四十mザイルが一杯にならないうちにレッジに立てるピッチもあり、当初の乱れた呼吸も収まり、岩肌に集中できる気分になってきた。ジッヘルの間に十分にセルフビレーが取れたので初めて一服する。

トップの合図で俺の番だ。行くぞ。

すっきりした登攀をと心がけるが、濡れた岩と脚の短さ、遂に三村の確保するザイルに体重をゆだねざるを得ないポイントもあった。一体にスタンスよりもホールドに頼る場面が多く、もっとすっきりと三点確保の原則通り登りたいのだが、そうもさせてくれない岩の肌であった。

四ピッチ目だかにザイルを岩に噛まれることもあったりで、若干フリークライムでトップに立てたような気分も味わったりしているうちに、ラストピッチ。いよいよ、本登攀ルートのメインイベントとのこと。

先行三人の様子を十分見てとれたので、最後こそ自分の好みのルートを自分の力で、スッキリと思ったが、ラストのカラビナ三回のかけ替えで、腕力もつきそうになり、最後のひとホールドで、またまた脚でなく腕の長さ不足で、指先一寸の不足を三村に助けられて最終レッジに立った。八時半。

ホットした気分だった。ホットした気分の方が先だった。小生と長谷川は、終了点の狭い岩棚をさけて、草付を更に四、五歩登った所で草花に気を移していた。

その間、トップの重責を果たして、なお物足りなさを感じていたであろう斎藤、三村の二人は、ザイルやハーケンの始末をしている。あるいはこの二人にしても、まだこれからの若いヒヨッコと悪ずれしてはいるが岩場の力量定かでない中トルという、パートナーとしては貧弱な二人を、無事ここまで引き上げたことでホッとしているのかも知れないが、そんなことは顔色にも出さず、年齢のわりにバランスがいいなどと冷やかしてくれる。

一ノ倉尾根の草付も不安定なので、もっと上に登って後続パーティにもわずらわされずに、四人でかたまってゆっくり食事できる場所ということで、若い三人は空腹をおして頑張った。

霧ションの中での昼食は楽しかった。水もうまかった。食後の一服もうまかったと言いたいうちに、もう出発で、煙草をくわえながらの急登は息が苦しい。

岩場での緊張から解放された小生にとっては一ノ倉尾根の急登は第二のシゴキとして強くこたえた。

トップの斎藤のペースをなるべく遅れさせるべく、いろいろと話しかけていたが、それもイヤになり、例のクセで一歩一歩と歩数を数えだし、三百歩数えねば息休めをしないと心のうちに決めて頑張ったが、キツイことには変わらず、フウフウであった。

一ノ倉岳頂上の笹藪の中に風を避け、ときたま射す薄陽にぬくもって、こころよい風に汗をひっこめ、腹も張り、うまい煙草を二、三服もし、チャボの感嘆する「ウマイ空気」も胸一杯吸い込んだあとの午睡はこころよいものだった。

このままウトウトしていたい気分ながらの出発はパッとしないが、西黒尾根をイヤがる小生の為に中芝新道をということになった。初めはシャクナゲの盛りの花をめでながらであったが、中ごろよりの泥道と芝倉沢雪渓上部の滑る道に悩まされ、雪渓に乗ったときは、やれやれこれで今日のナンギは終わったかと安心した。

トップに立ててくれた三人の若者の前を歩きながら、ウド、トリアシ、シオデ、コノメ、タラノメと山菜を見ながら若葉の美しい旧道から虹芝寮へ。ここで顔も洗い、満ち足りた気分で静かな新道をゆっくりと懐かしさをかみしめながら歩いた。

土合着。本日のこれこそ本当のメインイベントの始まりは、まずビールで乾杯。五体に快い疲れと酔いが回ってきたところで冷酒を一杯。車中は地酒が「置きっこナーシよ」でよく回され、途中両金子先生も加わり、遂には長岡で途中下車。

吉野茶屋で、金子、小宮の名コンビに調子よく盃を重ねさせて貰い、一ノ倉ならぬ吉野倉であわや遭難寸前を、この山行三度目の三村の助けで無事カアチャンの手に渡されて、オソマツ。

【入力を終えて】　斎藤　勲

これは、1971 年 6 月に一ノ倉沢の南稜の登攀を一緒にやった高橋先生の紀行文である。

パーティを組んだ先生とＯＢ三人のそれぞれの年齢は、四十四歳、二十四歳、二十四歳、二十歳であった。一ノ倉沢のルートを登攀したパーティで先生とＯＢの組み合わせはそう多くはないだろう。

四十四年前はまだマイカーは普及していない。土合への往復は汽車を利用した。車でアプローチを短縮できる現代に比べれば、不便ではあったが今にはないロマンもあった。

車もスマホも持たない当時の若者は、岩登りに熱中する者が少なくなかった。そして未熟さもあって墜落事故などで大勢の若者が死んでいった。土合の慰霊塔の墓碑銘があっという間に増えた頃であった。

私は前年までに、コップ状岩壁、滝沢第一スラブ、衝立岩ダイレクトカンテなどを登攀し、岩場でのトレーニングもかなり積んでいた。バランスや慎重さは研ぎ澄まされ、高度への恐怖心は練習により中和された状態になっていた。三村も同様かそれ以上のレベルであったろう。南稜にも過去に何度か登っていて、満を持してのこの日の登攀であった。

以前、先生が大町に住んでおられた頃にお邪魔したら、知人からの寄贈という一ノ倉沢の油絵を見せて貰った。先生が一ノ倉沢を登ったのはこの南稜が一度きりである。この時の登攀が良い思い出として残っているようだ、と絵を見ながら思った。不肖の教え子は「わが師の恩」に少しは報いることが出来たのだろうか。

なお、再録にあたって誤植は修正した。

遺稿

ﾗｲﾀﾞｰｽ・ｲﾝ・ｻﾞ・ｽｶｲへの

寄稿文

1972 年（Ｓ47）発行　三工山岳部ＯＢ会だより

ＯＢ会の会報発行にあたって

高橋小一郎

時間的にはウンとゆとりのある学校という共同生活の場から、時間的に縛られる職業生活に入り、しかも家郷を離れ不自由な独身生活者の多いＯＢ諸君にとっては、心ならずも日々の生活に追われ、山を想い人恋しいといっても、おいそれとはいかないのが現実でしょう。

去る者は日に疎しとか

心ならずも疎遠を続けている中にお互いの生活も時の流れに流され、かつて文字通り寝食を共にした山仲間といっても、２・３年も会わないと何かお互い変わってしまったようで、なんてことになりかねない。

情報過多といわれている現代、本当に必要な情報は押し流され追いやられてしまう。仲間のことをお互いに気にしながらも様子が知れず、ついつい疎遠になりがちである。年一度のＯＢ・現役交歓山行で、トンネルを越えて来る側の集まりがよくないのは、連絡がよくとれずお互い様子が判らず夜遅くポツンと一人で参加するといった頼りなさも原因してはいないだろうか。夜汽車で駅に降りるとそこに懐かしい仲間がいるということになれば、心うきうき集まるのではなかろうか。

ＯＢ会の会報を出そうという話があり、お互いの心を結び合うよすがとなればと、発行を続けることの大変さを二の次にして大賛成をし協力を約束した。誰々が可愛いカアチャンを貰った、誰かが双子を授かった、誰かがこの夏剣へ行った、在京組の忘年会は盛大であった、現役の活動振りは等々・・・仲間の身辺の様子が知れればよいと思う。部報とは違い社会人仲間の会報であるから、くだけた楽しいもの、読みたくなるものを期待したい。〇〇の呑屋は安くてうまい、美人が酌をしてくれるとか、今年のダービーの穴情報は固いから３－７を買えとか、△△の宿は家族的に待遇してくれるとか、××では尺級の岩魚がワンサとか・・・考えただけでも楽しいではないか。

今夏、庭球のＯＢ会の結成に招かれ炎天のコートで久し振りにコムラがけいれんする程楽しんでタイトルを握らせて貰い、うまいビールを呑むことが出来たが、年一回集まってタイトルを争うとのことで、来年のその日を楽しみにしている。コートに出れば何も忘れて球を打つ。

年に一度山に集まれば何も忘れて昔に帰れる。ＯＢ会のいいところである。

会報の発行を続けることは大変な事業であろうが、受け継がれて永く続くことを期待します。それにつけても編集者の立場になるとニュースが集まらないのが一番困るかと思います。会員諸君のバックアップを願って置きます。

1975年（Ｓ50）発行　ライダース・イン・ザ・スカイ　8号より

～ＯＢ会発足１０周年～　～ＯＢ会に集まろう～

高橋小一郎

厳しい残暑が続きましたが、ＯＢ諸兄には元気で活躍のことと思います。

さて今夏の合宿は剣岳で、大日岳を越え、剣沢、真砂沢とテントを延ばし、三の窓ではジャンダルムでしごかれました。

余勢をかって、石小屋では、岩稜ルートに川村君とザイルを結びました。２年前の時のように落ちることはありませんでしたが、今一つスッキリせず残念でした。取り付き点の第一ピッチには、これでハーケン２ケ、カラビナ１ケが残置されていることになりました。

三工尾根は浮き石をキレイに払い落してきました。藪ももう刈り払う必要もなく、紅葉の頃には楽しめる尾根くだりができることでしょう。

石小屋沢でソーメン流しをやった後の夕餉（ゆうげ）には、別記「石小屋沢」の歌を合唱しました。

今年は第１０回目のＯＢが出た年ですから、ＯＢ会発足１０周年ということになりましょうか。

記念に石小屋沢で、現役との合同合宿でもと思ったのですが、集まる便から、例年通り巻機山でということになりました。

結婚された会員も８人（これ以上いるかもしれない）おられ、公私共に多忙になっていることと思いますが、近くの仲間に呼びかけあって、是非多数で参加して、賑やかにやりましょう。

頃もよし、紅葉の山麓で酒を汲み、山の気に打たれて俗塵を払い１日の清遊で英気を養いましょう。

では顔ぶれが揃って楽しい集いになることを大いに期待しつつ。

別紙：「石小屋沢」を想う歌　添付

「石小屋沢」を想う歌

高橋小一郎

1　吾は山の子　さすらいの
　「アオ」①の住みなす　笠堀に
渓の深みや　樹の緑
　今日の泊場は　石小屋か

2　ブナの梢が　揺れながら
　谷間に煙　流れれば
夕餉の集い　待つがごと
　渓にたそがれ　たちこめぬ

3　我を迎え死　石小屋に
　たき火燃えさかり　語りつきず
沢音破る　仏法僧
　いざや聞かんかな　耳すまし

4　渓の夜明けは　暗けれど
　心ははずむ　沢登り
霧に濡れてる　姫小百合
　目指すスラブは　陽に映えて

5　暗いゴルジュに　滑る岩
　しぶきはかかる　「イヤガラセ」
越えて陽に映(て)る　俎(まないた)②の
　スラブに燃やせ　若い血を

6　風は涼しく　息休め
　登りつめたる　ザッテルは
五葉の林　シャクナゲの
　花の道なる　「三工尾根」

7　秋は紅葉(もみじ)に　色はえて
　風は白根(しろね)の沢　渡り
岩魚住む渕　青く澄み
　山のあなたは　光明か

8　ガケに懸かれる　老松の
　幹に命のザイル　たくし
浮き石飛べば　声かかり
　息の間に見るは　岩小屋か

9　河岸台地の　ブナ林
　昔のままに　残れるは

これぞ自然の　恵なり
　ここに幸あれ　山岳部

10　想いは残り　振り返る
　松の緑も　いや深く
ウルイサドリに　咲く花は
　雪の下にも　耐えるかや

註①　アオ：カモシカのこと。アオ or アオシシとも言う。
註②　シルバーザッテルより石小屋沢のツメに広がるスラブを俎ぐら（くらはスラブの意）と言い、5 万分の 1 地図にも記号はついている。

楽譜は「第三高等学校琵琶湖就航の歌」と同じ。
譜の読める人は、ギター、ハーモニカ、ピアノ、バイオリンで音を合わせ、メロディーを憶えておいて下さい。
歌詞は合宿の折に皆で歌っている中に、皆の心に合ったものが自然と生まれてきて、歌い易い、長く続いて歌えるものになるかと思いますので、試作の文言にこだわらないで下さい。
６月３０日の夜、一人飲みながら、一晩でできた歌詞ですが、無理な所も多いと思います。山岳部、ＯＢ会の心の歌となり、合同合宿の折には、いつも自然のうちに歌われる歌となってくれればよいかと思います。

1975.7.1

1978年（Ｓ53）　ライダース・イン・ザ・スカイ　12号より

「元気です」　高橋先生のたより～

お陰様で、９月から勤務復帰できました。

暑かった夏も、どうやら無事に過し、勤務にも次第に慣れ体調も良く、食欲の秋で肥るのを制するのがやっとです。

人生５０年とか。これからの余生は、小生にとっては今迄とは別の新たらしい人生という気がしますので、マイペースでゆったりと静かな日々を送りたいと思っています。

岩室入院中は、秋には、また皆んなと清水の山里で再会できるんだと、それを楽しみに訓練に励んできました。

生きていることの幸せに、皆んなの健康に乾杯しましょう。

真夜中に　名月眺め　うなづいて
**　また安らかに　眠りに入りぬ**

‘78.9.17（中秋の名月）、高橋小一郎

注記

高橋先生は 1977 年（Ｓ52）12 月に脳梗塞を発病され、三之町病院を経て岩室病院でリハビリに励み、「元気です」の便りを寄稿してもらいました。

1981年（S56）　地区集会へのメッセージ

メッセージ

ＯＢ会の集まりと聞けば、何をおいてもと思うのですが、学校の忘年会と重なりましたので、グッと自重してメッセージで参加させて貰います。

今年は忘れられない良い年でした。

OB会15周年記念、体育功労賞、倅の地元就職内定と重なりました。

記念にいただいたマチャのパネルは、居室に飾り、寝ながらも眺め、眺められております。

倅はどうやら、卒業できそうですが次男はまだ２年生で、細くなった片脛を更に齧られます。

松柏盆栽に力を入れて数年、やっと育成の方針も判ってきましたが年数がかかりますので、つなぎに花物、セッコク、ランなども楽しんでおります。

今は、正月用の梅、黄梅、ボケを手入れし、アザレア、スミレ、雪割草は早春に咲き、シンピ、セッコク、サツキと続いて、花が終わった夏休みには、また鹿教湯へ参り、今年こそ燕岳に登り、安曇野をのんびり回りたいと思っています。

俳句に手を出して３年目､地方俳句誌同人にも加えて貰って精進してはいますが、道遠しでまだこの程度です。

秋の陽の　きらめく千曲　懐古園
秋燈下　ひとつ食卓　ふた夫婦
元朝の　お神酒祝いて　父八十路

柏風（ハクフウ）

では盛大に、そしてよいお年を

56.12.15
高橋小一郎

注記
１５周年記念地区交流会に対する高橋先生のメッセージです。
新潟地区は、４回生の平松氏のお世話で、12月19日に泊りがけで弥彦グランドホテルで忘年会を行ないました。

1984年（S59）　ライダース・イン・ザ・スカイ　21号より

犬と山へ

高橋小一郎

三月末で退職しました。毎日が日曜日で、曜日を忘れがちなのんびりした日々を過ごしています。近況を若干。

・朝は五時半（夏場は五時）起床。八ヶ月になる芝犬（コロ）に起こされるので、直ぐさんぽに出かけます。五十嵐川左岸を曲渕まで歩いて約四十分（オシッコとウンコでこの位はかかる）広い川原で話してやり自由に遊ばせます。仔犬の頃からの遊び仲間の「チロ」もやって来て六時半まで遊び回ります。帰りはトットと歩くので七時半帰宅。朝食後、息子の出勤の車に便乗して新通川へ八時着。半日位鮒釣り。学校のチャイムを聞きながら、のんびり釣りを楽しみます。お昼には帰宅（時には二時、三時になることも）。昼食後はゆっくり昼寝。その後新聞を読み、鉢物の手入れをしたりしている中に、夕方の犬の散歩。この時は近くの川原で夕暮れの川を眺めて過ごすことが多い。今は落鮎のシーズンで、夕食後も犬と鮎のゴロ掛けを偵察に行くこともあるが、川水が少なくそうは掛からない様子。就寝前一杯呑んで、十時頃には床の中。
こんな毎日ですので、雨の日は困ります。鉢物の入念な手入れ、俳句の吟味、雑用足し、釣具手入れ等をしています。今の所、読書にはあまり親しんでいません。退職したらというつもりで買い置いた本が多いのですが、それはもっと足腰が弱ってからでも。

・退職者の旅行会（バスでの一泊）が春・秋にあります。春は新緑の妙高で山菜料理を楽しむ会でした。秋は同じ妙高の宿泊ですが、長野、戸隠と回り、岩の原（高田市外）でワインとぶどうを楽しむ会です

・市内の「老いらく山岳会」に妻より３年遅れで入会しました。月一回の山行が計画されているので、その中から自分に合ったものを選んで同行します。六月の安達太良山（妻と同行しましたが、雨で途中から退却しました。雨にはすっかり弱くなりました。）、九月の守門も雨で断念しました。

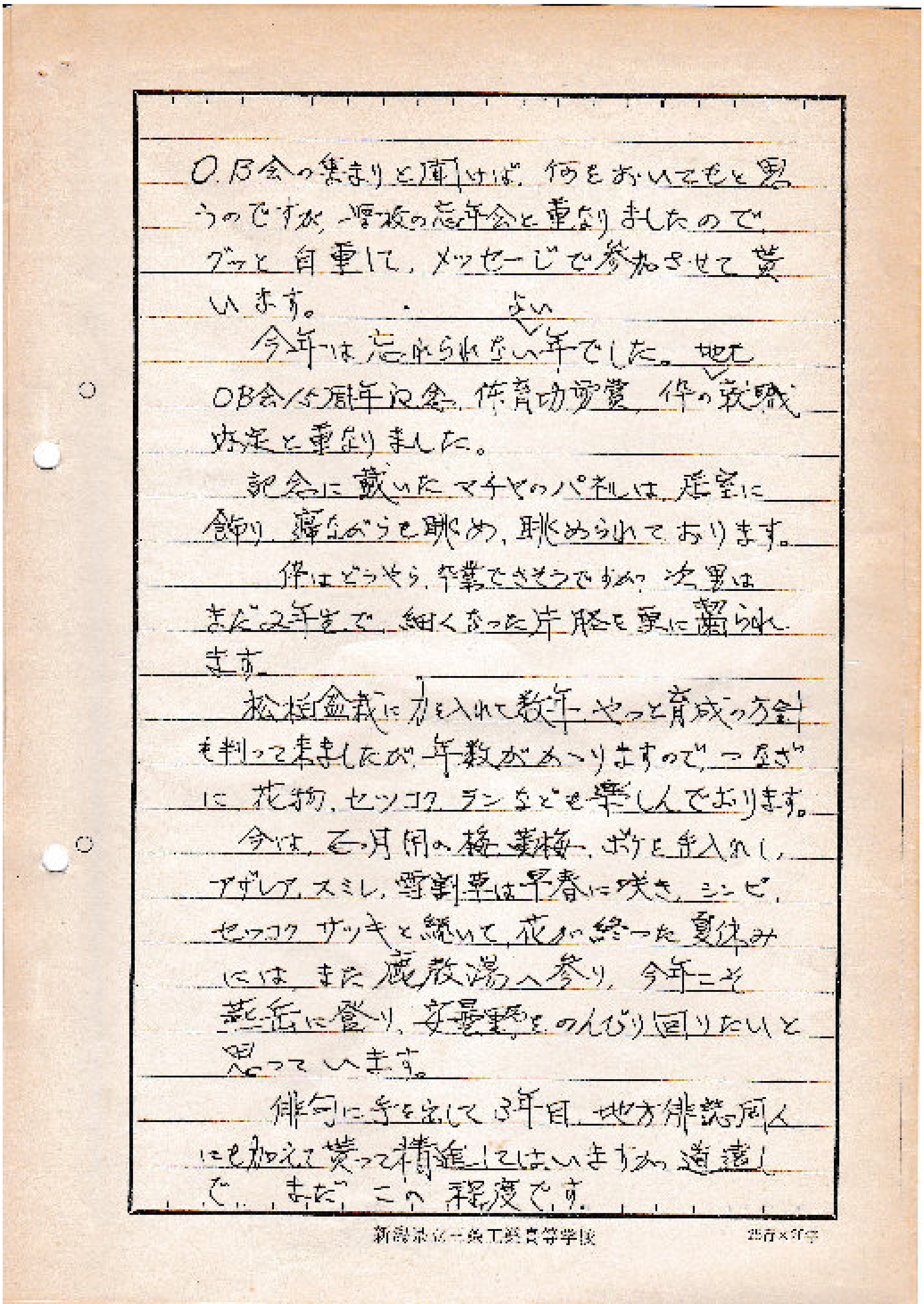
・春の探鳥、山菜採りは年中行事です。今年は妻の実家の裏山へ犬を連れて半日遊んで来ました。森の中で寝ころんで静かにしていると、いろんな小鳥が近くを通ります。ビールを呑み、握り飯を食べ犬に引張られて山を下り、五十嵐川沿いに夕方頃帰宅し

ました。この秋から茸採りにも犬を連れて行く予定です。茸を教えてくれる犬にならないかなあと夢みています。来春からは残雪の山へ連れ出し、兎でも追わないかと思っています。キャラバンシューズで頑張りましょう。

・十月始めに俳句の会で金沢へ出かけます。身障者手帳が交付され、汽車賃が半額になるので助かります。来夏は少し長い旅が出来ればよいがと思っています。

遺稿

高橋先生からの手紙



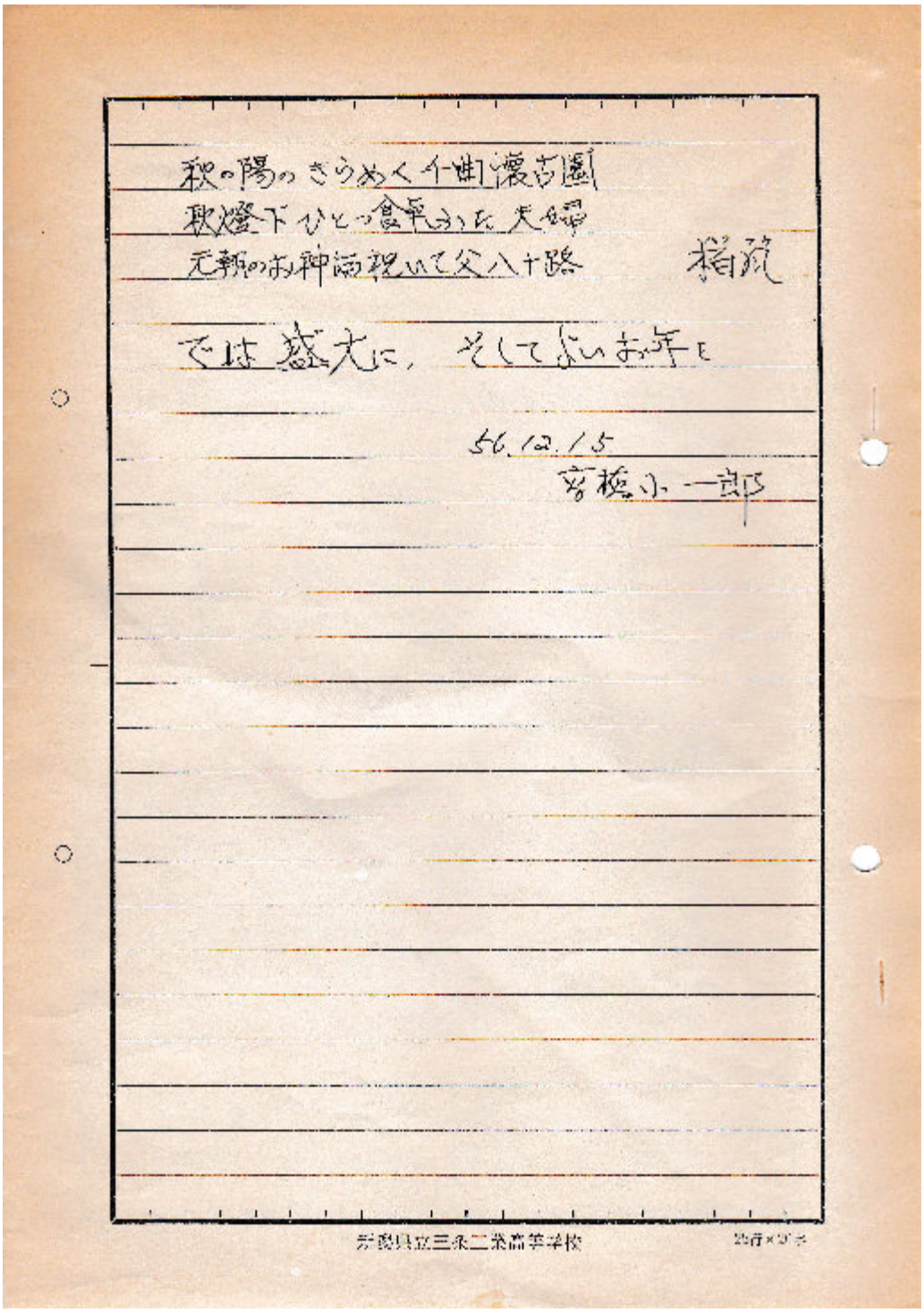
O.B会の集まりと聞けば、何をおいてもと思うのですが、学校の忘年会と重なりましたので、グッと自重して、メッセージで参加させて貰います。
今年は忘れられないよい年でした。地元OB会15周年記念、体育功労賞、倅の就職内定と重なりました。
記念に戴いたマチヤのパネルは、居室に飾り、寝ながらも眺め、眺められております。
倅はどうやら卒業できそうですが、次男はまだ2年生で、細くなった片脚を更に蹴られます。
松柏盆栽に力を入れて数年、やっと育成の方針も判って来ましたが、年数がかかりますので、つなぎに花物、セッコク、ランなども楽しんでおります。
今は、正月用の梅、紫梅、ボケを手入れし、アザレア、スミレ、雪割草は早春に咲き、シンビ、セッコク、サッキと続いて、花が終った夏休みには、また鹿教湯へ参り、今年こそ燕岳に登り、安曇野をのんびり回りたいと思っています。
俳句に手を出して3年目、地方俳誌の同人にも加えて貰って精進してはいますが、道遠しで、まだこの程度です。

新潟県立三条工業高等学校

高橋先生からの手紙 1-1(1981 年 12 月 15 日)

1977 年 12 月の脳梗塞発症後、入院加療、リハビリに励み、翌年 9 月に職場復帰された。

1980 年、1981 年の夏休みには「鹿教湯での二夏」のリハビリをされた。また、俳句の投稿も始められ心身とも充実の時ではなかったかと思う。15 周年記念誌発刊が発刊されたこの年のＯＢ会総会は、職場の会と重なり残念ながら欠席されメッセージで近況報告された。

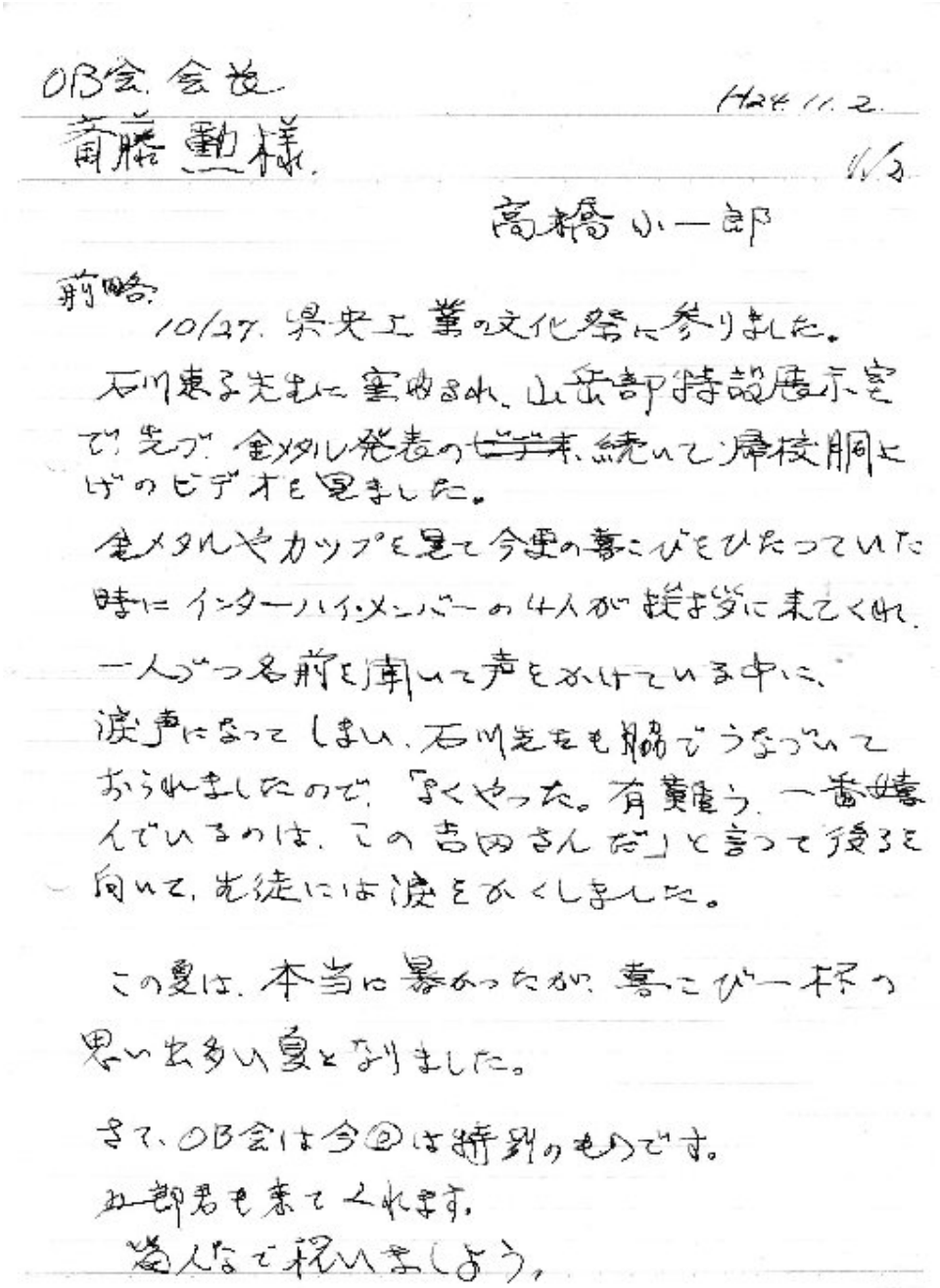

秋の陽のさらめく千曲懐古園
秋燈下ひとつ食卓をかこむ夫婦
元朝のお神酒祝いて父八十路　　柏風

では盛大に，そしてよいお年を

56.12.15
高橋小一郎

高橋先生からの手紙 1-2(1981 年 12 月 15 日)

この手紙にも嬉しかったこと、楽しみにしていることが書いてあり、何事にも一生懸命で明るく前向きな性格の一端がうかがえる。「柏風」(はくふう)は自費出版本では使われていないが高橋先生の俳号だと思う。また前頁にある「マチャのパネル」はＯＢ会有志 4 名が正月にネパールトレッキングをした際に写したマチャプチャレのパネル写真のことです。



OB会 会長
斎藤 勲様

H24.11.2.
1/2

高橋小一郎

前略
10/27. 県央工業の文化祭に参りました。
石川東子先生に案内され、山岳部特設展示室で先づ金メタル発表の~~ビデオ~~続いて帰校胴上げのビデオを見ました。
金メタルやカップを見て今更の喜こびをひたっていた時にインターハイ・メンバーの4人が挨拶に来てくれ、一人づつ名前を聞いて声をかけている中に、涙声になってしまい、石川先生も脇でうなづいておられましたので、「よくやった。有難う。一番嬉んでいるのは、この吉田さんだ」と言って後ろを向いて、先徒には涙をかくしました。

この夏は、本当に暴かったが、喜こび一杯の思い出多い夏となりました。

さて、OB会は今回は特別のものです。
五郎君も来てくれます。
為人なで祝いましょう。

高橋先生からの手紙２(2012 年 11 月 2 日、斎藤　勲あて)

10 月 27 日、県央工業高校の文化祭に行かれた。石川先生に案内され、インターハイ優勝のビデオや展示を見て、インターハイ・メンバーの挨拶を受けられ感激もひとしおだったようだ。

ＯＢ会総会で現役生徒に喜んでもらい、盛大に会を盛り上げて欲しいとポケットマネーが同封されていた。

H.25.6.26

前略

本日は早速立派に編集された大冊子(記念すべきもの)を「インターハイの軌跡」のこと お届け下され有難う。

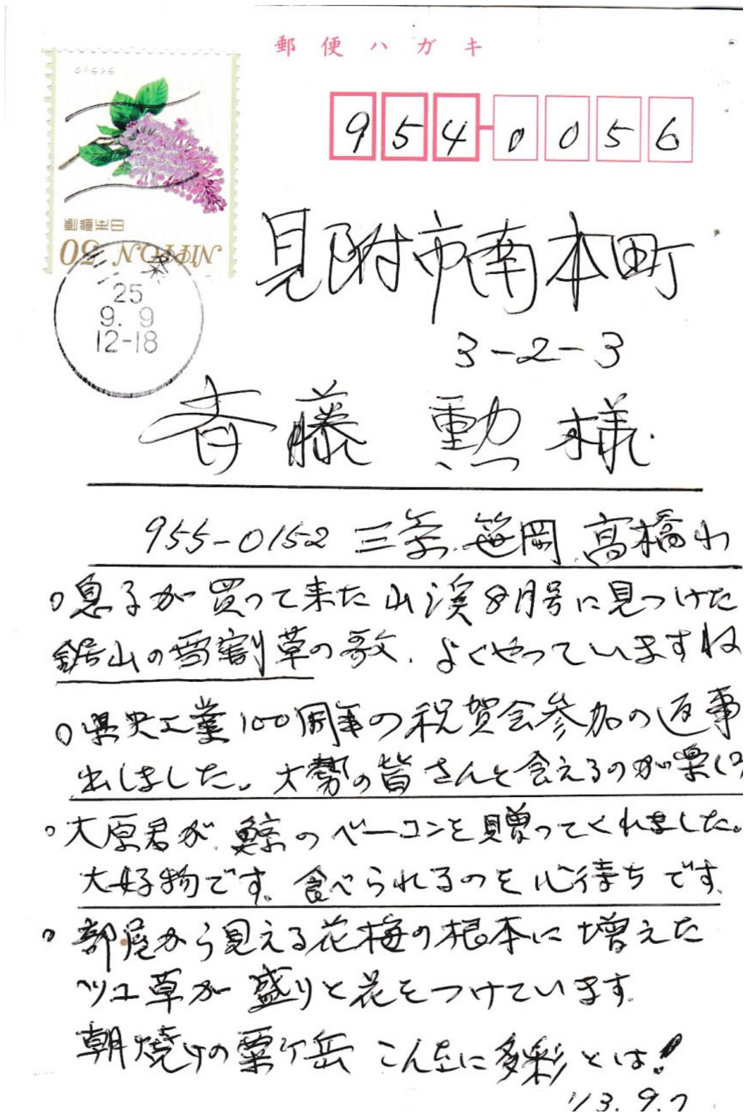
ゆっくり読むつもりでしたが、矢る盾り、心急ぐままに頁をめくっていましたが、「老OB会長は涙が止まらない」の文で日頃の貴方の山に対する考え方や情熱、そして後輩を思う心を感じて思わず涙ぐみ、吉田さんに思いを伝えたく9時半過ぎTelしましたが伝わりませんでした。

高橋先生からの葉書(2013年6月26日、斎藤　勲あて)

「インターハイの軌跡」(電子版)が完成したので、2013年6月24日午前中、10年以上使って半故障状態のプリンターで2時間半かけて印刷した。用紙はこの印刷用にスーパーファイン紙を買い求めてきた。印刷終了後、ファイルに綴じて、2時に高橋先生の自宅にお届けした。

以前からこのような文書の編集を強く望んでおられた先生は大変に喜ばれた。
紙媒体での発行は避け、猪熊さんの提案で電子版という形での発行になったと説明したら、その柔軟な発想にも感心しておられた。

これはその礼状である。


郵便ハガキ
954-0056
見附市南本町
3-2-3
斉藤 勲 様
955-0152 三条 笹岡 高橋わ
・息子が買って来た山渓8月号に見つけた鋸山の雪割草の歌、よくやっていますね
・県央工業100周年の祝賀会参加の返事出しました。大勢の皆さんと会えるのが楽しみ
・大原君が鯨のベーコンを贈ってくれました。大好物です。食べられるのを心待ちです。
・部屋から見える花梅の根本に増えたツユ草が盛りと花をつけています。
朝焼けの粟ケ岳 こんなに多彩とは！
'13.9.7

高橋先生からの葉書(2013 年 9 月 9 日、斎藤　勲あて)

「劔の詩」の絵葉書を使って書かれたものである。「山と渓谷 2013 年 8 月号」山の短歌欄に私が投稿した短歌(http://mtob.sakura.ne.jp/kikou/saitou/harukaze.html)が載っているのを見つけられ喜んで書き送られたものです。

箇条書きにされた他の事柄も、嬉しいこと楽しいことに満ちていて、先生の明るく前向きな性格が良くうかがえる。私の好きな葉書である。

裏面には、自分の好きな山域での事故で関心があったのか、7 月 21 日に長次郎の頭であった新井和也カメラマンの落石死亡事故のことが書かれている。

高橋先生の手紙

吉田　光二

学校の 100 周年式典間近の時、高橋先生から封書が届いた。

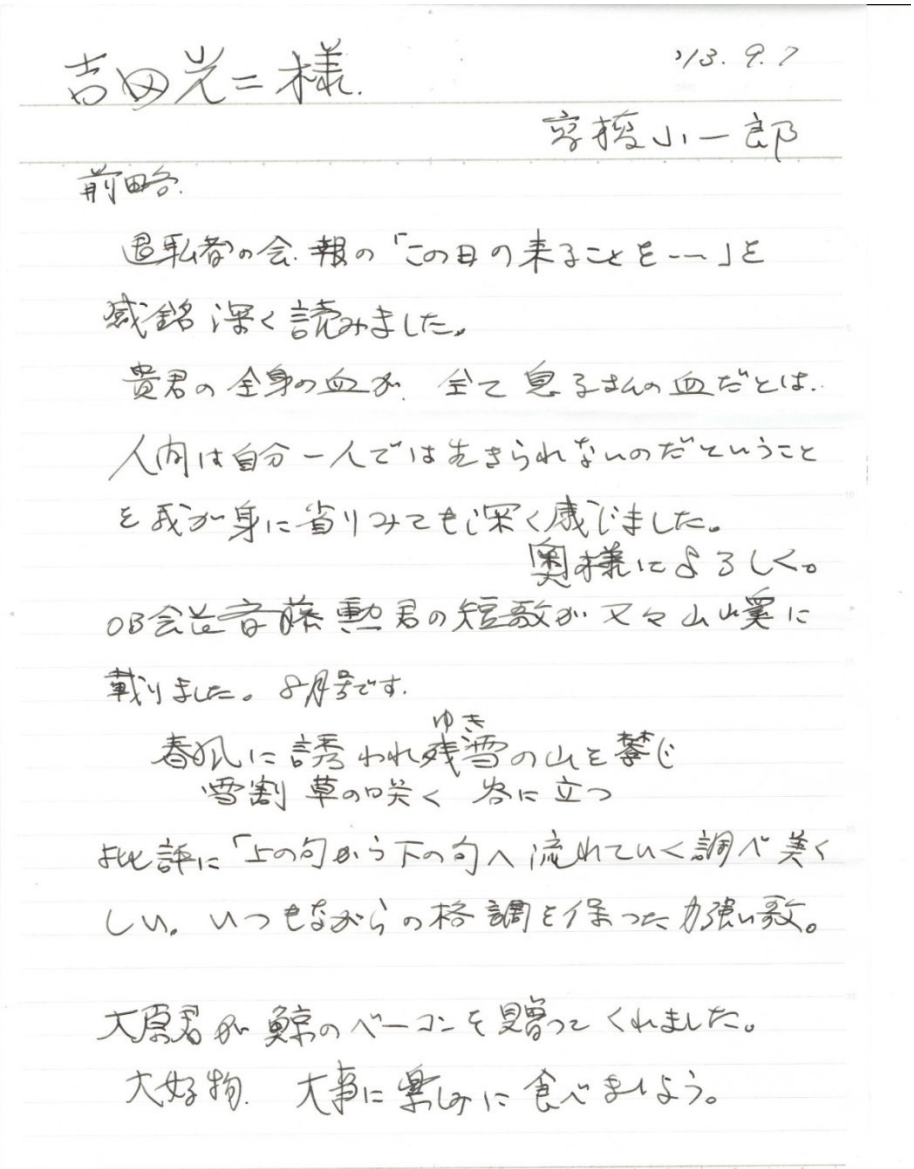
一枚は、私が退職者の会報に書いた文についての感想と斎藤さんの短歌が山渓に掲載されたこと、大原さんから鯨のベーコンが届いたことのお知らせだった。'13.9.7 と記されている。

二枚目は、'13.10.5 で柏風と記されている。

封書は平成 25 年 9 月 9 日の消印だ。100 周年事業の大詰めにいて忙しいであろう私への激励とご自身の 100 周年式典への期待を込めてのものと受け止めた。

俳句を式典に活用することを検討したが残念ながら至らなかった。

「母校の変遷、あまりにも多い。これが、実業（産業）高校の宿命か。それにしても、これを、どうまとめてゆくべきか。」という先生の言葉は同窓会のテーゼとしている。



吉田光二様　　'13. 9. 7

室蘭小一郎

前略

退職者の会報の「この日の来ることを――」と感銘深く読みました。

貴君の全身の血が、全て息子さんの血だとは。人間は自分一人では生きられないのだということを我が身に当りみても深く感じました。

奥様によろしく。

OB会誌斎藤勲君の短歌が又々山渓に載りました。8月号です。

春風に誘われ残雪（ゆき）の山を辞じ
雪割草の咲く谷に立つ

比較的「上の句から下の句へ流れていく調べ美くしい。いつもながらの格調を保った力強い歌。

大原君が鯨のベーコンを贈ってくれました。大好物。大事に楽しみに食べましょう。

県央工業高校100周年を祝う。

ソ3. 10.5. 梅風

百年は尊きものぞ今朝の秋

あの人もこの人も亡き百日紅

物作る人を育てて百日草

蒲原の一の木戸より秋の百合　（創立）

煙突が校地に残る秋の空（商工学校）

嵐堤の桜紅葉の偲ばるる（田島・実業学校）

エンジニヤ2万5千の秋祝う　（三条工）

校内に冷蔵庫乗せ豪雨去る（〃）

スポーツを誇れる母校天高し（〃）

中の口水車に群れる赤トンボ（県央工）

中の口．流れは永久（トワ）に尽きまじき（〃）

母校の変遷余りにも多い。これが．実業（産業）高校の宿命か。　それにしても．これを．どうまとめてゆくべきか．~~トレーニング室は後~~

高橋先生は、商工学校から県央工業まで全てについて語ることのできる最後の人だった。

高橋先生と山岳部員

（卒業アルバムより）

高橋先生と山岳部員（卒業アルバムより）

昭和 41（1996）年卒　１回生

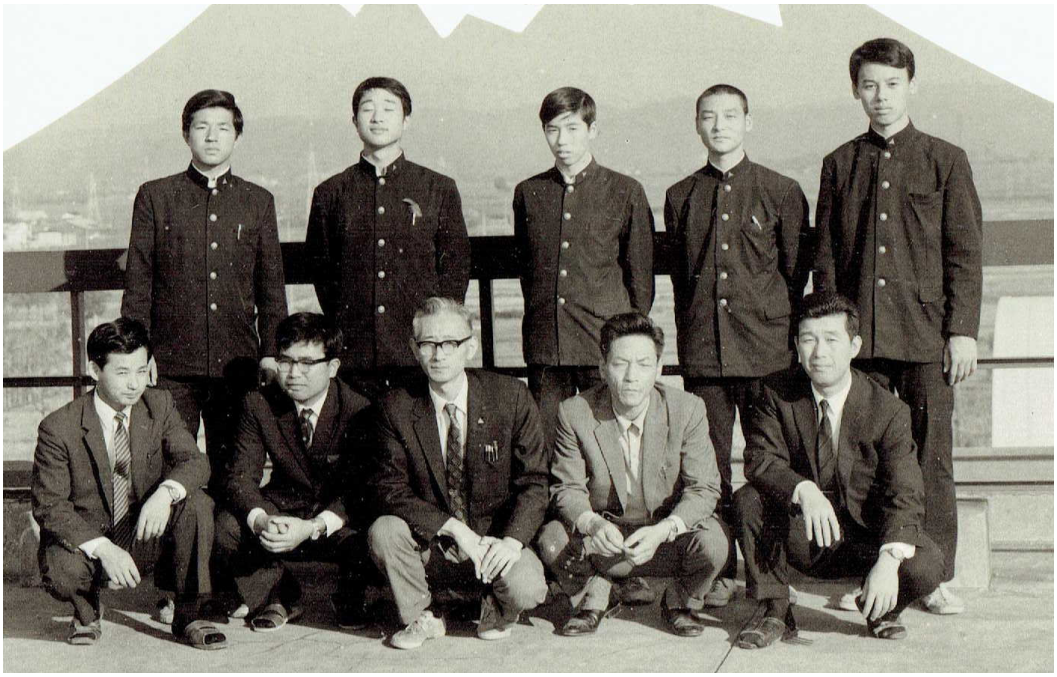
顧問は左から今泉先生、高橋先生、金子先生

昭和 42（1967）年卒　２回生

昭和 43（1968）年卒　３回生
高橋先生の右は若島先生

昭和 44（1969）年卒　４回生

昭和 45（1970）年卒　５回生
立っているのが３年生　その他は２年・１年生
今泉先生の左は加藤先生



昭和 46（1971）年卒　６回生
顧問左端は大原先生、右端は小倉先生

昭和 47（1972）年卒　７回生　中央２名が３年生

昭和 48（1973）年卒　８回生　クラブ写真がないので集合写真から

昭和 49（1974）年卒　9 回生

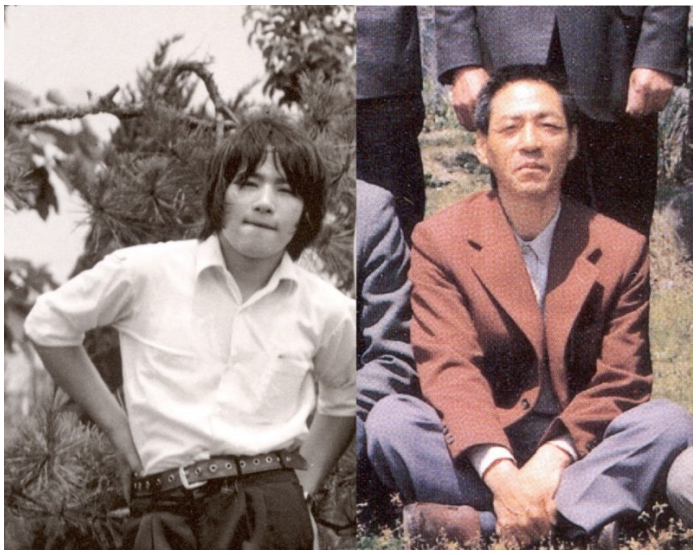
昭和 50（1975）年卒　10 回生

昭和 51（1976）年卒　11 回生
高橋先生の右は丸山先生

昭和 52（1977）年卒　12 回生
高橋先生の左は増田先生

昭和 53（1978）年卒　13 回生

昭和 54（1979）年卒　14 回生　高橋先生は病気療養中



昭和 55（1980）年卒　15 回生　クラブ写真がないので集合写真から

昭和 57（1982）年卒　17 回生

高橋先生の右は佐藤先生

昭和 58（1983）年卒　18 回生

昭和 59（1984）年 3 月　高橋先生ご退職される

※昭和 56(1981)年卒　16 回生は卒業部員がいませんでした。

ご遺族のお言葉

父、高橋小一郎の想い出

高橋　哲朗

おやじが亡くなり、一ケ月が過ぎました。あまりテレビを見たり新聞も読む気になれず、仕事をして一杯やり、おやじの写真を見て寝るという日が続いています。

おやじは俺をどう思っていたんだろうと思います。小学生の頃、算数の勉強が嫌で冬の道をはだしで上町(今の本町一丁目)まで逃げ、おやじが追っかけて来たことがあります。

でも「勉強しろ」などと言われたことはそれ以降なかったように思います。たぶん、何がしか自分で自分の生きる道を見つけるのだろうと、見守っていてくれたんだと思います。

(もしかしたら、俺の背中を見て育っているんだからお前もいずれなんとかなるだろう、くらいに思っていたのかもしれません)

おやじが脳梗塞になり、三之町病院、岩室温泉病院、鹿教湯温泉病院と学校への復帰のため一生懸命、治療・リハビリに励んでいる時、私は大学生でおやじの苦労や、「絶対復職してやるぞ」という強い気持ちもよく分からず過ごしていたように思います。(親の心、子知らず、馬鹿息子ここにありという感じです)

笹岡に越してきた後、おやじと二人だけで飲んでいる時にその事に対してお礼を述べると、少し泣くのを堪えていた様子でした。あの時言葉に出して伝えておいて良かったと思っています。

くよくよしたり、愚痴や人の悪口を言わない男でした。自分の置かれた状況や環境の中で最大限人生を楽しもう、充実させようという気力をいつも持っていた男だったなと今も思います。

時にそれがにぎやか過ぎて、隣の家の人に「おやじの歌が聞こえませんか？」と尋ねると「大丈夫ですよ、そんなに気になりませんから、楽しそうなお父さんですね」と言

われました。

（毎日寝る前に、剱の歌等、山の歌をお袋に聞かせながら眠るというのが日課でした。）

「やはり聞こえている」という感じでした。又、テレビを見ながら自分で感想を大きな声で話しながら見ているもので、今年なでしこジャパンがワールドカップで準優勝した時に佐々木監督のインタビューが聞こえず、「ちっと、黙って見ててくんねかね」などと言った事もあります。

このように、おやじはいつも持っている力や頭脳や思いをフル稼働させて生きようとしている様子がありました。

今、我が家は静かです。娘も「じいちゃんいないと静かだね、ここにいて何時もなんか喋っていたよね」と言います。

いつかは来る日という気持ちもありましたが、実際に亡くなると相当変な変な感じです。

私も五十七歳になります。これからはおやじが残した「我が青春の山旅・中断した俳句作り」、「ライダース・イン・ザ・スカイ」、「秀峰山岳会会報」などを開き、行ける範囲で時々おやじの足跡をたどる山旅に出るのが楽しみになりそうです。

ＯＢ会の皆様、のんべえ小一郎の事をかわいがり、いっぱい遊んでもらい、支えてくださった事に感謝するばかりであります。

ありがとうございました。

追悼の言葉

（元顧問・ＯＢ）

感　謝　状

高橋小一郎 様

あなたは永年に渡り母校山岳部顧問として部の発展に努められご勇退後も部とＯＢ会のシンボルとしてそれぞれの活動に励ましと助言をいただきました

山岳部創設 50 周年を記念してここに感謝の意を表します

平成２５年１１月１６日

新潟県央工業高等学校（旧三条工高）山岳部ＯＢ会

会長　斎　藤　　勲

追悼　高橋小一郎先生

ＯＢ会会長　斎藤　　勲
昭和 41（1966）年卒　1 回生

斎場で見る高橋先生の顔が小さくなった。別れの時が来たと思った。

気働きが出来、その才能を愛された渡辺五郎、長谷川一良、吉田光二氏等と違い劣等生の小生のことはいつもはらはらして見ておられただろうと思う。「1 回生は苦労を知らないアンニャッコ」といつもたしなめられたものだ。卒業以来、人生の節目ふしめで随分と迷惑もおかけした。

ネパールへ 5 年連続で出かけた時は呆れた声で電話を頂いた。
笹岡へ越されてからは、粟ヶ岳へ登った帰りに時間が許せばお寄りして一服させていただくのが私の習わしだった。
雑誌「山と渓谷」に私の短歌が掲載されたのを見つけられて喜んで葉書を下さった。

OB 会 50 周年谷川ハイクの折、雨の中、一ノ倉沢出合まで出かけたみんなを先生とバスの中で待っていた。手の不自由な先生の為に、さっきまで先生が使っていた折り畳み傘を畳んで差し上げた。畳まれて私から返された傘を一目見た先生は、何も言わずもう一度、もっとキチンと折り目どおり畳み始められた。折り畳み傘はこうして畳むのだと無言で言っているようだった。あれには本当に参った。思い出すと今でもグウの音も出ない。
近年は年に数回、手紙でのやり取りが楽しみであった。いつも母校山岳部のことを気にかけられ最後に一言書き添えられていた。その手紙ももう来ない。

人生も山登りも、良く考えれば色々な選択肢や楽しみ方が無限にあるのだと身をもって教えて頂いたと思う。
高橋小一郎先生、長い間ありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。

朱鷺草（とき そう）の咲く霧の中師は逝（ゆ）けり

合掌

野の人・高橋小一郎

元顧問　**金子　　達**

山　の　お　や　じ

県央工業の同窓会事務局長の吉田さんから高橋先生がお亡くなりになったとの知らせを受けた時、私は「高橋先生は私にとっておやじみたいな存在だから」と言った。

でも、私と高橋先生とは１３歳違いだから私が先生を「おやじ」と言う程の年齢差ではない。それなのに、どうして先生をおやじみたいに感じたんだろう。

私が初めて高橋先生とお逢いした時、先生はまだ４０前だったけど精悍な顔つきで貫禄があった。それに対する私は精神的にも登山技術・知識も幼稚だったから、先生との実年齢の差以上の年齢差を感じたのだろう。

高橋先生に感じた「父」は、おっかない、近寄り難い「厳父」ではなく、暖かく包み込んでくれる「慈父」であった。

高橋先生をはじめ、今泉・大島両先生が、力強い後ろ盾となって下さったので、新米顧問の私は安心して山に入れた。

情　熱　の　人

高橋先生と奥様は大恋愛のすえ結ばれた。でも、すんなり結婚できたわけではなかった。恋の悩みをかかえて登った守門岳のことが『我が青春の山旅』にある。昭和２８年の１０月のことだから先生２６歳の時だ。

> 寝静まった小屋。もっくり起きて火を燃しながらその夜は、夜の更けゆくままに物思いに深く深く沈んでいった。……山に相談に来て良かった。……これでよかったのだ。これからだ。帰ったら早速おふくろに話そう。改めて、火を燃やそうと、灰を払って埋った火に新しい空気を送ってやればよいのだ。燃え出して来たら太い太い丸太をくべて生涯消えることなき火を燃し続けよう。生命の火を！　二人の生涯の火を！　このブナの丸太の如き温かい火を燃やそう！！

と書いておられる。この本の中で一番感動的な場面である。

先生の情熱は教科指導は勿論、就職指導にもクラブの指導にも発揮された。

新潟県の高校山岳部で、春山・夏山合宿はどこでもやっているだろうけど、三条工業では、夏山合宿は３次まであり、冬山合宿・スキー合宿もあった。

吉田光二さんが『ライダースインザスカイ』４０周年記念号で、

> 冬・春では粟ヶ岳合宿。凍てつく北峰の斜面を段切りにして「ホテル北峰」を設営。氷化した粟ヶ岳に遊んだ。
>
> 夏山では、大日岳～剣岳～水平道での合宿。称名滝から大日岳、奥大日岳を越えて剣沢に入り、まずは別山尾根から剣岳アタック。翌日には長次郎谷から剣岳に再ア

タックして平蔵谷をグリセードで下山。雪渓に慣れたところで三ノ窓に登りジャンダルムへ。最終日は水平道をひたすら歩いて櫛平で終点。剣の良さを堪能した合宿だった。

いずれも高橋小一郎先生に連れて行ってもらったものだが、現在では高校山岳部としては考えられない山行内容である。

と記している。

こうした高橋先生の情熱を受け継いだ後継者によって、全国高校総体第１位を実現させたのだ。

先生はまた就職指導の繁忙期である３学期、部報のガリ切りに取り組まれた。「部報」４号の編集後記を見ると、

特に高橋先生の頑張りは大変なものでした。スキーで右手を痛めたんですが、サロンパスをはりながら、原紙を切って下さいました。この本の大半はそうした高橋先生の字でうめられています。

と記されています。部報のバックナンバーは高橋先生の情熱の結晶である。

義　の　人

越後の英雄上杉謙信は、義の人だと言われている。武田信玄に攻めたてらたと北信濃の武将が謙信に救いを求めると、謙信は信濃に出兵しているし、小田原の北条氏に攻めたてられた関東管領の上杉憲政が謙信のもとに身を寄せると、謙信は関東管領の旧領を回復するため、越後山脈を越えて（「越山」という）関東に度々出兵している。このあたりから謙信を「義」の人と呼ぶようになったようだ。

高橋先生も義の人で、昭和 41 年の暮に起った谷川岳の東尾根の遭難の救助隊に先生も加わっている。この救助隊も雪に閉じ籠められ、二重遭難の危険に陥った。この時、食糧や燃料の管理を自然と高橋先生が取りしきることになったという。救助隊の人たちは高橋先生に命を救われたみたいなものなのだ。

もう一つ、昭和４４年に三条東高校の山岳部が全国総体に出場することになったというのに、東高校の吉副・本間の両顧問のどちらも引率できない事態になって、高橋先生のところに臨時監督の依頼が来た。

大会期間だけじゃなく、事前のトレーニングや準備万端まで面倒みなくてはならない大仕事なんだ。三条工業の方の仕事も手を抜けないし、私なら 100%引受けないだろうというケースなのに、高橋先生は引受けられ、立派に依頼事項を果たされたし、三条工業の方の仕事にも穴を開けられなかった。

ア　ニ　マ　ル　高　橋

昭和４１年、三条工業の職員旅行のバスの旅で、三国峠を越えた群馬県側の赤谷湖畔でトイレ休憩となった。時に１０月１５日だ。それなのに　**ナント**　高橋先生が桟橋から湖へ飛び込んだのである。酒も入っていたし、準備運動もなしで、いきなり飛び込んだんで、皆んなはすごく心配していた。だけど、ひと泳ぎして戻って来た先生は、笑い

を浮かべ、桟橋へ上がったが、また　**ナント**　である。フリチンだったのである。

このことから高橋先生に「アニマル高橋」という名称が贈られた。

ローマは一日にして成らずで、アニマル高橋は一日で生まれたのではない。高橋先生には「剛壮快活」という言葉がピッタリだ。この気風は若い頃からあったもので、『我が青春の山旅』を見ると、昭和２６年に妙高山に登った時の記録では、

> 国体コースの大倉山・神奈山の尾根をヤジキタ道中そのままに口は出まかせ道は足まかせに、ブラブラと下駄ばきのまま歩いた。…関温泉まで一時間半位……国体コース神奈山の下りを直滑降ならぬ下駄っぱきで、転げるように走り出した。

と記す。これじゃ　〽足駄がけ　八里の磐根踏み鳴らす　という『箱根の山』の歌詞といい勝負だ。

俳　号　は　柏　風

「アニマル高橋」というニックネームから先生は武骨な人だと思われがちだけど、実は先生は、繊細な感情を持った詩人・俳人だった。

私は先生から頂いた『我が青春の山旅』の中で、いいなあ、と思った部分に鉛筆で線を引いたり、上部に○をつけたりした。

２６歳の時、尾瀬の三条の滝について、「天地の力がここに集ったようである」と書き、尾瀬沼のところでは、「緑の色にこんな変化があるのかと眼をみはらされた。静かな自然の美を誇っている」と書き、「百合いけて老婆のもてなし温かく」と吟じている。

同じ年、守門岳のきびたき小屋では、

> 梢を鳴らして風が吹いているが、全くそれ以外には物音がせず、かえって梢のそよぐ音が付近の静けさを深めているようだ。

と記している。そして、このきびたき小屋で詠んだ句が６句添えられている。

昭和５０年発行の「ライダースインザスカイ」の８号に「『石小屋沢』を想う歌」を寄稿されている。この歌は１０番まである超大作だ。

昭和５６年発行の『ライダースインザスカイ』１５周年記念号に、先生は「鹿教湯での二夏」を寄せられ、「病癒え　一人信濃へ　立ち葵」で始めた記録が、「百日紅　盛りは見れず　退院日」で一夏目を終え、「越の出穂　信濃は　青きリンゴかな」で２年目が始まり、「涼風や信濃の旅を終えんとす」で終えている。この間、他に１８句を載せている。

これまでも俳句作りはやってこられたのだが、昭和５６年（５４歳）に三条工業の職員の俳句同好会「樫の実会」に入られて、本格的な俳句作りに取り組まれ、翌年、斎藤美規さんが主宰する「麓」に入会され研鑽を積まれたが、平成８年に止めてしまわれた。この間１７年の秀句が『中断した俳句作り』にまとめられているが、上達ぶりには目を見張るものがある。私はいつもの癖で、いいなーと思う句に鉛筆で○をつけていたのだが、キリがないので、途中で止めてしまった程だ。

でも、その中で、平成６年１０月の

> 栗を剥く　麻痺の指先　力こめ

という句には泣きました。

それから

朝顔を　挨拶にして　路地住まい

節分の　豆が散らばる　路地の朝

という句は、先生が長く住んでおられたあたりの情景が思い出されました。

『中断した俳句作り』の「結び」に、

私の後を継いだ訳ではないが、家内が内山静尚さんの公民館俳句教室に入り、下手くそながらも続けている。私は折りにつけて、苦言を呈して、彼女を助け（？）ている。

と書かれていて、私はほほえましい、と思いました。

平成８年で俳句作りは止められたわけではなく、その後の年賀状に俳句が添えられていた。平成２７年の賀状には、

タンポポに　果てし命や　冬黄蝶

という句が印刷され、「柏風」という俳号が記されていた。

これまでも先生の俳句はいくつも見て来たけど、「柏風」という俳号は初めて見たような気がする。これが先生の俳号なんだろうか。あまりにもうまいので私の知らない俳人の俳号なのかも、と思って、先生の息子さんに電話で尋ねると、「柏風は父の俳号です。糸魚川の人から糸魚川真柏を頂いたので、柏風としたらしいのです」というご返事だった。

火　焚　き　名　人

高橋先生はまだ山での炊事にラジュースやガスコンロが使われる以前から山登りを始めておられるので、火焚きは上手だったし、焚火は大好きだった。でも国立公園・国定公園での焚火は禁止されてしまったので、先生の腕のふるい場所が狭まった。

「部報」４号に佐藤末吉君が朝日連峰を縦走して、泡滝ダムに通じる林道脇に幕営した時のことを、

たき木集めを始めた。大木を皆んなで押したり引いたりしながら運んだことは忘れることができない。そして、それらの木を燃やしてのキャンプファイアもすばらしい。おなかを出したまま両の手を使ってジェスチャーたっぷりに人間丸だしの歌を歌って、生徒の目に手を当てさせたのは誰でしょう。

と書いている。

高橋先生自身も『ライダースインザスカイ』４０周年記念号で、

とにかく焚火が大好きで、岩魚釣りでも、山行でもよく焚火をした。南アルプス、守門、粟、浅草、石小屋沢、北海道、アンナプルナ街道、焚火の想い出はつきないものがある。

と書いておられる。

目を閉じると、焚火を囲んでの高橋先生の歌声が聞こえてくるようだ。

ふ り 仰 ぐ 山 々

スポーツの試合に「ホームゲーム」とか「アウェーでの試合」という言い方がある。高橋先生の生涯の思い出の地として、剣岳、白馬岳、蓮華温泉、雷鳥沢を挙げておられるというが、それはまさに「アウェー」の山々である。

先生がまとめられた『我が青春の山旅』の２９頁に、「やっと心の古里に着いた感じだ」と記しているのは、守門岳のことである。先生１７歳の時、初めて本格的な登山に挑まれたのがこの守門岳だったのだ。

先生は「部報」創刊号に、「初恋の人が忘れられないものがあるように初めて登った山は思い出の深いものがある」という書き出しで守門岳の思い出が綴られている。恋の悩みを一人静かに考えたのもこの守門岳の山中のきびたき小屋であった。

こんなこともあってか先生はきびたき小屋には格別の思い出があるようで、『ライダースインザスカイ』４０周年記念号の先生の回想録の６篇のうちこの小屋の話が３篇紹介されている。

平成１９年１０月、先生は息子さんの運転する車で保久礼まで行かれ、懐旧の思いにひたられた。

三条から日々ふり仰ぐ山は粟ヶ岳だ。先生の俳句の

　夕映えの　雪山の襞　見てゐたり

の「山」は粟ヶ岳のことであろう。

先生が笹岡に引っ越された時、息子さんが二階の先生の部屋から粟ヶ岳が見えるように考えてくれた、ととても喜んでおられた。

平成２６年の年賀状には、

　初日の出　粟ヶ岳（アワ）が見守る　下田郷

と記し、翌２７年の年賀状には、

　冠雪や　西日輝く　粟ヶ岳

と記されていた。

先生は、今頃、粟・守門の上を飛んでおられるのかもしれないなぁ。

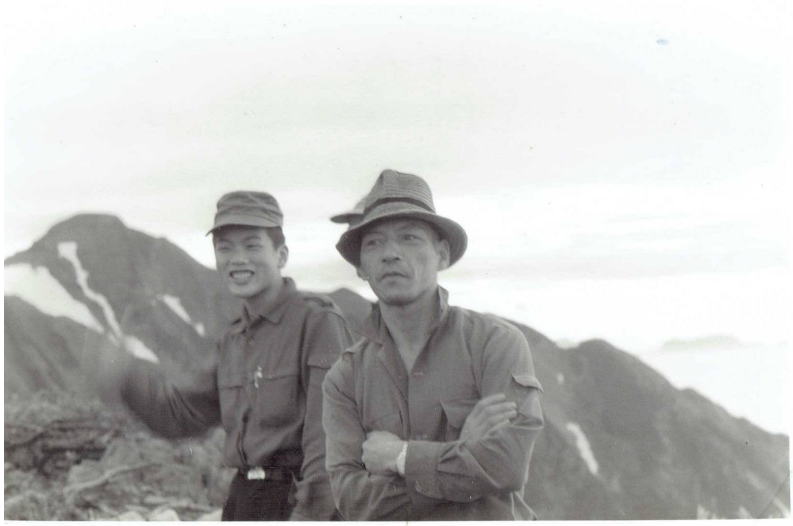
高橋先生、５０余年のご交誼本当に有難とうございました。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

私の今の気持ちにピッタリの詩を見つけました。長田弘（おさ）さんの詩です。

死ではなく
その人が自分のなかに
のこしていった
たしかな記憶を
わたしは信じる

金子達先生の写真と説明

S43 年 8 月 4 日　蓮華温泉
右は加藤正春先生
後立山連峰縦走の夏山合宿。長かった山旅ももう終わりに近いと、ノンビリ露天風呂につかる。



S 43 年 8 月　夏山合宿
鹿島槍ヶ岳の頂上で 左は長谷川一良

S44 年 8 月　飯豊本山の頂上にて

高橋先生が東高のインターハイの代理監督を引き受けられ、三条工業の夏山合宿と合同登山で、東高選手の強化にあたられた。

S 44 年 8 月　飯豊連峰　天狗の庭

左は金子　高橋先生は煙草をくわえているようです。

高橋先生を悼む

元顧問　**小倉　　勝**

高橋先生は私の恩師であり、同僚であり、渓流釣り仲間であり、山の先輩である。

思い出すのは、渓流釣りでの焚火と酒である。テント場に着くと、高橋先生は直ぐにザックからウイスキーの瓶を出し、「オイ飲もうや」と皆に声をかけるが、焚火の準備やテント設営が先だと本間先生に叱られる。本間先生の指示で川原にある焚き木を集め、焚火の準備をする。風の通りを見て平行に木を組むのである。そしてテントを立て一段落すると、高橋先生はもう飲んでもいいかと、ことわって飲み始め、今日はここまで飲むと、瓶の中間に輪ゴムで印すが、翌朝見ると瓶の輪ゴムが下から 1/4 位になっている。

また、焚火が好きで一晩中木を燃しているので、朝には山ほどあった焚き木が消えている。

先生は三条市大町から下田に移住され、長男家族と同居の生活中、薪ストーブで薪を炊きすぎて、倅さんに叱られたそうだ。

翌日は釣りの後テント場に戻り、焚き木集め夕食の準備、釣ったイワナの処理と作業分担になるが、先生はウイスキーを飲みながら焚火を分担する。そしてウイスキーが少なくなると、増田先生に飲めと自分のウイスキーを勧め、お前のウイスキーの味と比べるといって、増田先生のウイスキーをガバと飲むのである。

日本人の酒の宴席では、注しつ注されつの習慣があり、うまく利用した手だと感心する。そして酒が無くなると元気も無くなるので、私が睡眠薬兼整腸薬に持参した梅酒を出すと、旨い梅酒だと褒めてくれる。なかなかお茶目な一面があった。

6 月 26 日、同窓会後に先生を自宅まで送りながら、富山の若島先生から、宇奈月温泉へのお誘い話をしたら、泊りがけの旅行は難しく、「家でババが待って居るからな」と、お互い残念がる。

7 月 21 日吉田先生から、高橋先生の逝去の報を聞き絶句する。何でこんなに早いのか、言葉が出なかった。

先生との思い出は尽きないが、これも人生の一コマと享受し、ご冥福をお祈り申し上げます。

高橋先生と岩魚釣り

元顧問　**増田　繁雄**

1973 年 10 月 9 日～11 日に笠堀の砥沢川に岩魚釣りに入った記録から始まる、私の岩魚釣りのほぼ全ての記録を綴じたファイルが２冊ある。メンバーは高橋小一郎、本間久雄、小倉勝、私の４人で、たまに一人欠けたり、増えたりしたが殆どこのメンバーで、主に笠堀奥の光来出沢や大川に、年に数回岩魚釣りに行った。この前年に初めて岩魚釣りに誘われたがまだ山のやの字も知らない頃で、ただあの頃はまだ土曜が半日だったから、土曜の午後は毎週のように海に釣りに行っていた。今となってはだれが誘ってくれたのか覚えていないが、殆どの装備を人から借り、更には簡単だからという甘い誘いに載せられ、海釣りの延長のような気分で笠堀の光来出沢に行ったが、あまりの過酷さに途中でギブアップした。で、この年の春には装備をそろえ再チャレンジをして岩魚を釣り、三度目になる砥沢川の釣りでは少し余裕が出て記録を取り始めたようだ。そしてこの砥沢川から、高橋先生の破天荒ぶりが発揮されることとなる。

砥沢川へは光明山を超えていくのだが、9 日の夜に出発したので途中の山の神で泊まった。そこには山の神が祭られて男性のシンボルを模した物が何本も供えられていたが、その中の一本は高橋先生が自分のモノを参考に枝を削って供えたという。夜中に明かりが近づいてきた。県外の釣り人が帰るところで足元もおぼつかない様子だ。理由は次の日に分かった。ツキヨタケが買い物袋に一杯入れたのがあちこちに捨ててあり、あまつさえおう吐の痕もあった。これを笑った天罰であろうか、この後稜線で大黒シメジを多量に見つけ、当然釣果が芳しくなかったので、キノコの味噌汁で憂さを晴らそうと何杯もお代わりをしたが、夜中にペーパーを持ってダッシュする羽目となる。朝他の二人も同じと分かるが、ただ一人平然としていたのは、そう高橋先生である。やはり人間ではない、という結論になった。

1974 年 7 月 24 日～８月１日まで北海道へ釣り旅行に行った。フェリーで小樽に行き日高山脈の豊似川へ、そこから釧路、根室、網走経由であちこちの川を釣り歩き、小樽からのフェリーが取れなかったので、小樽から青森に渡り日本海沿いに南下して帰ってきた。ファイルには全日程の行動計画、食糧計画、買い出し、現地調達品等事細かく高橋先生の字で書かれた計画書があった。行ってみれば予想以上に地元や札幌からの釣り人が入っていて、大幅に予定が変わってしまったが、鮮明に覚えている事は、豊似川で夜になるとカジカが岸に寄ってくることが分かり、皆で夢中になって捕まえているうちにカジカも居なくなり、たき火の所に戻って自分のカップを見るとウイスキーの中に生のカジカが目を剝いていた。高橋先生曰く「カジカ酒だ。飲め!」と言われたが、とてもじゃないがこんなのは飲めないと言ったら、嬉しそうに俺に寄こせとのたまった。そう完全に酔っぱらったのである。石に座っているがフラーっと倒れてしまう。河原なの

で周りは石だらけで大変危ない。こんな事が二晩続いたのでとうとう禁酒令が出され、缶ビール一本でシュンとしていた。札幌近くで安い宿が見つけられず男４人でモーテルに泊まり、北海道の最後となる白老川に行くが餌のミミズを前の所に忘れたことに気づき、ソーセージなどを使うがダメだったが、ルアーでアメマスという岩魚の降海型が釣れることが分かる。というか餌には全く見向きもせず、ルアーにしか来ないことが分かった。高橋先生の持論として、ルアーは完全に魚を騙すからダメで、餌は少しは快感を与えるから良いんだと、日頃からルアーを完全否定していたが、餌が無い上あっても全く食いつかない現実に、とうとう持論を曲げたのか分からないが、ともかく誰かのルアーを借りてすごいホームで投げていた所は見ている。釣れたかどうかを忘れてしまった。

1977 年夏、笠堀の大川に行った時、記録ではスノーブリッジが多くて釣り場が限られていたが、釣る数を制限するほど釣れたようだ。食べきれなかった何匹かの岩魚を河原に岩で囲いを作りその中に入れていたのだが、その中の一匹の口に釣り竿の釣り針を掛け、川の中を泳がせて友釣りの練習と称して、川の中で岩魚を曳きずり回しはじめた。すぐ止めるかと思ったら何か得心がいかないのか、可哀想だから止めればという声を無視して意外と長くやっている。その頃釣り針には鮎釣り用の返しのない物を使っていたので、いつの間にか外れて逃げてしまっていた。この年の 12 月に病気を発症したのである。何か関係はあるのだろうか。

発病後早期退職してから、さすがに山の方はあまり行けないようだったが、釣り好きは衰えることなくよく五十嵐川に立っている姿を見たし、吉田君が用あって行っても「釣った魚の話しかしない」とよくボヤいていた。そんな山好き、釣り好きのＤＮＡはしっかりと息子さんたちに受け継がれているのだった。

最後になったが、私はこの岩魚釣りを通して、高橋先生を始め本間先生や小倉先生から山のノウハウを教えて頂いた。今にして思えば岩魚釣りから山を教わった事は大変良かったし、また得難い体験の連続でもあった。今は山で焚き火なんて出来ないし、ザックの中には必ず鉈を入れていたなんて、もう随分前の話になってしまった。高橋先生が病気で倒れた後、大原先生と登山部を引き継ぎ継続してきたので、少しは恩返しが出来たかなと思っている。

斎藤　勲さんの写真と説明

岐阜国体の写真は 1968.5.12 の見附大火で類焼後、高橋先生から頂いたものです。写っている人は左から望月さん、斎藤、高橋先生、新潟工・白川です。
他の写真も大火で類焼し、全部燃えたはずですがどなたからか頂いたものと思います。昭和 40 年（1965 年）

巻機山の家での写真は以前「15 周年記念誌」にも載っていました。
昭和 50 年（1975 年）

小屋の前で先生がくわえ煙草でゴミを燃やしているところのようです。
（昭和 50 年）

追　悼

昭和 41（1966）年卒１回生　**三村　章司**

７月２４日　高橋先生の告別式に参列してお別れをした。

次の日に計画がしてあった。
栂池から白馬大池でテントに泊り白馬岳に女房と二人で登って来た。
大池では夜中の暗闇の中に星空がまばゆかった。

****
５０年前になるが高３の時に山岳部夏山合宿で飯豊連峰を縦走した。
ハイマツの中に寝ころがりながら見た流れ星を思い出した。きれいだった。
****

翌日は快晴で澄み切った空気が心地良かった。山頂往復途中に富士山も見えた。
翌週の８月１日は二人で雷鳥沢キャンプ場にテントに泊り、翌日剣御前山に登った。
又もや快晴で剣岳から白馬岳、唐松岳、鹿島槍ヶ岳が一望できた。
振り返ると白山が見えた、最近は天候に恵まれ気持ちの良い山行ができている。
帰って来て OB 会の HP を見たら先生の思い出の山が載っていた。
期せずして先生の思い出の地を訪ねていたようだ。ありがたい事です。

高橋先生色々ありがとうございました。

高橋先生を偲ぶ

昭和 42（1967）年卒３回生　**長谷川　晴一**

まず最初に、心より哀悼の意を表します。
私は小学校入学以来、多数の先生に色々な教えを受けてきたのですが、高橋小一郎先生は私の生涯で最も印象に残っている先生の一人です。

目を閉じれば、先生のお姿を鮮明に思い出すことができます。

守門春山合宿で、スキーで先行する先生のシュプールを追ったこと、飯豊夏山合宿での数々の場面、何かと不自由な山行中の生活を、臨機応変な工夫でしのぎ、たとえ不十分であってもそれを楽しむこと。

常にはっきりと大きな声で、自分の言葉で話され、不器用な生徒達を黙っても見守り、時にはあまりの手際の悪さについに見かねて、「こうするんだぃや」と自らやって見せることもありました。

特にすごいと思うのは脳梗塞後で、リハビリをへて、再度教壇に復帰されたことです。ふだん高橋先生が、不平不満や愚痴の類を漏らすのを、聞いた事がありませんが、この病後のリハビリも、悲観すること無く、坦々とした気持ちで、励まれたのでしょう。
先生も心中には様々な思いも有ったでしょうが、余計なことは口に出さず腹に収め、行動で示される人です。

高橋先生は普段からスポーツで鍛えられた体躯に、強靭な精神力を秘めながらも、人情の機微に厚く、許容する優しさを持ち合わせて、多くの教え子に慕われておりました。卒業後ＯＢ会では、人一倍日焼けした黒い顔ほころばせ、卒業生達の話を何よりの肴として酒杯を傾けておられるお姿は例年のことでした。

運命を受け入れその中で前向きに生きること、奇をてらわず黙々と山を登るかのように生きること、そして生きることを楽しむこと、それら総てを教えていただきました。男らしく、潔く、美しく、優れた生き方、とても私の出来ることではないのですが、少しでも真似たい、近づきたいと思います。

先生はもう彼岸のかなたに渡られたでしょうか？

きっと、三途の川では「あの淀みに尺のイワナが、ヤマメが、船をあの淵に」、「釣り竿は、釣餌は」と、渡し守をさぞや困らせたことでしょう。

私も何時かそちらへ渡り、お会いできるまで、娑婆でもう一頑張りです。

高橋小一郎先生の思い出　守門の大岳

昭和43（1969）年卒３回生　**渡辺　五郎**

写真は1967年4月28日から30日の2泊3日の山行途中、守門の大岳山頂の高橋先生のお姿です。

先生は山行の一区切りで良く言われていた。「タンペ、タンペしたいや！」。皆さんお分かりと思いますが「疲れたいや！」です。

この時の山歩きは、
4月28日（曇り一時雨）
　栃掘19：20発⇒高名沢小屋着21：45　　学校の授業後に出発、良くやりました。

4月29日（曇りのち晴れ）
　高名沢小屋発7：20⇒大岳10：20⇒袴腰13：20⇒雪洞泊地点13：35

　大岳の岩の上の写真、「タンペ、タンペした」の先生のお姿です。

　4月末の固い雪の雪洞堀、2時間半近くかかった。夜になり素晴らしい星を眺めながら

キャンプファイアーとなった。
　先生の好きな焚火、近くの枯れた大木を見つけ朝まで燃えていた。

4月30日（快晴）
　雪洞泊地点7：10⇒烏帽子岳8：50⇒八十里越⇒大江13：50⇒八木前14：40

　快晴下、烏帽子岳の山頂で粟や守門の何時もと違う角度からの眺め、八十里超を取り巻く山々の絶景を楽しむ。
　その山頂から高度差400M余り、皆で歓声をあげながらグリセード。
　長い林道歩き、大江を過ぎトラックに乗せてもらうが荷台で怖い思いをした事を今でも思いだす。

　この様に、私が2年生の時の66年には守門の春山合宿、巻機のヌクビ沢、妙高のスキー合宿、先生はかなりハードな山行を教えて頂いた。
　我々の技量を信じたのか、顧問の同行しない山行も多くやりました。
　一番長かった山行は68年の卒業年、守門の道院をベースに7日間の山スキー。途中に2日間先生が来られた。

1967 年（昭和 42 年）3 月 20 日～23 日
春山合宿（粟ヶ岳～堂ノ窪山）

昭和 43（1968）年卒３回　**渡辺　五郎**

３月２０日　快晴下、祓川から入山、粟薬師付近で最後尾に高橋先生

３月２１日　サブで行動、左から顧問の金子先生、部員の金子、渡辺、鈴木、大関、志田、川口　堂ノ窪山山頂で

３月２２日　風雪で一時雨、この日は粟の北峰往復だった

３月２２日　高橋先生のお姿

３月２２日　牛ヶ背上部のベースキャンプ
テントに「三条工業高校山岳部」の文字がある

ご冥福をお祈りいたします

昭和 44（1969）年卒４回生　**大原　正昭**

私達兄弟は、高橋先生にお世話になりました。

特に私は、就職先も無い状態で社会人になり、ＩＢＭで働く時に友達という形になっていただきました。有難うございました。

ご冥福をお祈りいたします。

高橋小一郎先生の想い出

昭和 45（1970）年卒５回生　**長谷川　一良**

先生との想い出は数えたらきりがないが、最も印象深いのは私が一年生のときの春休みに、渡辺五郎先輩が自身の卒業の記念にと企画した守門岳春山スキー山行で、高橋先生、渡辺五郎先輩、鈴木泰正先輩、新人長谷川の四人による栃堀より道院ヒュッテ（ベースキャンプ）、万太郎経由して大岳への二泊三日の行程でした。

私にとって春山とはいえ三月半ばの守門は雪深く道院のバンガローに泊まるとはいえ、雪山に泊まる事自体初めてで、全ての行ないが初めてづくしの連続でした。

かんじきを履いて歩いたこと、スキーにシールを着けて歩いたこと、雪山での目標のないルートファインディングでの山行など。この時に先生と夕暮れに万太郎までのルート偵察を行ったときのことは今でも忘れられません。偵察で先生に付き添われて道院から３０分くらい歩いたころでしょうか、夕暮れの雪原に霧が立ち込め一瞬にして方向を見失う事態（ホワイトアウト）に遭遇する羽目に。暮れ迫る中での心理状態は初体験の私にとっては不安で、元に戻るには、登ってきたのだからどうでもよいから下ればよいのではという安易な考えでした。下っていれば大変なことになっていたでしょう。しかし先生は冷静に「チャボここを動くな、霧の晴れ間を待て」と一言。その後に少し霧の晴れ間が現れて、帰る方向が見えました。先生はこっちだと判断、無事にバンガローに戻ることができました。この様な時の一瞬の判断が生死を分けるのだと今でも感じています。

もう一つは、鈴木先輩が一日早く帰るので道院より栃堀まで私が見送りに行くときにポケットに飴玉を入れて行けとあずけてくれたこと。見送ってからの登り返しで腹が減って足が前に出ない。その時にもらった飴玉のおかげで元気が出て動けたこと、先を見越した先生のその配慮が忘れられません。

快晴の春山。大岳からのスキーの滑走はスキー場では味わえない爽快感があり、五郎先輩の描く新雪のシュプールは豪快で素晴らしく、この感動は後の巻機山の春山合宿や粟ヶ岳での冬山合宿へと受け継がれることになります。

またこの時に雪目になってしまい二日間寝たきりで盲目の経験をしたことも大変でした。

今ではいい経験したと思っています。思えば三工山岳部に入部したころ、巷では山岳部の遭難事故やしごき事件があり、親が心配して、なんで山岳部へ入部したのだとよく言われました。一年生が私一人しか残らなかったので先生や先輩にかわいがってもらったのかもしれません。ありがたく思っています。ニックネームのチャボとはかわいがってもらった愛称の証しなのかもしれませんね。

先生は、外面はもの言わぬ怖い存在で、内面ではやさしさがあり、常にリーダーとし

ての心がまえを諭す親父のような存在でした。

豪快さといえば石小屋沢の大焚火は忘れません。光明山を越えて砥沢でのイワナ釣り、キノコ採り、飯豊縦走でのそうめん流し、宝蔵山雪洞泊り、粟ヶ岳の小屋より中奥農場の売店まで先生のためにお酒の買い出しに行ったこと、ご苦労賃としてちょっぴりお酒をいただいたこと。とにかくタバコと酒、釣りに焚火が好きで、数えきれないほどの想い出があり懐かしさを感じます。

まだまだありますがこの程度で納めます。先生は私の心の中では良い想い出として生きております。先生、良い想い出をありがとうございました。　　合掌

長谷川一良さんの写真と説明

昭和 44 年　飯豊連峰での夏山合宿

後列左から、竹石、布川、長谷川、志田、破入、市川

前列左から、吉田（川崎）、小出、高橋先生、小林

非常に残念です

昭和 45（1970）年卒５回生　**市川　正和**

現在、京葉コンビナートの現場に入っています。

高橋先生の突然の訃報に接し、驚くばかりです。先日の同窓会に出席したときには、お元気でいたのに、本当に残念です。

先生が居なくなったとは、まだ信じらませんが、何か、精神的支柱を失ったように感じらます。ただ、残された我々としては、先生に恥じないよう生きて行かなければならないと考えています。

それにしても、非常に残念です。

高橋先生に学んだ登山

昭和 46（1971）年卒６回生　**吉田　光二**

私は、昭和 44 年（1969 年）4 月に山岳部に入部以来、平成 27 年（2015 年）7 月 21 日のご逝去までの間、46 年間に渡って実に多くの事を教えていただき、学ばせてもらった。

高橋先生から学んだことを活かさなければ、伝え続けなければ、との思いで三条工業高校山岳部、新潟県央工業高校山岳部の指導を続け、県高体連、全国高体連への反映に努めてきたつもりであるが、病身となり山に登れなくなった今、思うように伝えられない。せめて本稿であらすじだけでも思い出とともに記録したい。

石小屋沢のこと

初めて石小屋沢に合宿で入った時のことである。シルバーザッテルから下山中の痩せた岩稜（三工尾根）で私がビビッて動けなくなったとき、先生は自分の肩に私の手を置かせて下ろしていただいた。私の目を見て判断されたのだと思う。ビビッたときの対応の仕方を、身をもって学んだ。

冬山のこと

普段はパーティの最後部を歩かれるのだが、冬山に入ると先行して赤布でルート確保をされていた。

退路を確保できなければ先にすすむな。

目を閉じて、目標物が浮かび上がってくるようにルートを熟知しなければならない。

夏、秋と登って、冬山はその仕上げのようなもの。

地域的にいえば、高橋先生が渡辺五郎さんの記録に基づき作成された「守門　山スキーコース」（別掲）のルート図と長谷川一良さん作成の「橋立～粟ヶ岳～白山　冬山合宿ルート図」は、それを実行した教科書だった。

高小リッジ

昭和 46 年 8 月に高橋先生にロープを組んでもらって初登した石小屋沢右股リッジ（高小リッジ）に、昭和 48 年 8 月、第２登をしようとアタックした。前回は先生がトップだったので今回は私がトップをさせてもらうことになり、ハング壁を先生の肩に乗ってバンドに立つ。ショルダーのない先生は精一杯背伸びをして指の第一関節を掛けて懸垂しているところ、動きを確認するためにロープをチョイ引っ張って、先生を落下させてしまった。

明らかに私の過失であるが、自分の腕力のなさが原因と言われていた。後日、ご自宅

にレッド持参で遊びに行って飲んでいるときも、あくまでも自分に原因があると私の謝罪を受け入れてもらえなかった。

個人山行届け

個人山行の時は下山報告を電話ですることになっていた。

昭和 46 年 3 月、電車が不通になった大雪の巻機山に行っているとき、心配した私の母が先生のところに電話したそうである。先生曰く、「彼らのことだから小屋に入って一杯やっていると思います。心配ありません」。この一言に母がどれだけ安堵したことか。

卒業後も無所属でいたときに、山に入る前に電話で留守本部をお願いしていた。下山して直会に夢中になって下山報告を忘れることもしばしばで、翌日の恐る恐るの報告に「そんなことだと思っていたさ」と、これまたあっさりと受け入れてくださっていた。

下山報告をするように指導されたとき、「下山報告があるまで飲まないでいるすけな」と言われていたのであるが…。

石小屋沢

奥笠堀の石小屋沢では、石小屋フェスティバルと称して、焚火を好みながら先頭になって木に登って、それにつられるように生徒たちも大騒ぎをするという楽しいものでした。

ときには滝に飛び込み、ときには滝つぼで「そうめん流し」をし、自然に多少のインパクトがあったにせよ、先頭になって自然と戯れ、自然との付き合い方を教えてもらった。

余計な口出しをせず、寡黙ではあるが、自然現象を見ての行動で安全登山を教えられた。

山岳部顧問になって

「てっとり早く、山に強い山岳部にするには」と考えて、「かつての合宿に使った山を、かつてのように登ればいいんだ」が結論だった。やってみてそれは正解だった。山に強くなるには山に多く登ることに勝るものはないんだ。

飲みながらそんな話を先生にしたら、「そうなんだよ」と肯定された。

山岳部の目指すもの

先生は、高校山岳部の目指すところについて「新潟の四季の山を登って、社会人になったら登山のリーダーとして人を山に連れて行けること。」と言っておられた。

高校生の登山がだんだんと規制されてきた中でも、少なくても我が部はそうでなければ、と思っていた。だから、登山靴は軽登山靴が全盛になってきても「ゴロー」の登山靴を㈱モチヅキから世話してもらって使い続けてきた。新潟の山は一年の半分が雪山だからである。

県高体連の積雪期顧問研修会

専門員になって冬山研修を担当するようになった。その都度担当が本をコピーしたりして研修資料を用意していたのだが、恒常的な資料にしようと「研修資料」として冊子を作った。

冒頭に「顧問の力量によって山岳部の限界が決まってしまう必然の中で、こうした顧問の研修が生徒の登山活動の安全性を高めることになるのである。」と書き、資料１には「三条工業高校山岳部資料より」として高橋先生の書かれた「冬山登山の心得」（別掲）を載せた。資料２は、これまた三工山岳部に伝わっていた藤島玄さんの「冬山覚書」。

県内顧問の研修のベースに三工山岳部、高橋先生の伝えられたことを使ってきたのである。

県高体連の「審査基準検討委員会」

昭和 60 年、県高体連の「審査基準検討委員会」にお呼びがかかった。その理由は「高橋先生の教え子」とのこと。委員長や顧問を務められていたときの高橋先生の評価の高さが解るというものである。

県総体の審査基準には高橋先生の考え方が込められていた。

しかし、この審査基準は平成 23 年に、「全国審査基準に準じる」と改訂した。私の仕事であった。

全国高体連の「審査」

平成 12 年夏、特命で全国高体連の審査書類一式をまとめる仕事を担当することになった。競技化する中で「登山」の考え方が忘れられないように苦心した。その「登山」とはもちろん三工山岳部で学んだ「登山」だ。

全国的には四季の山は無理だが、無雪期における登山教程ともいえる「審査事例集」を作って、それを基に審査する方式にした。不十分ながらも、三工山岳部の「登山」が全国大会の審査のベースとなったのである。それをもって新潟県も「全国審査基準に準じる」として、県独自の基準を廃止したのである。

今日的にはそこから少し飛び出して、体力審査の「タイムレース化」をすすめているようだが、トレールランやスポーツクライミングなどが出てきている中で時代の流れかなぁと傍観している。

すべての面で教えてもらいました

部の運営に迷ったとき　レッドを持ってお邪魔し
仕事に疲れたとき　レッドを持ってお邪魔し
人生に躓いたとき　レッドを持ってお邪魔し

レッドを飲み干して、先生所有のオールドを空にして２人で２本飲んで朝帰り。
先生が病気をされてからは、常盤橋の下で釣りをしておられるところにお邪魔して相談にのっていただいた。

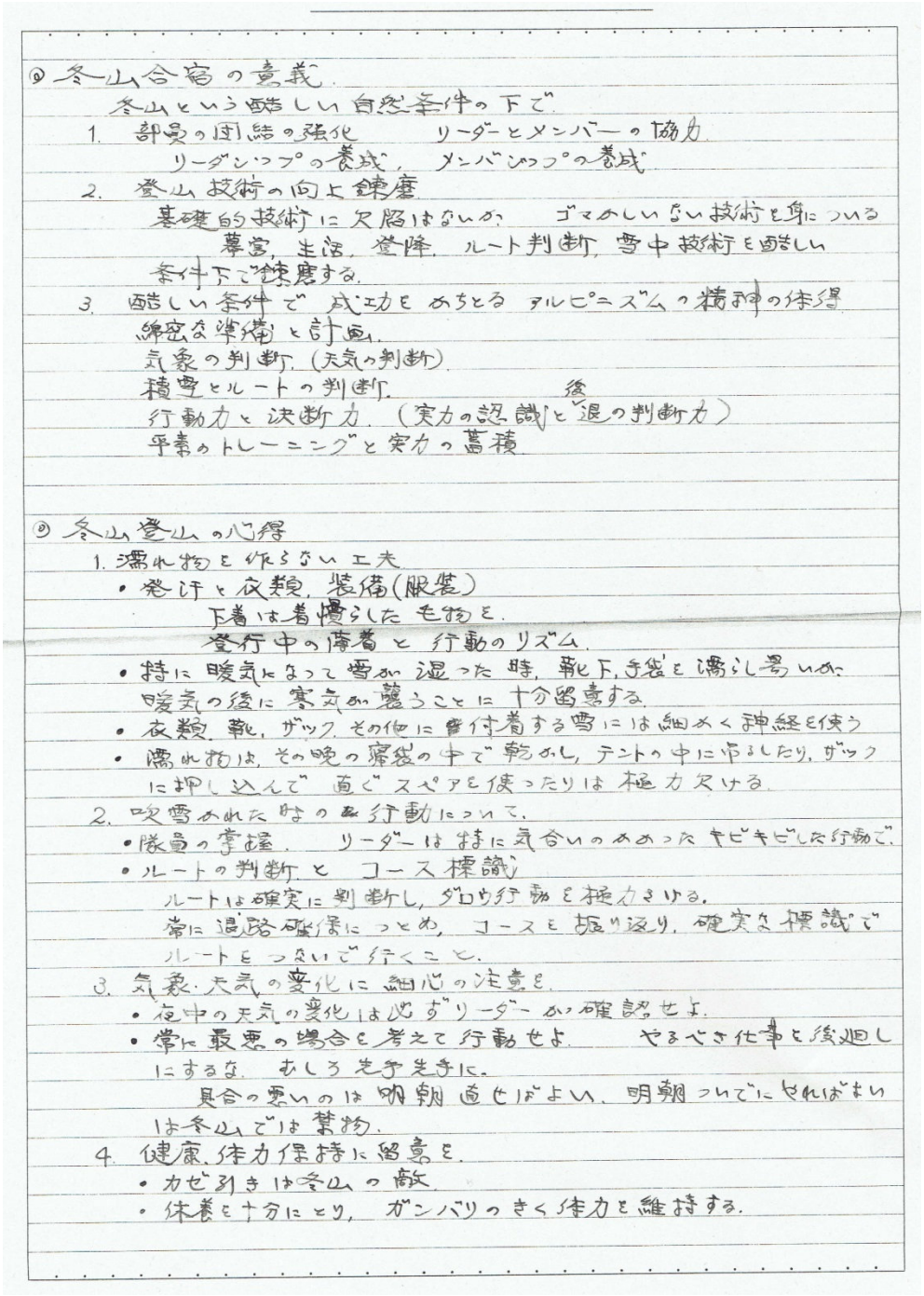
学ぶべきことを幾らでも持っている先生だった。

６月中旬に私の体を心配されてお電話をいただいた。私の方が心配しなければいけない立場なのにと恐縮した。「夜はチョット」と遠慮されていた６月末の同窓会総会に真っ先に「出席」のお返事をいただき、元気な姿を会員に見せられた。後姿から、皆にご挨拶に来られたような気がしていた。

山のそのまた上から

粟ヶ岳が見えると高橋先生を思い出す。新人歓迎で初めて高橋先生と登った山だ。

巻機山が見えると高橋先生と雲天の母ちゃんを思い出す。ＯＢ会で大酒を飲み一升瓶を肩に登った山だ。二人とも、山のそのまた上である。ご冥福をお祈りいたします。



◎冬山合宿の意義

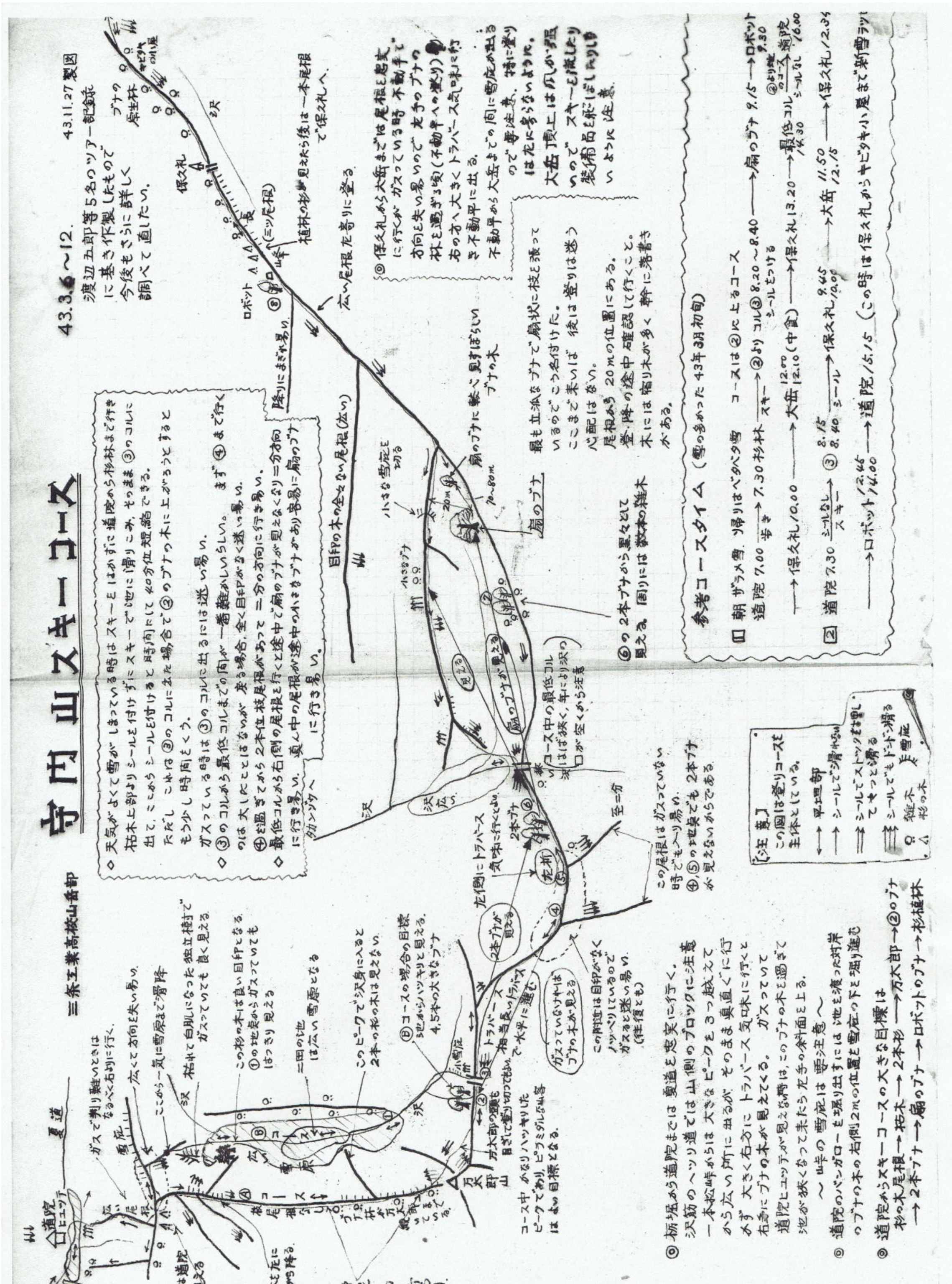
冬山という酷しい自然条件の下で

1. 部員の団結の強化　リーダーとメンバーの協力
   リーダシップの養成、メンバシップの養成
2. 登山技術の向上錬磨
   基礎的技術に欠陥はないか　ゴマかしいない技術を身についる
   幕営、生活、登降、ルート判断、雪中技術を酷しい条件下で錬磨する。
3. 酷しい条件で成功をかちとるアルピニズムの精神の体得
   綿密な準備と計画
   気象の判断（天気の判断）
   積雪とルートの判断
   行動力と決断力（実力の認識と後退の判断力）
   平素のトレーニングと実力の蓄積

◎冬山登山の心得

1. 濡れ物を作らない工夫
   - 発汗と衣類、装備（服装）
     下着は着慣らした毛物を
     登行中の薄着と行動のリズム
   - 特に暖気になって雪が湿った時、靴下、手袋を濡らし易いが暖気の後に寒気が襲うことに十分留意する
   - 衣類、靴、ザック、その他に付着する雪には細かく神経を使う
   - 濡れ物は、その晩の寝袋の中で乾かし、テントの中に吊るしたり、ザックに押し込んで直ぐスペアを使ったりは極力欠ける
2. 吹雪かれた時の行動について
   - 隊員の掌握　リーダーは特に気合いのかかったキビキビした行動で
   - ルートの判断とコース標識
     ルートは確実に判断し、ダロウ行動を極力さける。
     常に退路確保につとめ、コースを振り返り、確実な標識でルートをつないで行くこと。
3. 気象・天気の変化に細心の注意を
   - 夜中の天気の変化は必ずリーダーが確認せよ
   - 常に最悪の場合を考えて行動せよ　やるべき仕事を後廻しにするな　むしろ先手先手に
     具合の悪いのは明朝直せばよい、明朝ついでにやればよいは冬山では禁物
4. 健康、体力保持に留意を
   - カゼ引きは冬山の敵
   - 休養を十分にとり、ガンバリのきく体力を維持する

【守門山スキーコース　図中に「43.3.6～12　渡辺五郎等５名のツアー記録に基づき作成したもので今後さらに詳しく調べて直したい。　43.11.27 製図」と記されている。**】**



高橋先生を偲んで

昭和 49（1974）年卒９回生　**川村芳夫**

小さい頃、自宅裏二階から守門を見ることが大好きでした。(見附の里山越しに大岳・青雲岳・袴岳の頂が望めましたが、当時はこの名前は知る由もありません。)
春、遅くまでどこの山より一番白く、冬が来ればどこよりも早く白い化粧を纏う山。

何時かあの頂に立ちたいと思っておりましたが、その時は意外に早く訪れました。中学１年の夏休みに見附市民登山がありそれに仲間と参加させてもらいました。斎藤会長との初めての出会いであり、中学時代は市民登山があれば参加させてもらいました。そんな中で、斎藤会長の所属する見附山岳会への入会をお願いしたところ「高校生になったら入会させてやる」とおっしゃっていただき、高校進学が決まり斎藤会長に連絡をとりました。「ところで高校はどこだ」と聞かれ、「はい三条工業です」と答えると「見附山岳会ではなく三条工業の山岳部に入れ」と言われたのがきっかけで山岳部入部となりました。

当時(1971 年)、高橋先生、金子先生、大原先生の 3 人の顧問と 3 年生 2 人、2 年生 2 人、そして新人 1 年生 3 人のクラブでのスタートでした。
新人歓迎登山(五百川より粟と記憶)、春の技術講習会(巻機山)と順調に山行をこなし、初めての夏山合宿を飯豊西俣より大熊小屋そして杁差岳から稜線の縦走でした。
2 日目のテント場に着いた時だと記憶していますが、高橋先生が「ニッコウキスゲの花を採ってこい」とおっしゃり、茹でて吸い物で食べて、あまりの美味しさに驚いたものでした。
合宿最終日は、実川に下りあの長い林道を歩き、夕刻近く日出谷駅前に到着。駅前食堂で晩飯にしようと入りましたが誰もいないのです。(店の名前は日出谷食堂だったと思います)
そこで、高橋先生が店の外に出て「日出谷の母ちゃん～」と大声で何回も叫ぶんです。合宿最終日の、あの長い林道歩きの末のあの姿が昨日のことのようによみがえります。

1 年生最後の橋立ベースからの冬山合宿の折と記憶していますが、高橋先生の酒が少なくなり、秋よりメンバーに加わった熊谷と 2 人で高柳の部落まで酒とタバコを買いに降りました。橋立ベースに戻った時の高橋先生のうれしそうな顔がありありと思い出せます。

焚火が大好きな高橋先生、石小屋沢での思い出も尽きません。

ウルイサドリの岸壁をこえ、エメラルドグリーンの沢を見下ろし、行った先の石小屋沢のキャンプサイト。春には高橋先生の釣って来られたイワナに舌鼓をうち、夏にはブナの木にロープを掛け、アブミを取り付け懸垂に興じる僕等の下で、ウィスキーを片手に焚火をいじり、にこやかに僕等を見上げる先生の顔は焚火に照らされ一層黒く見えたものでした。それが原因か、年々広場が広がったと感じたのは、私だけだったでしょうか。

夏山合宿で剱に入った2年生の夏、奥大日から剱沢をベースに剱、三の窓雪渓、立山等に登り、合宿最終日、池の平に幕営。夜、八ッ峰にかかる月をバックに高橋先生に「剱の歌」をお願いした。朗々と夜空に響くあの時の声は、今も耳の奥に聞こえてくるようです。

酒の大好きだった高橋先生。いつの頃からか記憶にありませんが、合宿の時いつも持参される「サントリーレッド720ml」その瓶に輪ゴムをかけ「先生、今日はここまで」というのが恒例になっておりました。そんな貴重品を、夕食を終え紅茶を入れると香り付けにウィスキーを一滴ずつたらしてくれた先生。そして就寝までのひと時「山の歌」を楽しく大声で歌いました。諸先輩から見れば、余りにも見劣りする我が9回生ではありましたが、高橋先生からは大変可愛がっていただいたと思っております。

卒業後も夏季合宿に同行させていただく機会を得て、飯豊東俣より入り杁差岳からの飯豊連峰縦走、そして石小屋沢の2次合宿では、高橋先生に連れられ高小リッジでの岩登りに初挑戦させてもらいました。結果は惨憺たるもので、ただ高橋先生から引っ張り上げていただくだけの迷惑の掛け通しのロッククライミングでした。

今、社会へ巣立ち40年を過ぎようとしておりますが、今までに耐えてこられた肉体と精神力は、三条工業山岳部時代の春夏秋冬における山行での高橋先生のご指導あっての賜物と感謝申し上げます。

高橋先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

2015年9月6日　合掌

【入力を終えて】　斎藤　勲

文中にある通り、私と川村さんは同じ見附市の生まれで浅からぬ縁がある。追悼文の冒頭にあるように、初めて川村さんと会ったのは彼が中学一年生の時に一緒に守門岳に登った時である。彼の初めての山が高橋先生と同じで守門岳だったとは運命的なものを感じる。

中学卒業後、見附山岳会ではなく三条工業高校山岳部への入部を強くアドバイスしたのも大正解であった。私が高校時代、高橋先生から薫陶をうけたのは高校3年の1年間

だけである。川村さんは 3 年間と OB としても合宿に参加して高橋先生と濃密な山の生活を共にした。誠に羨ましい限りである。文章から察するに、高橋先生も川村さんも一番油ののった「山に熱中時代」だったのではないか。

高橋先生は彼岸に行ってしまわれたが、この追悼集や自費出版本から高橋先生の手を抜かない明るく一生懸命な生き方をもう一度学び直し、これからの人生に向かって行きたいものです。

川村さん、情感あふれる追悼文の寄稿ありがとうございました。

高橋先生ありがとうございました

昭和 49（1974）年卒９回生　**熊谷　善和**

「ならやぁー先寝っろぉ！」「ゴムしてあんだろっ！」
テントの中の、お決まりの終焉の会話。
“角”か“レッド”か“トリス”か思い出せず、輪ゴムのラインだけが鮮明に記憶に残る。
当時呑めない自分は、興味がないながらいたずらしてみたい一心で、旨くもないウィスキーを初めて口にしたもんだ。
優しさと懐かしさと・・・。
赤点取ってもさりげなく助けてもらったことを思い出す。
いつも温厚で気さくに話しかけていただいた。

高橋先生、ありがとうございました。
心よりご冥福をお祈り申し上げます。

追　悼

昭和 49（1974）年卒９回生　**小森 行也**

高橋小一郎先生には、色々な登山を通し多くのことを教えて頂きました。

40 年以上も前のことですが、今でも鮮明に覚えていることが沢山あり、時々思い出しては実践してみたり、セルフチェックしたりしています。

これらの事は、登山を離れた普段の生活にも応用できることであり私の宝となっています。ありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。

高橋先生にいただいた思い出

昭和 50（1975）年卒 10 回生　**松井　弘正**

会報にて高橋先生のご逝去を知りました。御冥福をお祈り申し上げます。

私は気まぐれに近い単なる好奇心から、高校入学と同時に山岳部に入部しました。創部１０年目にしてインターハイや国体の全国大会に数度出場していると聞き、自分のことではありませんが誇らしく思った記憶があります。しかし私の在籍中の３年間は、自身の不甲斐なさ等からこれといった成績も残せず、輝かしい部歴の中に汚点を残した時代だったように思います。

「合宿中にバテると尻を蹴飛ばしてでも歩かされる」といったような、怖い顧問だと教わりましたが、そういう一面は在籍中、目にすることがありませんでした。先輩諸氏によると、「若い頃の話さ」ということでしたが、いま計算してみたら先生は当時４５歳。先頭に立って若い高校生を引っ張っていく気力が希薄になっていたのかもしれません。

そんな現役時代にあっても高橋先生からは様々なことを教えていただき、又、数々の思い出も頂きました。一番の思い出は、現役時代と卒業直後にＯＢとして参加した２度の剣岳での夏合宿です。先生の終活ノート中の生涯の思い出の地に、剣岳が入っているという記事を部報（追悼号）で読み、まるで昨日のように当時のことが思い出されます。池の平のキャンプ地で、月明かりに照らし出された八ツ峰を仰ぎ見ながら、ダンチョネ節のメロディに乗せて歌った剣の歌。

ひと時も手放さなかった煙草をくわえながら聞き入っておられた高橋先生の横顔は、昼間には決して見せることのなかった優しそうな笑顔でした。

♪　夢に描いた剣の山によ　意気と力でね　ぶち当たるダンチョネ～　♪

合掌

松井弘正さんの写真と説明

私が１年の時の守門の帰りの下田辺りだと思います。　４０年以上前の写真なので色あせています。

追悼　高橋小一郎先生

昭和 52（1977）年卒 12 回生　**西沢　政幸**

三条工業高校を卒業してもう３９年の時がすぎてしまいました。

高橋先生には，３年間お世話になりました。今、思い起こせば夏の合宿、飯豊連峰、剣岳、朝日連峰と長い期間、食事と生活を共に私たちを支え守ってくださっていたことを感じます。

冬山合宿も忘れない思い出です。ラッセルの厳しさ。チームとして目標に向かう意気。達成感。同じ飯を食う仲間意識。人生の根幹を鍛えてもらった期間かな。

今は仕事が忙しいけれども、疲れを癒す方法は山に行くか、自然の中で休みしかないと思っています。

今は東京にいますけれども、白馬岳，八ヶ岳、三つ峠、雨飾山、高尾山、韓国の山、北の金剛山と山へ足を運びました。これも学生時代の賜物かと思います。

高橋先生有難うございました。

ご冥福をお祈りいたします。

高橋先生を偲んで

昭和 54（1979）年卒 14 回生　**阿部　孝幸**

私はＳ54 年卒で高橋先生最後の教え子かと思います。

六日町のスキー合宿の準備をしていた時、高橋先生が脳梗塞で倒れてしまいました。

スキー合宿を終え、しばらくしてから私の地元の岩室温泉病院に入院されていたのでお見舞いに行ったときは、体が不自由でしたが元気で病院内のリハビリ施設を案内してくれたのを思い出します。

卒業後はＯＢ会もすっかり疎遠となっていましたが、高橋先生と再会するきっかけとなったのが２０１２年の新潟でのインターハイ全国大会でした。大会補助役員として吉田先生からの誘いもありましたが高橋先生からも協力依頼のお手紙も来て、ＯＢ会を疎遠にしてきた自分にとっては、懐かしくて嬉しい気持ちになり参加させて頂きました。

昨年の秋、約３０年ぶりにＯＢ会に参加し高橋先生とお話しました。虫の知らせと言うけれど、あんなに元気そうだったのに・・とても残念に思いますが、私にとっては２０１２年のインターハイが、高橋先生と再会させてくれたのだと感謝しています。

合掌

追　悼

昭和 60（1985）年卒 20 回生　**鈴木　孝一**

OB 会で何年ぶりかにお会いした際も覚えていてくださって嬉しかったです。
いつも楽しそうに日本酒を味わっていられる姿と笑顔が思い出されます。
ご冥福をお祈り申し上げます。

追　悼

昭和 63（1988）年 23 回生　**高山　　光**

高橋先生から、下田へ転居されてから何度もご連絡いただきました。

山から随分離れてしまっている私には、すごい戸惑いがありましたがうれしかったです。

お亡くなりになる直前にも電話いただきまして、ちょっとお邪魔させていただこうなんて思っていただけに、残念でした。

過去に、ときどきズバッ、グサッとくる一言もらったのが懐かしいです。ご冥福をお祈りします。

私自身の高橋先生の思い出

平成３（1991）年卒 26 回生　**猪熊　尚洋**

私自身の高橋先生の思い出になりますが、私自身が現役時には高橋先生は既に退職されておられ、巻機山の家で合宿の時におられたことがあったのかな？という感じで、あとは近年かわせみでの OB 会でお話しを拝聴する程度でしたため、誠に申し訳ないのですが思い出らしいものが今ひとつ出てこないのです。

ただ、うちの 76 歳の父親が実業高校の時でしょうか、高橋先生に習ったとかで亡くなった報を聞いた時に先生のことを回想して語って懐かしんでおりましたし、高橋先生も父のことは覚えてくださっていたようで、私が三工山岳部 1 年生の時これから山行に出発するというタイミングで学校にいらしたことがあり、その時に「イグマ」という姓から父のことを思い出してくださったのか「お父さんにもよろしく伝えてください」と言われたことがありました。

その時点で何十年も経っていたはずですが、先生は意外と教え子のことは覚えてくれているものなんだなと感心しながら小雨の中を、山に向けて出発した記憶があります。

追悼集の仕事に携わりながら過去に書かれたものを読むと、高橋先生がただの山男ではなく、感性が鋭く、山だけではない自然そのものを心より愛して止まない方だったのだなと感じ、同時に諸先輩方が何十年にもわたって慕い続けてきた理由が少しだけではありますが分かるような気がしました。

高橋先生

平成７（1995）年卒 30 回生　**廣瀬　守彦**

短い間でしたが多くのことを学ばせていただきました。ありがとうございました。
もし良かったらこれからも『県央工業山岳部』を遠くから見守ってあげて下さい。
心からご冥福をお祈り申し上げます。

高橋先生の想い出写真

昭和 53 年 10 月 29 日　旧・雲天前

昭和 52 年 12 月 25 日に脳梗塞で入院された高橋先生が、幸いにも順調に快復されてきたことから、ぜひＯＢ会に出ていただこうと、例年、巻機山の家で行っていたＯＢ会を巻機山麓の民宿「雲天」で行った。

『岩室入院中は、秋には、また皆んなと清水の山里で再会できるんだと、それを楽しみに訓練に励んできました。

生きていることの幸せに、皆んなの健康に乾杯しましょう。』

という高橋先生の呼びかけに、先生の奥さんを含めて 20 名が参加し、マンネリ化したＯＢ会のひとつの転機となった。（15 周年記念号より）

前列左から、小森、竹石、長谷川一、高橋先生、渡辺、斎藤、椿。

後列左から、増田、西沢、小林、小出、三村、阿部、長谷川晴、奥さん、破入、吉田（川崎）、川村、各務、もう１人はカメラマンで熊谷（敬称略）

昭和 55 年 11 月 8 日ＯＢ会総会（旧・雲天）

15 名の参加のもとに、会則を制定して役員の選出を行い、斎藤勲、長谷川晴一、渡辺五郎、松井弘正のヒマラヤトレッキングの壮行会。**左側中央が高橋先生**

旧三条工業山岳部生みの親

高橋小一郎さん 県内有数の山岳リーダーで活躍

ヒマラヤトレッキング隊員に 谷川遭難では現地で救助活動

インターハイや国体 部員を県選抜チームに

県立三条工業高校（現・県央工業高校）の教諭を務め、昭和四十年に同校山岳部を立ち上げ、同部顧問として全国大会に選手を送り出し、県高校体育連盟登山部の委員長も務めるなどした三条市笹岡、高橋小一郎さんが二十一日午後、肺炎のため、入院先の新潟市、県立がんセンター新潟病院で死去した。八十七歳だった。戦後まもなく、三条実業高校定時制の教諭として着任、高校生登山の指導に力を注いだほか、日本山岳会越後支部主催のヒマラヤトレッキングにも隊員として参加したり、谷川岳の遭難事故の救助隊として現地に入るなど県内でも有数の山のリーダーとして知られ、慕われた人だった。

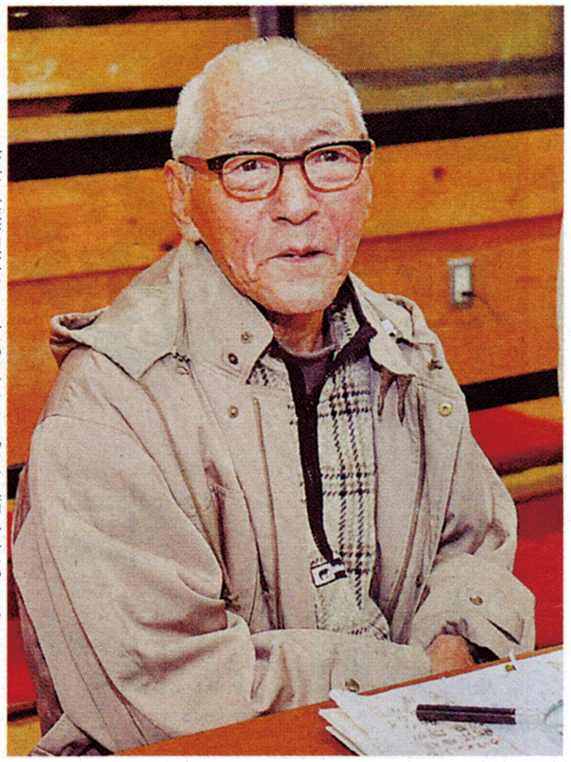
高橋さんは平成十八年三月に肺がんを発症して放射線治療を、さらに同年十一月には右下肢急性動脈閉塞で人工血管によるバイパス手術を受けるなど、命にもかかわる大きな病気に見舞われたが、いずれも克服。その後は自宅で療養を兼ねながら日々を過ごしていた。

そうした中、今月十四日深夜、呼吸困難に陥り、救急車で県立がんセンター新潟病院に搬送され、そのまま緊急入院。病床ではモルヒネの痛み止め注射を受けながら回復に努めたものの、高齢もあり、日々、体力が低下し、二十一日午後二時七分、息を引き取った。

高橋さんは昭和二年十月二十九日、三条市大町（本町）でノコギリ目立ての仕事をしていた父親と和裁仕立ての仕事をしていた母親のもと、男三人女二人の五人きょうだいの長男に生まれた。

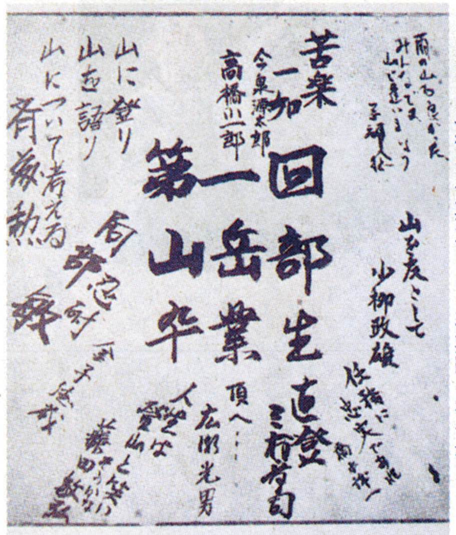
同二十年三月に県央工業高校の前身ともなる三条商工学校第一本科卒業後、長岡工専（現・新潟大学工学部）に進学。学徒動員や長岡空襲を経験したあと、二十三年に同工専を卒業。同年九月に母校でもある三条実業高校の定時制の教諭として着任。

その後、全日制に移籍、さらに四十年四月、商工分離で昭和三十八年に開校した三条工業高校に移り、五十八年三月に勧奨退職するまで三十五年間にわたって、機械科の教諭として母校の教壇に立った。



県央工業高校の山岳部生みの親、高橋小一郎さん

山岳部OB会総会で創部五十周年記念の感謝状を受ける高橋さん



山岳部の一期生による卒業時の寄せ書き

山岳部1回生の寄せ書き（昭和41年3月）

三条工業高校では着任の年に山岳部を創設、同部顧問として指導に力を注ぎ、その年の大分インターハイに県選抜チームに同校から選手を送り出したほか、同年の岐阜国体にも県選抜チームに同校から選手を送り出して三位入賞を果たし、指導者としての手腕を発揮、山岳部の礎を築いた。

翌四十一年一月、雪の谷川岳一ノ倉尾根で発生した遭難事故で救助隊が雪崩に巻き込まれる二重遭難が起きた中、救助隊の一員として参加。

さらに四十八年には県高校体育連盟登山部の委員長を歴任、五十二年には日本山岳会越後支部の初の海外遠征ともなったヒマラヤトレッキングに秀峰山岳会の望月力さん（故人）に誘われて参加して報告書をまとめるなど新潟の岳人として知られた。

秀峰・望月さんとともに 教え子たちは秀峰の現役

その素地は昭和二十九年に入会した三条を代表する山岳会・秀峰山岳会で鍛えられた。当時、昭和三十年前後は谷川岳などを舞台に関東方面の山岳会との交流等で技術的にも格段の進歩をとげるなど、秀峰山岳会が最も輝いていた時期とされ、そんな中で〝アニキ分〟として慕っていた望月さん（故人）とともに技量を磨き、現在は創立会員以外では異例の名誉会員だった。

高橋さんは秀峰山岳会の創立六十周年記念誌で同山岳会について「高校登山、高体連登山という枠を超えて地域から県、国へと視野を広げることができ、技術、実力向上へのいい機会となった。高校生を連れて合宿に入るときも万一のことがあっても、私には秀峰という心強い後ろ盾があるという心の支えがあって活動できたことは有り難かった」と、秀峰山岳会とのかかわりが学生登山の指導にも大きく影響したことを振り返っている。

二〇一三年十月、山岳部創部五十周年記念事業で現役部員らと谷川岳登山に参加した高橋さん（黒い雨傘の人）当日は雨で登山中止

剣岳が大好きだったという高橋さん（向かって左端の当時ではハイカラなベレー帽の人が高橋さん）昭和三十二年八月の夏季合宿

五十二年十二月に脳こうそくを発症したがリハビリに努め、腕に若干のマヒが残ってはいたものの、翌年の二学期から職場に復帰。その後、約七年勤めたあと、五十六歳で勧奨退職の道を選択。岩室温泉病院（当時）のデイケアに通いながらリハビリと療養に努めていた。

山では「いやぁ、タンペ、タンペしたいや」と、ごなごなした様子で山頂にたどり着くのが定番。

工業高校六回生として山岳部で指導を受けた同校同窓会の事務局長、吉田光二元教諭（六三）は「ものごとをよく見通せる人でありながら、決して余計なことを口にせず、自分の背中、行動で教える先生だった」。

また、秀峰山岳会で同期の清水満洲雄さん（八三）は「高橋先生の教え子が秀峰の現役会員でたくさんいる」と、高橋さんの人柄、慕われていた様子がよく分かると振り返った。

妻の寿美さん（八二）と、長男夫婦、二人の孫との六人家族。

通夜は二十三日午後七時から、告別式は二十四日午前十時からで会場はいずれも善地院月岡式場。出棺は十一時。喪主は長男でつばめ福祉会の通所施設勤務の高橋哲朗さん（五六）。

くるま探し専門店
MOBILE SERVICE
モービルサービス
三条市猪子場新田270-6
TEL（0256）46-0029

夏のSALE開催
婦人服 ミノワ
三条市神明町☎三四－四〇五一
パルム2F

今日のメモ

▲新潟県倫理法人会長岡地区、NPO法人住民安全ネットワークジャパン第二回実践！未来創造セミナー△「日本創生」ジャーナリスト櫻井よしこさん（午後六時から長岡市立劇場）

▲移動採血車ゆうあい号による採血△午前9時～10時半＝新発田市役所豊浦庁舎△午後0時半～1時45分＝新発田市、白玉の湯泉慶△午後3時～4時＝同、豊浦病院

▲県夜間小児救急医療電話相談（午後七時～十一時、☎〇二五－二八八－二五二五）

【三条市】

▲県央医師会応急診療所夜間診療△内科・小児科・外科・整形外科（午後七時～十時受け付け、興野一☎三二－〇九〇九）

▲若葉幼稚園お泊まり会（二十四日まで）

▲中学校一学期終業式

▲三条白百合幼稚園年少児身体測定

▲特別養護老人ホーム長和園（大野畑）△喫茶C棟

▲なでしこ青空保育園（西四日町三）△四歳児ネイチャー体験ザリガニ釣り

▲三条市倫理法人会第千三百十一回モーニングセミナー（午前六時から元町、越前屋ホテル）△「偶然という必然に出会って（苦難）」河原井英二倫理研究所法人局法人スーパーバイザー

▲アルビレックス新潟レディース・上尾野辺めぐみ選手、北原佳奈選手W杯出場報告（午前九時から東新保、㈱コロナ本社技術開発センター）

▲本成寺公民館△孫育て講座（午前九時半から）

▲三条市シルバー人材センター入会説明会（午前九時半から市役所第二庁舎一階・同センター事務所）

▲保内保育所子育て支援センター「サトシンおてて絵本」（午前十時から下保内、同センター）

▲本成寺保育園子育て支援センター「くにじいじの子育て智恵袋」（午前十時半から西本成寺一、同センター）

▲三条商工会議所常議員会（正午から同会議所）

▲三条市教育委員辞令交付式（午後一時半から市役所市長室）

▲三条市中央公民館△パソコン教室（午後一時半、七時～）

▲三条市立図書館△さんじょう親子読書の日特別お話し会（午後二時から）

▲生きがいステーション保内の杜△南天星一座訪問・舞踊など（午後二時から）

▲小規模多機能型居宅介護施設なでしこ嵐南運営会議（午後二時から（同）施設）

▲県立三条テクノスクール在職者訓練（柳沢）△第二種電気工事士実技実践（午後五時から）

▲三条市社会福祉協議会救急法講習会（午後五時半から総合福祉センター）

▲三條信用組合信栄会夏季特別講演会△「どうなる日本経済！アベノミクスで景気は回復するのか？」経済ジャーナリスト須田慎一郎さん（午後六時から三条市横町二、餞心亭おゝ乃）△納涼会（七時四十分から）

▲三条エコノミークラブ七月例会△「周りの力を活かせるリーダーになろう！」吉崎利生㈲F&Cヨシザキ代表取締役（午後七時から三条商工会議所四階研修室）

ライダース・イン・ザ・スカイ　第82号

新潟県央工業高校（旧三条工高）山岳部ＯＢ会発行　2015.8.1

－高橋小一郎先生追悼号－

追悼　高橋小一郎先生

ＯＢ会会長　斎藤　勲（Ｓ41年卒１回生）

斎場で見る高橋先生の顔が小さくなった。別れの時が来たと思った。

気働きが出来、その才能を愛された渡辺五郎、長谷川一良、吉田光二氏等と違い劣等生の小生のことはいつもはらはらして見ておられただろうと思う。「1回生は苦労を知らないアンニャッコ」といつもたしなめられたものだ。卒業以来、人生の節目ふしめで随分と迷惑もおかけした。

ネパールへ５年連続で出かけた時は呆れた声で電話を頂いた。
笹岡へ越されてからは、粟ヶ岳へ登った帰りに時間が許せばお寄りして一服させていただくのが私の習わしだった。
雑誌「山と渓谷」に私の短歌が掲載されたのを見つけられて喜んで葉書を下さった。

OB会50周年谷川ハイクの折、雨の中、一ノ倉沢出合まで出かけたみんなを先生とバスの中で待っていた。手の不自由な先生の為に、さっきまで先生が使っていた折り畳み傘を畳んで差し上げた。畳まれて私から返された傘を一目見た先生は、何も言わずもう一度、もっとキチンと折り目どおり畳み始められた。折り畳み傘はこうして畳むのだと無言で言っているようだった。あれには本当に参った。思い出すと今でもグウの音も出ない。
近年は年に数回、手紙でのやり取りが楽しみであった。いつも母校山岳部のことを気にかけられ最後に一言書き添えられていた。その手紙ももう来ない。

人生も山登りも、良く考えれば色々な選択肢や楽しみ方が無限にあるのだと身をもって教えて頂いたと思う。
高橋小一郎先生、長い間ありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。

朱鷺草（とき そう）の咲く霧の中師は逝（ゆ）けり

合掌

－HP掲示板に掲載した訃報の記録－

7月21日　高橋小一郎先生がご逝去されました。7月21日掲示（吉田光二）

2015年7月21日、少雨だった越後平野に梅雨明けが報じられました。
そのすぐ後、14時7分に肺炎でご逝去されたという悲報が入りました。88歳でした。
ご高齢になられてからは、夜の会への出席を避けられておられましたのに、今年の同窓会総会には早々と「出席」のお返事をいただき、当日はお元気にご出席くださいました。
その前の「退職者の会」では、風邪で大事をとって欠席した私を案じられて「大丈夫らかね？」とお電話をいただき、恐縮したばかりでした。
若くして療養生活となられ、その後に療養生活となった私と、「若く病気になった者は一番長生きする」と慰めあっていました。

先生は 88 歳、米寿です。天寿まっとうだったのではないかと思います。
きっと同窓会総会には多くの教え子にお別れの挨拶に来られたのですね。
ＯＢ会総会は 11 月 14 日で寒く、待ちきれなかったようです。
長い間、お世話になりました。
高橋先生のご冥福をお祈りいたします。（合掌）

高橋小一郎先生の葬儀は以下に行われます。

7 月 21 日掲示（吉田光二）

通夜：7 月 23 日（木）19 時から　　告別式：24 日（金）10 時から
会場はいずれも善地院 月岡式場（ぜんちいん つきおかしきじょう）
住所 新潟県三条市月岡 1-7-40
電話 ０２５６（３５）００５１

一昨年のＯＢ会総会で山岳部創設 50 周年を記念して感謝状をお渡しした時の姿が思い出されます。
ＯＢ会から弔電と香典をお届けします。
問い合わせは吉田光二 090-4943-5927 まで。

高橋先生にささげる弔電です。

7 月 23 日掲示（吉田光二）

山岳部創設期から今日まで、山岳部をご指導いただきありがとうございました。
先生の教えは、いまだ現役部員に脈々と受け継がれています。
これからも、ＯＢと部員を見守ってください。
ご冥福をお祈りいたします。
新潟県央工業高校山岳部ＯＢ会

高橋先生の葬儀が滞りなく終了しました。

7 月 24 日掲示 （吉田光二）

7 月 23 日 19 時からの通夜式。ＯＢ会からの供花が式場に飾られるなか、通夜式がすすめられました。
ＯＢでは、斎藤勲会長、三村章司、長谷川晴一、長谷川一良、吉田光二、小森行也、熊谷善和、阿部孝幸、高山光の 9 名が参列。
山岳部関係の旧職員・職員では、小倉勝、本間久雄、増田繁雄、今井直樹、石川恵子の各先生が参列されました。
喪主からは、7 月 14 日に呼吸困難で緊急入院したが誤嚥性肺炎が進行していたこと。酸素マスクをしながらも最後まで意識明瞭で親族に感謝の言葉を発しられていたこと、などが説明されました。
翌 24 日の告別式は、斎藤勲会長、三村章司、長谷川一良、吉田光二が代表参列し、さらに小倉勝、本間久雄、若島正毅、増田繁雄の先生方が参列して行われ、出棺の後、旧宅のある市内・大町、秀峰クラブハウス、笹岡の自宅を経由して三条斎場で昇天されました。
法名は「釈諦念」（たいねん）－真理をさとる心－
喪主は 955-0152 三条市笹岡 1504-17　高橋哲朗　0256-46-4798

高橋先生の生涯の思い出の地。

7 月 30 日掲示（吉田光二）

高橋先生の終活ノートに生涯の思い出の地が四か所記載されていました。
剣岳、白馬岳、蓮華温泉、雷鳥沢です。
私のように健康に問題があっても蓮華温泉と雷鳥沢は行けそうです。
もし、足を運ぶ機会がありましたら、黙祷をささげてください。

今年のＯＢ会総会は追悼総会に　－11 月 14 日（土）－

1 月 26 日に事務局会議を開いて今年の総会日程を決定し、ＨＰに告知しています。
会場は旧下田村塩ノ渕にある「ウォータープレイかわせみ」です。

ぜひ、ご予定ください。

追悼集原稿の募集

ＨＰに掲載するデジタル追悼集を作ります。（希望者にはプリントして送付します）
①追悼文・思い出：字数は自由。ＯＢ会ＨＰの「ご連絡・お問い合わせ」ページからのメールで送って下さい。もちろん手書き原稿もＯＫです。その際は、下記へお送りください。
②高橋先生の思い出の写真：デジタルアルバムにします。1人1・2点。できたら撮影年月日、場所、説明をつけてください。ＨＰからメール添付もしくはプリントを下記にお送りください。

以上の〆**切は、8月末**とします。

955-0823　三条市東本成寺 13-1　新潟県央工業高校同窓会事務局　吉田光二宛
（プリント版希望も同様にご連絡ください）

今年の現役の活動（ＨＰに既報）

ボルダーリング・ボードが完成しました。4月30日　吉田光二
現役からの要請を受けて事務局で検討してきたボルダーリング・ボードが完成しました。
ＯＢ会の30周年記念で「クライミング・ボード（5m×3m）」は持っていましたが、普段の管理に問題があり近年解体していました。
計画は、それを活用して、100周年記念で建設された総合トレーニング場二階の壁にボルダーリング・ボードを作ろうというもの。
費用はＯＢ会が出し、同窓会名義で県に寄付するという方法をとり、県の正式な許可を得ました。（これによって万一の時は県が責任者になる）
写真一枚目は4月22日夜、斎藤会長、広瀬事務局長、平出先生、帆刈先生、吉田の5人がホールド・セット作業。この日はホールド限定のＡコースをセット。
なかなか難しいですよ。
写真二枚目は4月23日放課後、現役部員と平出先生によるその他のホールドセットと初練習。
写真三枚目は完成後の現役部員と平出先生。
という具合に完成して使い始めました。
ボードはW11730mm×H1820mm（一部2660mm）。ホールド数は120個です。総工事費は約10万円です。ぜひ、遊びに来てください。

県総体報告。6月9日　平出　厚
6月4日～6日糸魚川白鳥山での県総体が行われました。
大会に向けて、先輩たちから設営指導をしてもらい、様々なコツを教え頂きました。忙しいなか、駆けつけてくれたＯＢの皆さんに部員顧問一同感謝しています。
坂田峠を起点に白鳥山まで往復し、栂海新道を親不知まで下るコースを1年生も交えたチームで大会に臨んできました。結果は連覇には届かず3位となりました。
様々に応援して下さっているＯＢの皆さんの熱意に応えることができず、本当に申し訳ありません。

また、最初の 1 歩を踏み出せるように、改めて日頃の登山、部活動から丁寧に取り組みたいと感じています。
まずは、6 月 19 日～21 日長野県蝶ヶ岳で行われる北信越大会に向けて部員一同がんばっています。
今後も変わらずご支援下さいますように、よろしくお願い申し上げます。

北信越大会報告。6 月 22 日 平出　厚
6 月 19 日～21 日長野県蝶ヶ岳での北信越大会に選手 4 人と帆刈監督が出場してきました。結果は上位三校に与えられる優秀賞を頂くことが出来ました。
徳沢から長塀尾根を蝶ヶ岳へ上り、横尾分岐から下山、徳沢に戻る周回コース。寒気の影響もあり天気はわるく、せっかくの展望は下りで少しだけ槍ヶ岳が見えたぐらいだったようです。今回の大会に向けても、卒業生からのご支援感謝いたします。
次は夏合宿に向けてしっかりとした登山が出来るよう準備していき、そして来年に向けて活動を続けていきたいと考えています。
北信越に向けての応援ありがとうございました。

夏合宿について 7 月 13 日 平出　厚
夏合宿に向けての強化練習として、7 月 3 日加茂市水源池に幕営し、4 日粟ヶ岳山頂までメインザックでの山行を行ってきました。
出発直前に雨となり雨具を着て出発。登山口あたりでは足下の蛭が気になりました。第 1 ベンチで雨はあがり、暑くなく登りやすい山行だったと思います。予定の行動を全員で終えることが出来ました。
夏合宿は 8 月 9 日から 3 泊 4 日。
蓮華温泉を起点に白馬岳、朝日岳の周回コースを以下の通りの計画です。

8 月 9 日(日)　7:00 学校発　11:00 蓮華温泉発　15:00 白馬大池山荘着　(泊)
10 日(月)　5:00 白馬大池山荘発　7:30 小蓮華山　10:00 白馬頂上宿舎着
11:00 白馬三山サブ行動　14:00　白馬頂上宿舎着　(泊)
11 日(火)　5:00 白馬頂上宿舎発　9:00　雪倉岳　11:30 朝日岳水平道分岐　14:00 朝日小屋着（泊）
12 日(水) 5:00 朝日小屋発　6:15 朝日岳 14:00　小蓮華温泉着 15:00 蓮華温泉発　学校着 18:00

新潟県標高 1 位、2 位の小蓮華山、雪倉岳、今年の県総体の会場になった栂海新道の出発点朝日岳を巡り、山を満喫し、力をつけてきたいと思っています。
追伸
日程が合うＯＢの皆さん、県央工　石川・平出までご連絡下さい。
夏合宿に同行して頂ければ、部員達には刺激になり、ＯＢから指導して頂くよい機会とも思います。お忙しい時期と思いますが、もしよろしければありがたいです。

－事務局より編集後記にかえて－

インターハイ出場がならなかった今年は、カンパ要請号を発行しないで夏山合宿の報告を葉書でしようと思っていたところに高橋先生の訃報が入りました。

すぐにメール通信で連絡したものの、登録していないＯＢも多く、この号を急いで発行することにしました。

少なくてもお盆前に届けたいと。

期せずして山岳部の夏山合宿は高橋先生の「生涯の思い出の地」の一つである白馬岳です。現役は頂上で黙祷をささげる予定です。会長も同行を検討中です。ぜひご参加ください。

また、高橋先生の訃報を報じる三條新聞を印刷して同封しました。退職年などに誤りがありますが、高橋先生を偲ぶ資料にしてください。（作成・吉田光二）

編集後記にかえて

高橋小一郎先生の追悼集を作る行為はごく自然のことだった。

作るというより「作らなくてはならないもの」という認識だった。斎藤会長もＯＢ諸氏も同じ気持ちだったようだ。

だから、記念誌を発行するときのような難儀さは感じなかった。

「僕のような者が書かせてもらって良いのでしょうか？」

「書きたいことや思い出はいくらでもあります」

ＯＢたちは原稿を書き始めてから、思い出をみんな文章にできない苛立ちを感じたのではないだろうか。

「短くてもいいんです」という答えに、気を楽にして多くの思い出を寄せてもらった。

編集していて高橋先生は、「どこからみても、誰からみても、いつの時代にあっても、同じ姿勢で指導にあたられた」ことが良くわかった。山に例えれば富士山のように。

もっと語り合えばよかった。もっと聞いておけばよかった。もっと学んでおけばよかった。

そんな思いをこめて、遺稿のページを多くとった。

遺稿部分の入力と解説は斎藤勲会長にお願いした。

デジタル版への仕上げは猪熊尚洋事務局次長にお願いした。

この遺稿集は、末永く高橋先生に学び続けられるようにホームページで公開することにした。だから誰でも、いつでも読むことができる。活用を希望してやまない。

昭和 46（1971）年卒６回生　吉田　光二

発行日　　平成 27 年（2015 年）10 月吉日
発　行　　新潟県央工業高校（旧三条工高）山岳部ＯＢ会
発行者　　会　長　　斎藤　　勲（１回生）
編集者　　６回生　　吉田　光二